社会人と血迷うクリエイター必携書

一、見下す人々
二、社会人の主題は仕事ではなく権力だ
三、愛
四、合意していなくても女性は靡(なび)く
五、原初の旅、永遠の旅
六、病気は治るほうがいい
七、ZAP
八、リセット
九、あなたがフィクションをやれない理由
十、仕事が面白い人は少ない
十一、男の魂をすべて殺した
十二、教わる
十三、覗き見、推し活、マウント活
十四、バカにすることあない、ただ、やさしさ一件は忘れないでいこう

九折空也

2025年7月

一、見下す人々

人は、何をするにせよ、一定の自信が必要だ。

いくらかは、自信がなくては、まともに食事も作れないし、勉強もできない、服装を整えることもできないし、知人にあいさつもできない。

いくらかは自信がなくては、進学も考えられないし、就職活動もできない。

いくらかは自信がなくては、異性にアプローチもできないし、仕事に意欲を持つこともできない。

このことは、われわれの活動においてしばしば構造的な矛盾を為している。

なぜなら、たとえばいわゆる「婚活」ようなことをする人は、これまであぶれているから婚活をしているのであり、あぶれているということは、合理的には自信を持つに値しないということになる。

そもそもあぶれてしまうような奴だから、婚活が必要になったのだが、そんなことを言っていたら、婚活なんてことはできなくなってしまう。

できなくなってしまうのがいっそ正しいということもあるのかもしれないが、それではあまりに未来に向けて閉塞があり、かわいそうだ。

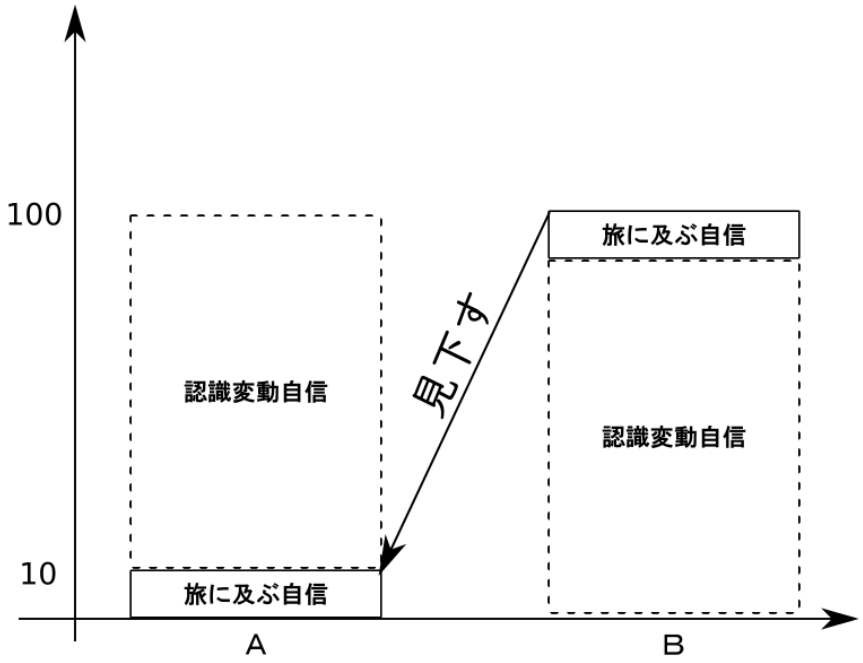
だから人は、活動にかかわって、架空の自信を創り出すということをする。

あたかも、銀行から借りた資金を手持ちにして、起業することのように、どこかから引っ張ってきた、実は自分のものではない自信を、手持ちにして活動をこなそうとする。

その、架空の自信を引っ張ってくる方法が、人を見下すということな

のだ。

次の図を見てほしい。



人は、父に対してはいつまでも子でありつづける一方、人々のあいだにあってはいつまでも子供でありつづけることはできないので、年齢と立場に相応ていどの、仕事や営為をこなせなくてはならない。

そのていどを仮に数値化されたレベル１００ということで捉えたとする。

レベル１００の仕事・営為に取り組むには、自信がやはり数値として１００なくてはならない。

しかし多くの人々は、じつのところ、そこまでじゅうぶんな体験を得てきてはいない。

体験を得ていれば、そのぶんの自信を得ていようが、じつはそこまで体験をしているわけではないので、じっさいに本当の自信と言えるような自信は、１０ていどぐらいしか持ち合わせていなかったりする。

図中、「旅に及ぶ自信」というのは何のことであろうか。

旅……仮にあなたが、Ｘという場所をじゅうぶんに旅してきたとして、その旅から帰ってきたところ、

「Ｘはどんな場所だった」

と訊かれたとして、あなたは自信を持って問いかけに答えることができるだろう。

それが、旅でなく、仮にＸ地区に行って用事を済ませてきただけという場合なら、あなたは、

「どんな場所だった」

と訊かれたとしても、あまり自信はなく、

「うーん、さあ？　まあふつうの場所でしたよ」

としか答えられないはずだ。

あなたが受験生だったころ、仮に数学をしっかり勉強したとしても、その受験勉強の成果は、十数年も経てばだいぶおぼろげになるまでに消えかかっているはず。

消えかかったそれについて、あなたが、

「もうあまり自信ないね」

と言うのは、あなたがそのときにした受験勉強が、「数学への旅」とい

うまでには及ばなかったからだ。
仮に、あのとき自分はたしかに数学への旅をしたと捉えられるようなら、細かなところの記憶は参考書を確認しなくてはならないにしても、もうすっかり自信がないという様態にはならないものだ。
われわれが本当に得る、本当の自信と言えるものは、旅に及ぶ自信なのだ。
習ったことや、覚えたことではなく、旅に及んだものが自信。
たとえば、服飾にかかわってセンスに自信のある人でも、どこまで本当の自信があるかというと、迫られたらけっきょく引き下がるていどには薄弱なもののはずだ。
自分がいつかのとき、服飾への旅に出たのだということでもないかぎり、われわれが自負しているセンスなどというものは、真の自信にはならない。
そうして考えると、われわれが持っている真の自信、本当の自信などというものは、数少ないものだし、量も少ないものだ。
とてもレベル１００の仕事や営為をこなすのに十分な自信量は持ち合わせていない。
だからわれわれはしょっちゅう、本当のそれではない自信を、どこかから９０ほど引っ張ってこなくてはならない。
われわれは思いがけず、そういう無理を日常的にして、生きているものだ。
まして世界には、ごくまれに、数少ないものではあるが、本当に１００の仕事・営為を体当たりでこなせてしまう人が存在する。
旅に及ぶ自信を１００まで得てきている人も存在するのだ。
それで、自分も大人として、その人と似たようなことはこなさなくてはならないのだから、われわれは多くの場合で、その不足分９０をどこかから引っ張ってこなくてはならない。

このことはふたつのタイプに分かれる。
図中Ａは、「だらしなくて、空想で自信を補充するタイプ」だ。ちょっと髪の毛を染めたり、奇抜な服を着たりすると、それですぐに別の気分のキャラクターになりきってしまう。少なくともそういうふざけ方で盛り上がってしまう。そういうタイプがこのＡに多い。
タイプＡは、本当の自信の「上」に、不確かな空想的自信を積んであるので、その不確かな自信が変動する、その頼りなさによってだらしないタイプになるのだ。
いっぽうでＢのほうは、本当の自信の「下」に、不確かな自信を押し込んである。
このタイプは、構造の上部にたしかなものを置いているので、表面上、だらしない人にはならない。
ただそのぶん、このタイプＢの人は、「プライドが高い」「プラウディな」人になる。
プライドが傷つきやすく、神経質で気難しいという性格を負いがちだ。
ただしそのぶん、対外的にはきっちりした者として振る舞おうとし、その意味では頼りがいのある人にはなる。
タイプＡもタイプＢも、それぞれに得手不得手があり、メリットとデメリットがあるのだ。
タイプＡはだらしなくて頼りないが、プライドは高くなく、気難しくないので友好的に付き合いやすい。
ただ、そのだらしなさゆえに、付き合っていると時に際限なく空想的で、薄弱で遊蕩的、その不毛さを味わわされることもある。
タイプＡは、友好的に付き合いやすいが、肝腎なことに及んでは、けっきょく「ちゃんとやれない」人ということが露見してくることが多いのだ。
ふざけてしまったり、茶化したり、チョケたり、意識がぼんやりした

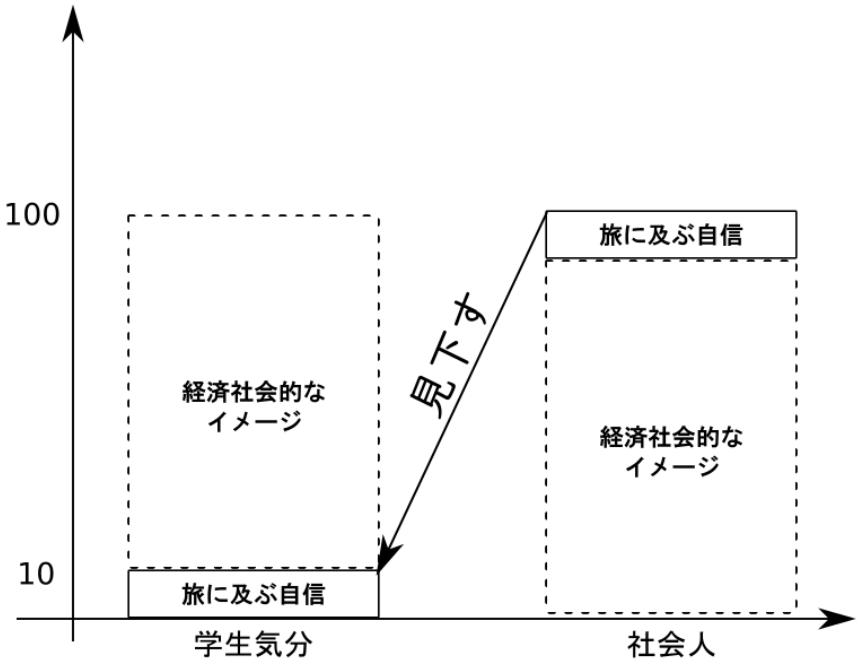
りなどして、大事なことを大事にやれないということが起こってくる。
そのことが度を過ぎるようだと、やはり付き合いきれないという面は出てくるわけだ。
それで、タイプＡとタイプＢはどう係わってくるかというと、ここにはタイプＢがタイプＡを「見下す」ということが起こってくる。
このことは、回避不可能だ。
とてつもない、回避不可能なこととして、このことは起こって来、どうしようもなく巻き込まれていく。
見下す。
人は人を見下すのだ。
どうしてもそのことが起こってくる。
見下すということを回避することはできない。
回避する方法があるとしたら、それはただひとつ、いつまでもレベル１０の仕事・営為にしか接触しないということだけだ。
駄菓子を食べたり、寝転がってマンガ本を読んだりする、そのことだけを続けていくなら、人は人を見下さずに済む。
人が人を見下すのは、自分に自信が足りていないからなのだ。
自分の自信、旅に及ぶ自信が１０しかないのに、レベル１００の営為に向き合わされるとき、それはじっさいには不可能ごとになる。
どんなビデオゲームでも、レベル１０の主人公で、レベル１００の敵を倒すことはできない。
自信がないから、足りないから、人を見下すしかなくなってくる。
タイプＢ同士は、それぞれ構造が同じだから、見下しにくく、それでタイプＢはタイプＡを見下すようになる。
タイプＡが、そのだらしなさや、だらしなさゆえのチョンボを見せると、タイプＢにはもう爆発的に「見下す」ということが起こる。
それほどまでに、人は、自信の不足に苦しみ、本心では怯えている。
本当にはレベル１００の営みなどまるでやれていないのだ。
レベル１０のままレベル１００の営為環境に置かれており、人はずっと怯えつづけ、ずっとパニック状態で生きている。
本当は右も左もわかっていない。
しかも、レベル１０でいて、それがレベル１１になるための方向や道しるべも得られていない。
右も左もわからない、何をどうしたらいいか、なにひとつ本当にはわかっていない、そういう環境に置かれつづけている。
「誰か助けて」
こころの奥底ではずっとそう叫んでいる。
でも誰も助けてくれないし、誰に甘えさせてもらえるわけでもない。
そこで、人を見下すと、そのときだけパッと自信が得られ、自分がたしかなものに立脚している気がしてきて、迷子の不安と苦しみを逃れることができる。
だから、いつからかはもうほとんど常時というほど、自分の内部に、人を見下すという回路がはたらくようになっている。
わかりやすさのために、わたしはここで、あなたに意外な話をしよう。
仮にあなたが、わたしよりも、一般的な仕事の能力が低かったとする。
目の前の案件に対する理解、またそれに対する適切なアクション、創造的なフローの組み方、係るコミュニケーションの正確さ、意欲と積極性、そもそもの係る気分のよさ、それらのすべてにおいて、あなたの能力はわたしのそれより低かったとしよう。
その場合でも、わたしはあなたを見下さないのだ。
一通のメールを、あなたが読解できなくて、わたしが読めば数秒で内容のわかることだったとしても、わたしはそのことであなたを見下さない。
あなたの読解力や、状況からの類推力が低かったとしても、わたしは

そのことであなたを見下さない。
あなたが、地図を読めなかったり、自動車の運転がヘタだったり、物事の説明がたどたどしかったり、センスがなくて服装がダサかったり、ユーモアやウイットのていどが低かったりしても、わたしはそうしたことであなたを見下さない。
わたしは立場や状況において、あなたにはっきりと、次のようなことを言うかもしれない。
「あなたは自分の業務を理解できていない」
「あなたはまだアイディアを出せるだけの知性を持っていない」
「あなたはいまのところコミュニケーション能力が不十分だ」
だがそれによってわたしがあなたを見下すということはないのだ。
なぜわたしがあなたを見下さないかというと、わたしには自信の不足がないからだ。
自分が取り組む仕事や営為について、わたしはそれをこなせるだけの自信をすでに持っている。
そうした自信を持てるだけの、体験をこれまで得てきているのだ。
だからわたしはあなたを見下す必要がない。
虚勢を張る必要がないのだ。
ここで、あなたを見下す人は、何か強烈な事情があってその見下しをしている。
あるいはあなた自身が、誰かを見下す側だったとしたら、あなたには強烈な事情があってその見下しをしている。
本当はレベル１０なのに、レベル１００の場所に立たされて、それがこなせて当たり前という自負と立場になっている。
本当は右も左もわかっていない。
コンパスがなくて東西南北もわからないまま、何年も過ごすうち、あなたは何の根拠もなく、「こっちが北だから」とやけくそで決めつけてしまった。
だからずっと迷子で、ずっと不安で、ずっと怯えて、ずっと苦しんでいる。
その膨大な苦しみを、人は、他人を見下すということで自己救済している。
もちろん本当の救済にはなっていない。
人を見下せば見下すほど、その行為はとうぜん業（カルマ）となって蓄積してゆき、必ずその償却分を、後の自分が背負うことになる。
それは単純に、これまで自分が見下してきたぶん、自分も見下されなくてはならないということだ。
「本当にはあなたは何もできないじゃん」
「気取っているだけで、本当のことができるってわけじゃないですよね」
「プライド高いから、本当のことになんか何もできないってことを、とても人に対して認められないんでしょ」
「あなたは、プライドがおびやかされると、いつもヒステリーを起こして、無理やり自分が正しいってことにするじゃん」
そうしたことで、容赦なく、根こそぎ、見下されなくてはならない。
それは、かつて自分のしてきたことだから因果応報だ。しょうがない。
見下してきたぶんはみずからも見下されよう。
ただそのことの苦痛は、想像を絶するもので、そのような苦痛を受けるぐらいなら、もう悪魔に魂を売ったほうがマシかもとさえ、人は真剣に考えるものだ。
もちろん、悪魔に魂を売ったとして、より悲惨なことになるだけなので、人はそこまで愚かしいこともけっきょくはしない。
それでどうなるかというと、人はもう、雪隠詰め、もうどこに向けても進まなくなるのだ。
あっちにいったり、こっちにいったり、進んでいるふりをするだけで、

すでに八方ふさがりなのはわかっており、だから進みようのない閉塞の中をぐるぐる歩き続けている。
それが本当に閉塞しているということに直面するのが怖いので、うろうろ、あたらしい方針へ歩いているようなつもりになり、都度に自分を励ましている。
タイプAの人は、自分を見下さない人がいるということを知り、その人に出会わなくてはならない。
そして気づかなくてはならない。
タイプAの人が、自分で空想している自信、空想でおぎなっている90の自信を、^^目の前の人は空想でなくじっさいの体験としてきているのだ∨∨のだということに気づかなくてはならない。
タイプBの人は、自分が見下す人なのだということを知り、そうでない人、見下すという行為の必要性を持っていないに出会わなくてはならない。
見下さない人は、本当に旅をして来られ、旅に及ぶ自信を得ており、人を見下す必要がない。
自分にはそれがないから、知らず識らず人を「見下す」ということをしているのだと気づかなくてはならない。
そのような旅を得てきていない自分は、価値観や性格の問題ではなく、^^強迫観念としてその「見下す」ということがやめられないのだ∨∨ということに気づかねばならない。
90＋10というプライドの構造上、人を見下すということは、^^激烈な「発作」として現れている∨∨ということに気づかねばならない。
現代のわれわれは、多くいつも、発狂しそうな崖っぷちに立たされている。
タイプAは、自信の九割が上積みされた空想上のものでしかなく、それが空想でしかないと直面するなら、
「もうどうすることもできないんだ」
と叫びだしたくなる。そのような閉塞感に苦しめられている。
タイプBは、自信の土台の九割がいつでも崩壊しかねない空疎なもので、ふと気づくとすべてが「自分には無理」と思え、そのことが破滅的におそろしく、その恐怖のたびに、^^人を爆発的に見下したくてたまらない∨∨という感情に襲われている。
アイドルグループの端っこにいる誰かが、あまり美人でなかったら、
「この子は何も美人じゃないよね？」
と、全力、必死で見下そうとする。
料理の見栄えが悪かったり、部屋が散らかっていたり、漢字の読み書きが誤っていたり、そうしたことがあると、全力、必死で見下そうとする。
タイプAもタイプBも、憂き目は同じだ。
わたしはどちらのタイプにも、それぞれの旅を問おうと思う。
旅を問われたらもうそれで投了だろう。
旅を問われるなどという、のっぴきならないことが示されると、タイプAの知能は恣意的に曇り、顔はだらしなくポカーンとなり、眠るような空想を広げ始める。
タイプBは、自分の旅を答えられなくて、「ぜんぜんダメだわ」ということで、なぜか他人の誰かを激烈に「ぜんぜんダメでしょ」と見下しはじめる。
そのどちらも、すでに高圧の強迫観念になっており、だからこそ現代のわれわれは「癒し」と言い張り、レベル10どころか5とか3とかしか要さない、推し活やらソーシャルゲームやらに興じているのだ。
わたしはいまも、これからも、わたしのしかるべき旅の中を、生き続けていこうと思う。

［見下す人々］

二、社会人の主題は仕事ではなく権力だ



「社会人」という言いようは、感触としてはキツさがある割に、区分しようとする定義は不明瞭だ。それはつまり習慣的な言い方ということであって、そうした習慣的な俚言こそわれわれのうちに流通しやすい。

よく、典型的に言われるのが、「学生気分の抜けないうんぬん」ということだが、それはつまり図中のような「学生気分」を指しているのだろう。

たとえ受刑者の自覚がなくても刑務所に入れられればその人は受刑者に違いないことのように、企業に雇用されれば自覚がなくてもその人はすでに従業員に違いなかろうが、それでも学生気分と呼びたくなるそれはたしかに存在する。

企業に雇用されたからといって、それで誰もが誰も、経済社会とその生産性への「旅に出た」ということにはならないだろう。よってこれもタイプAとタイプBに分かれ、タイプAは社会人という空想的自信を上積みしてあるだけなので、いくらでも変動し、その変動がだらしなくて頼りない。それが新卒だと「学生気分」と映る。一方タイプBは、不確かな体験をどだいに据えて確たる自分を持ち上げているので、表面上はだらしなくないが、その実態はプラウディで神経質だ。

そしてやはりBはAを見下していよう。先の章に説明したところと同じで、そうして人を見下すということに強迫的・爆発的な感情が伴い、つまり「発作」としてそれが起こるのは、Bがそれを自信９０の供給源にしているからだ。

そしてやはり、真の旅をしてこられた方は、そこに「見下す」という衝動を持っていない。

真の旅をしてこられた方は、Aに対し、

「そのちゃらんぽらんさは、いつかお前自身の大きな事故につながるぞ」

と厳しく警告するかもしれないが、そのちゃらんぽらんさに対して「見

下す」という態度と発想を持たないのだ。ただ「危ない」と、そのリスクを覚え親身に警告をするのみ。

「社会人」という言い方は、よく流通しているのにその定義はあいまいだ。たとえば画家のモネや、音楽家のモーツァルト、あるいは詩人のウィリアムブレイクは「社会人」だったのかと言われると、なかなか返答に窮する。

彼らはすでに社会的に大きな承認を得ているし、社会的に知られた作品を供給しているので、その点で感覚的にはじゅうぶんに社会人と言い得そうではあるが、特にウィリアムブレイクなどは生前にはあまり評価されなかったので、当時の世間としては何かぶつくさ、絵を描いたり詩を書いたりしている変人という扱いだったかもしれない。それではブレイクは死後に社会人になったのかということになり、そのことはいかにも奇妙な感じがする。

ガンジーは社会に大きな影響を与えた人だが、それが「社会人」だったのかと言われると、それもいまいちあてはまりにくい。あるいは吉田松陰だって、彼が社会人だったとはあまりにも言いがたい。暗殺計画を政府にアジテートして死刑に処される社会人などというものは聞いたことがない。しかし吉田松陰がなければいまわれわれが生きている日本社会も存在しないというのもよく知られている史実だ。

「社会人」という語が指し示すところの感触は、つまるところ、現代で言えばコンプライアンスということに尽きる。明文化されているものでなくても、社会通念上のコンプライアンスがあり、それに拘束されている度合いの高い者から順に、その人には「社会人らしさ」があることになる。

わざわざ言うなら、

「経済社会から享ける利得を本とし、その利得に相応して経済社会からのコンプライアンスに束縛を受ける度合いを高くする者、その浸潤のありさまを社会人〝らしさ〟と覚える」

ということになるだろう。

ブレイクや吉田松陰は、経済社会から享ける利得を本としていなかったし、経済社会のコンプライアンスから束縛を受けていなかったので、彼らには社会人らしさがない。

社会人らしさを形成するものが、けっきょくのところ利得とコンプライアンスだということは、そもそも社会人の主題・モチーフが、仕事にはなく権力にあるということを示している。

われわれはよく誤解しているが、仕事をしている人が社会人なのではない。

権力を主題にしている人が社会人だ。

われわれはよくここのところを誤認している。

学生が、学校を卒業し、あらたに社会人となり、労役していく中で、彼は無邪気に、どことなく教わったとおり、

「これから社会人として一人前の仕事をできるように……」

ということを考える。

その心意気は佳いもので、美徳に属するものだとわたしは大いに認めるが、原理的にはそれは社会人ということにはあてはまらない。

あえて言うなら、社会人は仕事などしていないものだ。

あなたが月曜日の朝から目撃している違和感の正体はそれだ。

社会人は仕事などしていないのだ。社会人の主題は仕事にない。

社会人の主題は権力であって、仕事などにはないのだから、「社会人として一人前の仕事を」と考えているのは、原理的には誤りだ。

もちろん世の中には仕事をしている人もいる。

街角にある、ただのおっちゃんがやっている、ただのうまいラーメン屋は、ただお客さんにうまいラーメンを食わせる、そのためのラーメンを作る、という仕事をしている。

ラーメン屋のおっちゃんだって、家賃は払わないといけないし、銀行に支払う金利があるかもしれないし、調理器具をリースしているかもしれず、リースはフルペイアウトしなくてはいけないし、飲食店である以上は食品衛生責任者を置かなくてはならないし、税金だって払わなくてはならないから、その意味では社会人ではある。

けれども、よくよく視ると、それらの権利関係は、おっちゃんの作るラーメンの味に直接の関係はない。

おっちゃんは、うまいラーメンを作り、うまいラーメンを食わせるのが仕事で、客が「うまい」と言ってくれるのが本分であり、それでお客さんがひっきりなしに来るのが本懐だ。

もちろん、そのことを続けていくためには、それなりにお代ももらわなくてはならないが、そのお代をもらって、そのラーメン屋を続けていけるというのが、おっちゃんの仕事のありようだ。

そしてわれわれは、こういうおっちゃんに対して、あまり典型的な「社会人！」という印象を受けない。

一方であなたが、たとえば携帯電話・スマートフォンの販売員として、某社に正規雇用されていたとする。

するとあなたの仕事は、店頭に立ち、来客に適切な説明とアピールをし、携帯電話を買ってもらうことだ、という気がする。

しかしそれは誤りだ。

この場合、それこそ「社会人の自覚を持て」ということになる。

各社の携帯電話を売らなくてはならない、なんて仕事はあなたにはない。

そうではなく、あなたは、販売店のスタッフとして、〝課せられたノルマを果たさねばならない〟のだ。

ノルマを果たさなければどうなるか。それは、人事考課に影響する。

会社は、あなたに給料という経済利得を与えるぶん、あなたにノルマを課す権力を有しており、あなたの処遇を決定する人事権を有しているのだ。

携帯電話なんか何ひとつ関係ない。

課長が、あなたにノルマを課し、人事部が、あなたの人事処遇を決定する。

それが「権力」であって、社会人の主題はその「権力」だ。

部長・課長は、それぞれ部と課の賦課金をペイせねばならず、それがペイできないと、経営層から人事権を振るわれて処遇を下げられる。

経営層は、期待されている収益を株主に配当せねばならず、それがペイできないと、やはり株主から人事権を振るわれて更迭される。

社会人の主題はこの「権力」にあるのであって、携帯電話やスマートフォンを売るというような「仕事」にはない。

わたしは、そんな社会人なんて不気味なことはやめて、携帯電話やスマートフォンを、気分良く説明・販売するという仕事をしたらいいと思うのだが、とにかく、そうした仕事は社会人の主題ではない。

このことは、社会人になって数年も経てばわかることだ。

月曜日、朝から出社して、職場に「仕事」をしている人など誰ひとりいない。

ミーティングに集まっても、その会議室に、「仕事」をしている人なんて誰ひとりいない。

それは、奇妙な光景に見えるが、社会人としては当たり前の光景だ。

そこにあるのは、権力に庇護される者と、権力に攻撃される者の集まりであって、それは仕事をする人の集まりではない。

あなたの立場が販売員だったとして、あなたの取り扱っている携帯電話やスマートフォンが一台も売れなかった場合、そのことじたいはあなたにとって痛くも痒くもないのだ。

そうではなく、課せられたノルマが果たせないということ、それによ

って権力から攻撃を受けるというのが、あなたにとって痛いことだ。
じっさい、株主が、経営層が、部課長が、
「売れなくていいよ〜」
とにっこり微笑むなら、あなたの販売実績ゼロなんて、あなたにとって何の憂いでもない。
それが先ほどのラーメン屋のおっちゃんとは違う。
仮に、ラーメン屋のおっちゃんが、資産を百億円保有していたとする。
それでも、そのおっちゃんにとっては、
「うまいラーメンを客に食わせるのがワシの仕事なんだ」
ということであれば、保有している資産など関係なく、彼はその仕事をこなさねばならない。
店にお客さんが来てくれず、ラーメンが一杯も売れなかったら、おじさんは「仕事」としてどん底だ。
全身全霊で作っているつもりのラーメンが、さっぱり売れず、客に来てもらえず、食べてもらえなくて苦しんでいるということなら、モネだって吉田松陰だって親身になって、同情して一緒に悩んでくれるだろう。
そのようなとき、人は社会人ではない。
このラーメン屋のおっちゃんと、モネと、吉田松陰が、一か所に集ってみんなでウーンと考えてこんでいるとき、彼らの主題は「仕事」だ。
だから社会人という感じがしない。
コンプライアンスがどうこうということも主題に関わってこないので、やはりこのとき彼らは社会人ではない。
社会人の主題は権力であって、権力というのは、つまり処遇や処分を決定する能が付与されているということ。
わかりやすくいうと、<<困らせることができる>>ということ。
その中でも特に、メシを食わせる・食わせないを決定できるということだ。

権力者は、すぐにでも、われわれに「食事禁止」を決定することができる。
食事禁止が決定されたところで、われわれがメシを食えば、それだけで違法となり、われわれは犯罪者として処刑される。
われわれはたいへん困らされるわけだ。
こうして人を困らせることができる能力のことを権力と言う。
食事禁止なんて、そんなでたらめな法律はない、と思われそうだが、それはまた社会を誤解している。
そこを誤解しているから、われわれは「社会人」ということで混乱したままなのだろう。
法律は権力者が作っているのだから、食事禁止の法律を作ることはすぐにでも出来てしまう。国会で議員らが「やりましょう」と言えばそれで完了だ。
いくらでも、そうしたでたらめが出来てしまうから、人類は憲法というものを創り出した。
権力者をさらに支配する権能として憲法という偉大な建前がしつらえられている。
そしてそもそも、権力者を選出する権利じたいを個々の国民に帰属させたので、われわれは権力者をコントロールできるという仕組みなのだ。
これらの仕組みがなかったら、あるいはこれらの仕組みが力で停止させられたら、われわれは権力に蹂躙されるがままになる。
社会人の主題は権力なのに、われわれは、その権力というものの仕組みをよくわかっていないのだ。
販売員のあなたにとって、店長や課長というのはどういう存在か。
仕事の上長、ではない。
店長や課長は、<<あなたを困らせることができる>>存在だ。
つまり、気ままに、

「お前はきょう、夜中の二時まで残業な」
「販売員の容儀として、頭を丸坊主にしてこい」
「お客さんが来たら裸踊りをして大声で唄え」
と、課長はあなたに命じることができる。
そんなことを命じられたら、あなたは困るだろう。
では、困らされたあなたは、どのようにその困難に対抗するかというと、警察や裁判所に訴え出たり、労働基準監督署に報告・相談したりして、不当な業務命令に対抗しようとする。
そのように対応されるとどうなるか、それはもちろん、今度は課長が「困る」ことになる。
つまりあなたは、より大きな権力を頼り、自分が課長に困らされるのではなく、自分が課長を困らせる側に回るのだ。
このように、権力とは、相対的な実力として、どちらがより大きく相手を「困らせる」ことができるかという、尺度のことを示している。
そして、その権力が社会人の主題であって、社会人というのは常に、
「人に困らせられるのはイヤだ」
「せめて人を困らせる側でありたい」
という思念の中を生きている。
この中で、携帯電話が何台売れたとか、スマートフォンが何台契約されたとか、そんなことはまったくどうでもいいということがわかるだろう。
自分が困らなければそれでよく、常に、自分が困らないかどうか、ということだけに意識を置いている。
それが社会人だ。
一方で、ラーメン屋のおっちゃんが作るラーメンが、おいしかったとして、それで誰が困るというわけではない。
だからラーメン屋のおっちゃんの主題は権力ではない。
ラーメン屋のおっちゃんの主題は仕事だ。
われわれはそうしたおっちゃんから「社会人」という直観を受けない。
権力というのはつまり「困らせパワー」でしかなく、社会人というのは、この「困らせパワー」の相対的な強弱・大小を競いあっている仲のことだ。
たとえば、テレビタレントを困らせる力を持っているのはスポンサー企業だ。スポンサー企業が特定のテレビタレントの出演にＮＧを出せば、そのテレビタレントはテレビ番組に出演できなくなり、メシが食えなくなって困る。
そしてスポンサー企業を困らせることができるのは、一般の消費者たちだ。消費者たちがあちこちで企業イメージを悪く言い、不買運動のムードを起こしていけば、スポンサー企業としては困る。
だから、一般の消費者は、テレビタレントに対して「困らせパワー」の権力を持っていることになる。
近年、コンプライアンスの観念から、テレビタレントへの攻撃が相次いでいるのは、むろん社会正義の情念からではなく、権力の行使衝動からだ。
自分が、誰かを「困らせる」ことができる、それが権力の愉悦だ。
ふだん、自分が権力に「困らされる」ことが多く、その愉悦の犠牲になっていると感じることの多い人ほど、自分の権勢を取り戻したく思い、テレビタレントを「困らせよう」とするムーブメントに参入する。
自分が誰かを「困らせる」側に立ったとき、その困っている側の人を「見下す」ことができ、その見下すという行為によって愉悦を得、社会人として自信を恢復することができる。
だから、モネやブレイクや吉田松陰やラーメン屋のおっちゃんは、芸能人を困らせて自信を恢復しようという衝動や発想を持たない。
あなたに残業を命じ、丸坊主を命じ、裸踊りを命じた課長が、行政か

ら反省を命じられ、会社からは免職を告げられ、警察からは出頭を命じられ、司法からは罰金と禁固刑に処されたとき、あなたは留飲を下げ、あらためてその元課長を見下す。

見下すことにあなたは愉悦を覚え、あなたは自信を恢復させる。

その様態はいかにも「社会人」だ。

人は少なからぬ場合において、生涯のうち一度も何らかの仕事を主題にしたことがないまま生きていくものだ。

社会人の主題は仕事ではない。

社会人は、永遠に「仕事」を知らないまま生きる。

「社会人」の誰かが、仮にこの文章を読んだとしても、その人はここで書き手が何らかの仕事を果たそうと試みているとはまったく読み取らない。

その人は必ず、表面上をうつろに読み進めながら、内心のいちばん奥で、

「この人を困らせるにはどうしたらいいかな？」

ということを考えているものだ。

そうして、困る・困らせるということしか考えられず、仕事というものから魂が最も遠い者が社会人だ。

［社会人の主題は仕事ではなく権力だ］

三、愛

わたしが旅先で、何でもない美術館に立ち寄ったとする。

その入口で、同じように旅行中らしい若い女性の二人組がいて、

「思ったより入館料高くない？」

「えっどうしよう」

「うーん、どうする？　やめとこうか」

みたいなことを言っていたとしよう。ちょっと残念そうだ。

わたしはそういうとき、仮にだが、次のように言い出しかねない。

「なんだなんだ、せっかく来たんだから見て行けばいいじゃん。入館料ぐらいおれが出してやる」

そのように申し出ると、二人組の女性はとうぜん、

「えっそんな、悪いですよ」

と謝絶しようとするだろう。

するとおれは、

「なんだ、そんなことどうだっていいだろ」

と言い、勝手に入館券を三枚買い、二枚を彼女らに押し付けて、わたしはさっさとひとりで入館してしまうに違いない。

わたしはこういうときの、自分の挙動について、いよいよそれは単純に愛なのだと宣明することにした。

原理的にそれが愛なのだということがいいかげんわかったからだ。

ここで、仮の話であれ、ここに示されているのはわたしの善意ではない。

わたしは、他人の出費を肩代わりしてやれるほど金持ちではないし、

仮にわたしが億万長者だったとしても、善意という原理で人に何かをしてやるということが似合うような柄をしていない。
もしわたしが億万長者で、善意からの活動が有為かつ必要だということになれば、わたしは善意を専門とする有能マネージャーでも雇い、どのように善意を分配するかはそのマネージャーに一任するだろう。
わたしは愛によって挙動するが、ここで愛というのは、若い女性の二人組とセックスするということではない。
いよいよわかったのだが、わたしが愛というとき、それはもうはっきりと、
「わたしの父がそう求めているから」
ということ、それが原理なのだということがわかった。
愛という現象は、わたしの内部にはないのだ。
わたしの想いのうちに愛という種類があるわけではない。
父といって、もちろん実父とか養父とかいうことではなく、もっと誰のものでもない父、誰のものでもある父というような存在があり、それが父である以上、わたしはその父に対しては「子」なのだ。
愛という現象があるとしたら、その現象は父の側に帰属しており、わたしの側にはない。
わたしはただ、その父の現象に対し、子として従順なだけだ。
どうすればいいのかなんて、わたしにはわからないし、どうなっているのかというのも、わたしにはわからない。
ただ、わたしは随所で、しかも年次を経るたびにますます色濃く、もはや聖霊に導かれているとしか言えないという挙動を取っているということをみずからに認めている。
そのことは、逆に言うと、
「何をどうしたらいいかなんて、おれ自身には本当に一ミリもわからない」
ということの告白なのでもある。
どうしたらいいかわからないので、聖霊の導きに従っているのだ。
そしてこのことについて最近、「父と子」という現象が重なっているということが、わたしなりに発見されてきた。
それらは分離できないものなので、どこかで聞いたような言いよう、「父と子と聖霊の御名によって」というやつは、マジなのかもしれないと思う。
ただわたしは、わざわざクリスチャンではないし、教会に通ったことなど一度もない。
わたしがいま話しているのは聖書のことではなく父のことなのだ。
聖書に正確にどう書かれているのかは、わたしは知らないし、そんなことはどこかの専門家がどこかで詳しく語っていればいいと思うのだが、わたしがいま話しているのはそのことではなく、ダイレクトに「父」のことだ。
父があり、わたしは子でしかなく、そのときたしかに聖霊の導きみたいなものは、ある、と言わざるを得ない。
仮にそれが、わたしの妄言・世迷言に過ぎなかったとしても、じっさいわたし自身においてはそれが稼働して機能してしまっているのだからいかんともしがたいところだ。
わたしは宗教観の話をしているのではなく、わたし自身に起こる事実についてのみ話している。
わたしはいよいよ、
「もうこれしかやり方がない」
と述べているつもりだ。
何をどうしたらいいかという、便利な方法はけっきょく存在せず、方法がないがゆえに、いつのまにかこうなったというのが正直なところの顛末だ。

愛は、わたしの内にあるわけではなく、ただ「父がそう求めているから」という形で存在しており、それがなぜなのかはわたしにもわからない。

ただうっすら知らされるのは、若い二人組が美術館の前で躊躇していたとして、美術館の中に何が展示されているのか、わたしは知らないし、さして興味もないのだが、なんとなく、その展示を見て回るほうが、ほんのわずかでも、その二人の女性はわたしの言う「父」の御許に近づくような気はするのだ。

だから、父は、「来させなさい」と求めている。

わたしにはどうしてもそのように聞こえるし、どうしてもそのことが聞こえる。

それについて入館料の数千円が何だというのだ。

それでわたしの手持ちが尽きれば、そんなものヨソの誰かにタカり、必要分をむしり取れば済むだけのことだ。

父が、「来させなさい」と言っており、それだけが愛なので、わたしはその愛によって挙動する。

そのことについて、わたしの想いは特にないが、それでも愛のよろこびは大きくあり、その愛のとおりにはたらくとき、わたしはわたし自身に無上の「勝ち」を体験する。

わたしにだって、体調の悪いときなどがあり、いつもいつも、その愛のとおりに挙動できるわけではないが、そういうときは勝ち切れなくて無念とは思いながら、それでもわたしはこの「勝ち」ということを主題に生き続けている。

わたしは、すべての夜に勝利したいのだ。

すべての昼を勝ちに満たして生き切りたい。

わたしが、愛について問われたとき、露骨に、

「面倒くせえな」

という態度を表すのは、これが理由だ。

説明しろと言われても、愛はわたしという個人に生じているものではないので、説明しようがないのだ。

父がそう求めているので、というふうに言うしかないのだが、それについても、正直なところ強い引け目を覚える。

なぜかというと、奇妙なことに、父の愛にも、一種のプライバシーのようなものがあるように感じるからだ。

父の愛が何を求めているか、何を求めていたか、そのことを、みだりにおおやけにするべきではない、という、父のプライバシーの感覚がある。

そのことだって、なぜなのかは、わたしには知りようがないので、わたしに説明を求められても困る。

わたしは慈善家ではないので、弱者救済フリークというわけではない。

仮に、わたしが公園にいて、目の前にホームレスのジジイがいたとして、それでもわたしは容赦なく、マヨネーズの塗られた旨い総菜パンを、わたしだけガツガツ食ってやるだろう。

たぶん、そのホームレスが、父のもとへ行こうとしているのではないので、父も何も言わないのだ。

もちろん、慈善やチャリティとして、そうした弱者に炊き出しのメシを供給してやるということの値打ちとやさしさを、わたしが理解しないわけではない。

それは、困っている人からするとおおいに助かるものだろう。

だがわたしはそもそも、目の前にホームレスがいたとして、そのホームレスに対してさえ、「見下す」という視点を持っていない。

だから、わたしとしては本当に、そのホームレスがわたしに小遣いをくれてもいいんじゃないかという気もしているのだ。

いくら見てくれがホームレスだからといって、勝手に弱者とみなすの

はいかがなものかという、あまりにも原理的な観念がわたしの中にはありつづけてしまう。
まあ、ホームレスは、金持ちと行政がタッグを組んでなんとかしてやってくれ。
もしホームレスが、わずかでも父のもとへ行きたいと望むのであれば、そのことは必ず立ち姿や目の光の中に現れ、必ずわたしはそのことに反応し、
「これどうぞ」
と総菜パンのひとつでも差し出すだろう。
そのときわたしは、弱者を救済しているわけではない。
どっちが上とか下とか、そんなことはわかったものではないではないか。
いくらホームレスだからって、父から見ればそのホームレスのほうが大きな者かもしれない。
父がわざわざ、
「お前のほうが上やで！」
と inform でもしてくるのでないかぎりは、わたしはホームレスに対して見下すという視点を持たない。
わたしは社会人ではないので、権力を持たないホームレスを、どう見下せばいいのか感覚的にわからないのだ。
わたしは、聖霊に包まれて、それが「通知」になり、「父がそう求めているので」ということで、総菜パンを差し出すだけ。
そのホームレスが父のもとへ行こうとしているので、「来させろ」ということなのだろうが、そうしたことのすべては、正直なところわたしの「知ったこっちゃない」のだ。
そうしろと言われるのでそうしているだけで、それが愛だというのもわかるが、別にわたしが愛をヤッているわけでもないので、総じてすべてはわたしの知ったこっちゃないのだ。
わたしは、聖職者に詰め寄られて、
「父ト子ト聖霊デスカ？」
と訊かれても、
「知らん」
としか答えないだろう。
だって本当に知らないのだからしょうがない。
神学や聖書で愛がどう語られているのか、父とか子とか聖霊とかはどう説明されているのか、そんなことはＡＩに訊いてくれ。ＡＩなら数秒でまとめて答えてくれるだろう。
おれはそういう宗教的なことが理解したいのではなく、ただ本当に、直接「来させなさい」という呼びかけが来てしまうので、やむを得ずそうしているだけなのだ。
もし、わたしがここで話しているこの現象こそが「愛」なのだと仮定すると、そのばあい、われわれは「愛」というものを、じつは本当にはまったく知らないまま生きているということになる。
われわれの想いのうち、そうした「愛」もどこかに混入している可能性はあるが、総じて言うなら、われわれは「なーんにもわかっていない」し、「何もかもを誤解している」ということになる。
そしてその予想は、おそらく、まったくそのとおりなのだろうな、とわたしはなんとなく思う。
わたしが語っている「愛」の話は、きっとことごとく、人にまったく伝わっていないのだ。
そりゃあな。
愛という原理じたいが誤解されているのだから、愛の話がまともに伝わるわけがない。
わたしが述べている愛は、「少しでも父の御許へ」ということであって、

それは「好きっ☆うふふっ」ということとはあまりにも違う。
おれとしては本当に、
「しょうがねえだろ、そういう〝通知〟が、本当に来るんだから」
と言い捨てたいばかりなのだ。
わたしのことなど、世迷言のゴミ野郎と唾棄すればそれで済む話なのに、その唾棄もしないのだから、世の人々はなかなか不徹底だ。
女性誌に説明されている愛が真実なら、それを真実として、わたしの妄言などゴミ扱いすればそれでよろしい。じっさい、わたしの言っていることは、客観的に見たらものすごい妄言のかたまりに見える。わずかなりともそれが妄言でないと保証できる要素はどこにもないのだから困りものだ。
女性誌には、「父の御許へ〝来させろ〟と、通知が届く、その通知の聖霊に包まれるとき、人は父の子としてのみ振る舞うことがある、それが愛です」とは語られていないだろう。
わたしの言っている愛と、女性誌が言っている愛と、アニメオタクが言っている愛を、すべて成立させるなんてのは不可能だ。
女性誌には、わたしのことがどう書いてあるかというと、それはもう「ウンコ低俗ゴミカス汚物野郎」と書いてある。
それでいいじゃないか、と、正直なところ他人事としては思う。どれだけ考えてみても、わたしのような奴を通念的に美徳化して捉えることは不可能だ。だからこんなものウンコ低俗（以下略）野郎でよろしい。
どうせ同じところで行き詰まるからなあ。
あなたが小説を書くとして、美術館の入口で入館料に躊躇する女性二人組に、男性が「見て行きなよ」と言って入館券を買ってくれた、その場面の男性を、あなたは女性誌的イケメンとして描くしかない。
けっきょくこの、同じところで行き詰まるので、高度な理解を覚えたつもりにはならないほうがいいのだ。
あなたは、小説を書くとして、その作中で「愛」を、わたしが述べているようなものとして描くことはできない。
あなたは作中の「愛」を、女性誌に準拠したものとして描くしかなく、つまり、レディースコミックやいつぞやの「ケータイ小説」に描かれるようなものとしてしか、作中に「愛」を描けない。
必ず同じところで行き詰まるのだ。
そうして行き詰まるということが、何も悪いと言っているのではなく、けっきょくのところ、その行き詰まりの手前で満足するか、行き詰まりの手前で不本意に尽きるかということでしかない。
わたしの愛の話なんて誰にもまともに伝わらないのだ。
一方で、世の中の状況は変わり、文化的観念も変わってきた。
ひとまず、男性というのは、無条件で女性にとって「気持ち悪いもの」になった。
それはもう、なぜというものではなく、どうすればいいというものではなく、これから先の時代の大前提らしい。
男性は、存在じたいがキモく、存在するだけで女性にとってダメージになる。
まもなく、女性たちは気づくだろう。
「この、存在するだけでダメージを与えて来るやつ、男性というもの、この存在じたいがコンプライアンス違反では？」
それでどうなるかといって、別にどうもならないのだが、とりあえずわたしが言うところの愛も、そのダメージ限界との按配（あんばい）、ということが大前提になるだろう。
入館料に躊躇する女性ふたりに、「見て行きなよ」と申し出るにしても、そのことじたいがその女性ふたりに大きなダメージを与えてしまうということだ。
わたしがそのとき、女性に変貌する奇術でも使えればいいのだが、残

念ながらそんな奇術は持ち合わせていないので、わたしは女性に対してはダメージソースになってしまう。
そんなことないです、と言いたがる女性が残っていることも知っているが、趨勢としては、もうそれも時間の問題だ。
男性は無条件で気持ち悪いものになってしまう。
それでも、安心してほしいというか、わたしは父の呼びかけに反する気にはなれず、わたしはきっと愛の挙動を最大限に続けていくと思う。
ずっと以前から、わたしが性転換すればすべての問題が解決するというテーゼがあったのだが、それについてもいよいよ、単純な結論が出ている。
そうすることを、父が求めていないので、そうすることじたいに愛がない。
わたしは愛でない挙動を採ることはできない。
若い女性のふたり組は、奇妙な矛盾を体験することになる。
ひとつには、ふしぎなもので、やはり聖霊に包まれる体験というものはあり、その愛の体験というのはたしかにあるのだ。
けれども一方で、それを持ち込んだのがわたしという男性だから、それがどうしてもキモいというダメージがある。
この奇妙な矛盾について、どう処理すればいいものか、本当はできたら、女性誌の側が語ってレクチャーしてほしいところだ。
わたしの側からは正直なところどのようにも処理方法がない。
わたしとしては、なんというかもう秒速で、「男性はキモいものだからしょうがない！」と、割り切ってしまってほしいと思っている。
男性がキモいというのはこの先、「ニワトリはうるさい」というのと同じようなことになっていくと思うのだ。
それでも人類はニワトリのすべてを否定するわけではないし、絶滅させるわけでもないだろう。
ニワトリが鶏卵を持ってくるように、キモい男性も、「父の御許へ」という愛を持ってくることがあるかもしれない。
じゃあ、少々、朝からコケコッコーとうるさくても、しょうがないかという受容の余地があるというものだ。
愛という現象にも、キモさのダメージ限界という、コンプライアンスが定められることになった。
まさにこのことが、現代を生きるわれわれの総意なのだと、しみじみ感慨を覚える。
いわく、
＜＜愛に男性がいてはならない＞＞
ということ。
それはもちろん、聖霊の通知ではなく、父の求めでもなく、われわれの総意であり、われわれ自身の求めだ。
聖霊の通知に、男性が含まれていても、その部分だけはカットするフィルターを、われわれは行使する。
なぜそうするのかは知らないし、なぜそうなったのかはわからないし、それでどうなっていくのかも知りようがないが、とにかく事実としてそういうことなのだ。
「愛＋男性」という組み合わせが、どうしようもなくキモい。
愛という単体ならよいし、男性といってどこかのスケベセンターにいる男性スタッフというのはかまわない。
ただ、愛＋男性という組み合わせはだめだ。
たぶん、ここ十数年で、「男性」というものの〝使い道〟が文化的に大きく変わったのだろう。
男性がキモいといって、それはＡＶ男優がキモいということではないし、風俗に通い詰めの男性がキモいということではないし、パパ活に散財するおじさんがキモいということではないし、毎日オナニーしている

男子大学生がキモいということではない。
そんなもののキモさはたかが知れているのだ。精神が崩壊するというようなキモさではない。
男性は、愛がどうこうということに使われるものではなく、もっと単体で、何かずっとシコシコしているものという、そういう使われ方のものになったのだろう。
男性は、エロマンガに出て来るものであって、名画に描かれることがあってはならないということ。
なるほど、これですべて合点がいく。
わたしにはきっと、この十数年間、見落としていたものがあるのだ。
それは特に、女性向けのコンテンツに、男性がどのように描かれていたかということだった。
そりゃあ、わたしは、女性向けのコンテンツなんてわざわざ見ないものな。
書物レベルで、男性とはどのような存在なのかということが、入念に書き換えられた。
いわば、新世紀男性新書、みたいなものが入念にあった。
わたしはそのことをすべて見落としてきてしまっている。
だからこんにちに至るまで、愛＋男性という組み合わせが、致命的ＮＧになるということがわからなかった。
本当はわたしは、美術館の入口で躊躇する女性ふたりに対し、シコシコしなくてはならないのだ。
そこで愛の挙動をするからだめということ。
おそらくこの十数年で、書物レベルで、男性というものは、もっと単純なシコシコ・ユニットに書き換えられている。
シコシコ＋男性、という組み合わせなら、そこそこにキモいけれども、男性というのはそういうものであって、何もＮＧではない。
それに対し、愛＋男性、という組み合わせは致命的にＮＧなのだ。
わたしがもっと、シコシコ挙動ばかりをしていれば、わたしはもっと人に受け入れられ、そのことはスムースだったのだろう。
わたしはそういう書き換えが起こったことを知らないでいたのだ。そりゃあここ十数年間、文学やら芸術やら、世界やら魂魄やらの研究ばかりをしていたので、致し方ない。
言い訳をさせてもらうと、四半世紀前は、男性は愛の挙動を尊ばれているところがあった。
逆に、シコシコ挙動しかしない男は、さすがにどこか嫌悪の対象だった。
わたしは、このことに、もっと早く気がつくべきだった。
気づくのがあまりに遅い。たぶん、十五年ぐらいは時機を過ぎている。
（そのぶん、わたしが求めていた研究とその成果のほうは、かけがえのないものとして得られていったのではあるけれど）
愛とは、よくわからない「父」の現象であり、子たるわたしの内部にはないということ。
わたしがわたしの想いや好意で愛の振る舞いをするのではないということ。
よくわからない「父」という現象が、子たるわたしに、なにやら「来させなさい」と呼びかけるので、しょうがなくわたしは言われたそのとおりにするということ。
そのときたしかに、聖霊に包まれるという現象はある。
愛とはそういう現象で、わけがわからないけれど、それでも愛というよろこびはあり、わたしはそのことでのみ無上の「勝ち」が得られるようで……そのことはどうも、聞いたことのある「父と子と聖霊」というフレーズを思い起こさせる。
けれどもおれはそんな宗教的なことに興味はない。

おれはただ、愛でしか挙動する気になれず、この愛という現象の「主」というものが存在することに気づき、わたしはその父に対する子でしかないのだということを知って、そのことをレポートしているだけだ。

しかしわたしは、男性であって、文化的には愛の人たりえず、文化的には気持ち悪いシコシコ・ユニットでしかありえない。

わたしは、どのような存在かといえば、女性向けエロマンガに出てくる男性ユニット、そのシコシコしたやつのすべてだと説明すればよい。

わたしはいま、目を閉じて眉根を寄せ、なるほど、なるほど、と理解と再構築を噛みしめているところだ。

世の中には一般に、男性と女性が存在していると思われているが、じつはそうではなく、じっさいには三種、［愛の人・女性・シコシコ男性］が存在する。

それで性別における大前提が、

「男性ってことは、シコシコってことでしょ？」

ということなのだ。

性別をふたつ占めることはできない。

ここで、男性かつ愛の人というのは、性別の混乱・二重性が言い張られていて気持ちが悪い。

たとえばこの世界には、［本当のこと・ノンフィクション・作り話フィクション］の三つがあると思われている。

それで、

「フィクションということは、作り話でしょ？」

という大前提があるだろう。

フィクションなのに本当のこと、というようなことが言い張られると、そこには混乱と二重性があって気持ちが悪い。

それと同じだ。

「神話って作り話でしょ」

と言われれば、

「それでいいんじゃないですか」

となる。

そのことと同じように、

「男性ってことはシコシコでしょ」

と言われれば、

「それでいいんじゃないですか」

となるべきだ。

それに背反する仕組みのことが言われると、ただちに「キモすぎて無理、終わり」になるわけだ。

それはもう、本当に、えげつないぐらい「無理」なので、この無理を突破することは、思念じたいとして持たないほうがよい。

神話は作り話で、男性はシコシコだ。

それでいい。

神話が作り話じゃなかったとしたら、あなたはそんなおそろしい世界を一歩も「旅」できないだろう。

ここでは愛の話をしたけれど、それもひとまず、作り話ということにしておいてくれ。

いいのだ、どうせ同じところで行き詰まるから。

同じところで行き詰まって、いいかげん飽きたなというときがきたら、そのときにまたこのことを考えてみたらいい。

［愛］

四、合意していなくても女性は靡（なび）く

自分にどんなことが起こるか、自分がどんなことに支配されているか、多くのことが一般には知られていない。

たとえば、あるテレビ番組で、女性レポーターが、中学校の女子バスケット・チームを取材していたとする。

体育館の中には、バスケットボールの跳ねる音と、若く元気な少女たちの声が響きわたっている。

そこにとつぜん、出刃包丁を持った男が闖入してきた。ずんぐりして汚れた肉体。不穏な立ち姿。その目は充血しており、口からはよだれが垂れている。

男は何も言わず、焦点の合っていない目で、のしのし、のしのし、ゆっくりとこちらに近づいてきた。

それを視認したとき、女性レポーターは、えっ、ちょっと、とつぶやき、直後、

「キャーッ！」

と悲鳴をあげた。

「みんな、逃げて！」

このことには何の不自然さもない。危機と恐怖に悲鳴をあげるのは本能的なことだ。

一方で、次のケースでは、同じ女性レポーターが、体育大学の男子剣道部を取材していた。

体育館の中には、竹刀の打ち込まれる音と、意気軒高な若者たちの気合に満ちた声が響きわたっている。

そこにとつぜん、出刃包丁を持った男が闖入してきた。ずんぐりして汚れた肉体。不穏な立ち姿。以下略。

男は何も言わず、こちらにのしのしと近づいてきた。それを視認したとき、女性レポーターは、えっ、ちょっととつぶやき、しかしキャーという悲鳴はあげない。

なぜ悲鳴をあげないのか。

それもやはり本能的なことだ。

女性レポーター当人は何かを理解しているわけではない。

けれども、当人は知らなくても、ある現象が彼女を支配しているのだ。

この場合、「軍事力」が彼女を支配していて、彼女に自覚はなくても、彼女は軍事力の大小を読み取っており、そのことの支配を受けている。

彼女は、思想的にも立場的にも、暴力や軍事力を肯定する者ではない。

けれどもこのとき彼女は、竹刀を持った剣道部の男たちが、闖入者よりもずっと強大な軍事力を持っていることを知っており、そのことを意識や観念より優先する。

だから彼女はキャーという悲鳴をあげないのだ。

女子中学生のバスケチームの場合は、少女らに軍事力がないことを知っていて、そのせいで危機と恐怖の悲鳴をあげた。

いまは軍事力が違うので悲鳴をあげない。

また彼女は、先日の番組では、

「過剰防衛にならないよう、さすまたの使い方を学びましょう」

というようなことを言っていた。

そして、

「さすまたであれば、このように、力の弱い女性でも使うことができま

す」
と実演もして見せていた。
けれどもじっさいに暴漢が闖入すると、彼女は、竹刀を持った屈強な男たちの陰に隠れ、軍事力の行使を使嗾する。
剣道の有段者が、闖入者に鋭く小手を打ち込むと、男の手から包丁はあっさり落ちた。たちまち「勝負あった」というあっけないムード。けれども男はまだ、打たれた手を押さえたまま、そこに立っている。
それを見て彼女は、内心であきらかに、
（さっさとやっちゃってください、倒してください）
と望む。
引き続き有段者が、闖入者にきつめの面を打ち込むと、男は痛みに倒れ、うずくまって顔を押さえ、ウウ、ウウ、とうめきだした。
「警察を呼びましょう」
そのとき彼女は、倒れてうめいている暴漢に、人権などかけらも覚えない。
竹刀を打ち込まれて、どこか骨折ていどはしたかもしれないが、それについて救急車を呼ぼうとは、彼女はまったく発想しない。
彼女はこのとき、自分がそうした「軍事力」というものの支配を受けているということをまったく知らないのだ。
闖入者が警察に連行され、事件は解決する。
明日になれば、彼女はまた柔和な声で、大人びた「暴力反対」を言っているだろう。
別の例を考えよう。
たとえばあなたの知人が、アイドル活動をしていたとする。
そしてその知人のことについて、個人情報を知りたいといって、週刊誌の記者を名乗る男がやってきた。
あなたはとうぜん、
「当人の、プライバシーですし、危険もありますから、個人情報をお伝えすることなどできるわけありません」
と、記者の要求を突っぱねる。
それについて、記者は、
「まま、もちろんそうなんですが、何も危害を加えるようなことではなくて……その、彼女がですね、交際相手がいて一緒に暮らしているというような情報がありまして。そうしたことは、彼女のファンたちにとって、本当に気がかりで、ファンたちを苦しめる噂話なんですよ。ファンにとってはかわいそうなことでしょう？　事務所のほうは、所属タレントに対して恋愛禁止って条件で契約しているんですし。それが、男性と同棲しているというのはちょっとねって話なんです。それでどちらにせよ、苦しんでいる人を、そうした苦しみから解き放ってやってほしいと。そう思ってのお願いなんです。もちろんわれわれもジャーナリストのはしくれですから、情報提供者のソースと安全はかならず守秘します。あなたのことがわずかでも誰かに漏れるということは決してありません。どちらにせよ、その点はご安心ください」
もちろんそんなことを言われても、あなたは情報提供とやらを断る。
あなたの態度を見て、記者は、
「それはまあ、やはり、そうですよね。いやあ、失礼しました」
と詰め寄りを軟化する。
そして、何はともあれ、縁あって、お話を聞いてくれたお礼として、と、あなたに千円の商品券を手渡す。
あなたは、
「いや、こんなもの受け取れませんので」
と突き返そうとする。
それについて記者は、大げさに、
「いやいや、それはもう、取材させていただいた方には、誰にでも差し

上げている、ただのごあいさつのものですので。まま、そちらは他意なく、どうぞお納めください」
と言う。
そこまで言われると、それはまあ、いいかと思い、あなたはその千円の商品券をふところに収める。
「それで、まあ、腹を割って、ここだけの話ですけども。彼女がお住いの住所、それを教えてもらえたら、少なからず、謝礼のほうを弾ませてもらいます。いかがでしょう」
「そんな、お金の問題とかではなくて、無理です」
「住所だけですよ。それはまあ、こちらであるていど、目星のついているところではあるんですがね」
「じゃあもうそれでいいじゃないですか」
「いやいや、これは、取材の仁義ということもあって。どうでしょうか。彼女の住んでいる、ビルの名前だけでもけっこうですよ」
「ご自身で調べてください、わたしの口からは言えません」
そこで男は、すっとあなたに身を寄せ、どのポケットから出したのか、取り出した封筒をあなたの手に持たせる。
周囲の誰にも見られないように。
封筒は、厚みがあってずしりとしていて、中に一万円札が入っているのがちらりと見える。
二十万、あるいは三十万ぐらいはあるだろうか。
記者を名乗る男は、
「これでね、ポロッと言っちゃってください。ぜったい、あなたに迷惑はかけませんので。ビルの名前だけでいいですよ。苦しんでいるファンの人たちのためとも思って、どうかお願いします」
あなたは絶句して、その封筒を、男に突き返そうとする。
「まま、まま……」
男は両手を開いて制止し、その封筒はあなたのものだ、というジェスチャーをする。
あなたはため息をつき、
「じゃあビル名だけです。代官山、チェリシアってマンションです」
「なるほどね、ありがとうございます。いやこれで、あなたにぜったいにご迷惑はおかけしませんから。そちらのほうは、どうとなりと使ってやってください。あと、何号室というか、彼女の部屋は何階で」
「ビル名だけと言ったじゃないですか」
「それはそうですけど、まま、まま。そちら、受け取ってもらえたことですし。ここまできたらまあ同じようなもので、よろしくお願いしますよ。ファンのためとも思って。ご迷惑はぜったいおかけしませんから」
「５階です。たしか、５０１じゃなかったかな。そこまでよく覚えていないです。もうこれでいいですか」
「それはそれは、もうじゅうぶんです、言いにくいことを、どうもありがとうございます」
一般に知られていないことは、封筒に入ったお金を手に持たされたとき、人は<<瞬間的にその厚みと重みを概算する>>ということだ。そしてその厚みと重みでどれぐらいのものが買えるかということもとっさにイメージする。われわれはそれほど、カネというものに支配を受けている。
そしてさらに知られていないことは、カネというのは概念ではなく、現金をその手に掴まされたときに真の効果を発揮するということだ。厚みと重みのある現金封筒を持たされたとき、人は<<生理的にその封筒をとても突き返しにくい>>。
カネの魔力といって、三十万円という数字に魔力があるのではなく、その現金を目の前にする・あるいはその現金を手に掴むということに魔力があるのだ。
だから人には、一般的に言って「カネで転ぶ」という現象がある。人は

カネで人を裏切るのだ。もちろんそうでない人もまれにはいるが、一般的にということであれば、人はカネで転ぶのがふつうのことだと言わねばならない。

この場合、記者のほうは、現金入りの封筒をとにかく掴ませれば、それを本気で突き返してはこないということを知っているのだ。本人はそのつもりでも、記者の側が「いやいや」と言い続け、受け取りを拒否すれば、やがて彼女はそれをふところに収めざるをえなくなる。またそのことのためには、いかに無理やりでも、「苦しんでいるファンのため」というような、善行めいたことをくっつけておくと効果がある。情報提供者はどこまでも「そんなに悪いことをしたわけじゃない」「恋愛禁止で契約して活動しているのにこっそり男性と住んでいるほうにも問題がある」と思いたいゆえに。

さりげなく手渡された封筒でも、記者の側が頑として受け取らないなら、それを突き返すことは単純にむつかしくなる。

そのような場合、いよいよとなれば封筒を地面にたたきつけ、

「失せろ」

と言い捨ててその場を去ればそれで済む話だが、なかなか人はそのような思い切った行動を取れない。特に、金銭の入った他人の封筒を地面に叩きつけるというようなことは常識的になかなかできないものだ。

われわれが日常、「カネで友人を売ったりしないよ」「そこまでカネに困っていないし」と思っているのは、じっさいにその現金を手に掴んでいない状態での感想、つまりじっさいにはその支配を受けていない状態での空想にすぎない。

現金を手に掴むに至り、それでもなお、地面にたたきつけて去るというようなことをするなら、その人はもはや義理堅いというようなことではなく、別の超越、いっそ酔狂というような何かの主体性を持っているのだ。

他の例。

世の中にはいろんな詐欺があるが、詐欺にだまされたことが発覚し、投資したお金が戻ってこないということを知ってから、なおもその詐欺の内容にもっともらしさを覚えるという人はいない。冷静に見るならば、投資詐欺というのはどうにもだまされようがないものなのだ。なぜなら、そうして投資して儲かるものがあるのなら、誰にもその情報はもらさず、誰だって自分だけがそれに投資するに決まっているからだ。この根本は変わりようがないのでだまされようがない。

にもかかわらず、投資詐欺というのは、いつの時代も一定の被害者を生み出し続ける。それはなぜなのかというと、一般に「欲に目が眩（くら）む」ということが知られていないからだ。人々は日常、自分がそのような欲望を奥底に抱えているということを知らない。そしていざとなると、すぐにその欲望に支配を受けるということを知らないでいる。

ちょっと聞くだけなら何やら「おいしい」話のごとくに聞こえる投資営業のセールストークがある。とはいえ、どう考えてもそんなおいしい話が向こうから飛び込んでくるわけはない。それは当たり前のことだが、そのときは「欲に目が眩む」ということが起こるのだ。目が眩むと、何かをまともに視認することはできない。だから視力を失ったままハンコを捺す。また投資詐欺は、初回だけ、配当金が振り込まれるかもしれない。そうなると、欲に目が眩んでいるところ、さらに「味を占める」ということが起こる。「濡れ手で粟じゃん」と感じて昂る。するとますます欲望に支配されていく。すると、これまで手に取ることもなかったカタログ雑誌に手が伸び、開き見ながら、

「このコート、買っちゃおうかな」

という意志が湧いてくる。

なんだか久しぶりに、ものすごく楽しい、という感じがする。

長いこと忘れていた、希望と解放のようなものを取り戻した気がする。

「最近、すごく楽しくて、なんか可能性に満ちているというか、生きていることじたいが幸せなんだよね！」
「濡れ手で粟」を、一回掴んだだけで、たちまちそういう様相を見せる。
われわれは自分のうちに、そうした欲望が棲みついており、ちょっとした給餌でその欲望に支配されるということをみずからで知らないのだ。
われわれは、過去にあった民族浄化の尖兵たちにつき、自分はぜったいにそんなことにならないと鼻で笑っているところがあるし、マインドコントロールとか、カルト宗教の教祖をあがめるとか、そんなことになるわけがないと思っている。それらはすべて、自分の内部に自分をあっさり支配して乗っ取ってしまうものが棲んでいるということを知らないでいるからだ。
先の章で、社会人の主題は権力だと述べた。われわれは、自分が社会人となれば、社会人気取りの自負は持つくせに、それで自分が権力という主題に支配されるのだということも知らないまま生きている。たとえば数年前はこころの底から尊敬していた部長が、上層のインサイダー騒動に巻き込まれ、立場を追われて窓際従業員のひとりとなり、うらぶれたリストラ要員となったとする。すると自分の内部にたちまち、彼をしょぼくれた小さな者として見下そうとするはたらきが起こってくる。あんなに尊敬していたのにどうして？　それは本当にたちまちのことで、あっというまに乗っ取られ、そのことを自分で点検するひまも与えられない。
物の見え方じたいが権力に支配されているということを自分で知らないのだ。
社会人の主題は権力だから、社会人の中においては、権力さえあれば女性からの関心とセックスは「入れ食い」ということがある。もちろん、会社の社長なら会社の従業員はぜんいん入れ食いというようなことではない。それは、いかに社長の権力があったとしても、それでひとりの従業員をきゅうに上位に「抜擢」できるわけではないからだ。
これが、じっさいに「抜擢」できる権力構造だと、話は変わってくる。
たとえば、テレビ番組のプロデューサーや、あるいは音楽制作のプロモーター、はたまたアイドル企画のプロデューサーや、映画製作の監督など。ワンマン企業がテレビＣＭを打つときなどにも、誰を起用するかは社長の一存で「大抜擢」ということがありうる。
抜擢をしうる「権力」が存在する。この場合、必要な観点は、抜擢された側は単に収益を得るということではなく、抜擢された者じたいが立場と権力を得るということだ。いわば、実績を持つものとして上位ティアに属することになり、単純に言えば「ザコではなくなる」ということ。業界の中で、また人間関係の中で、以前とは違いずいぶん「顔が利く」ようになる。権力じたいの飛躍なのだ。収益ももちろん、その金銭ぶんの金権を得るということではあるのだが、より社会人の主題たる「権力」に密接なのは、ティア表で上位に参入するということのほうにある。
われわれは、そうしたある種の業界の権力者、プロデューサーなどを映像ででも観た場合、たいていは「うさんくさい」「いかがわしい」と感じることが多く、そこに清冽さや誠実さを見い出すことは少なくて、率直に言えば気持ち悪さを見い出すことが多いものだ。だから、仮に自分が二十二歳の女性だったとして、五十五歳のプロデューサーとセックスするというようなことは、とてもじゃないが前向きに想像できない。
「絶対にムリ笑」
生理的にそう感じるだろう。
けれどもそれは、そのときのわれわれが権力構造の外側にいるからにすぎない。
スターになれるかもしれない、少なくともスターに近いものになってゆけるかもしれない。
その「抜擢」をしうる権力構造に連なったとき、二十二歳の女性の目

には、タコ坊主のようなプロデューサーはタコ坊主には見えなくなり、薄汚れたしたり顔は薄汚れたしたり顔には見えなくなるのだ。
タコ坊主の男はなにやら「かわいらしさのある、個性的な人」に見え、薄汚れたしたり顔は、「いろんな経験をして、苦労をしてきた実績のある大人」に見える。
自己中心的な感情を発露し、乱暴な手合いを見せても、それがまるで真剣さ・情熱の表れというように見える。
「抜擢」をしうる権力が彼にはあり、それに反応して、その権力に取り入ろうとするはたらきが自分の中に起こり、そのはたらきに支配されていくのだ。
ふと気づくと、酒の席で、十八歳の彼女は個室で二人きりになっており、五十五歳の男に密着して座っている。
このとき、この女の子の意識には、やはり「いやだ」「気持ち悪い」「帰りたい」という気持ちがある。
にもかかわらず、彼女はじっさいには、その隣にいる男から距離を取ろうとしない。
なぜ？
何が起こっているのか、彼女自身にもわからず、このときすでに、彼女の意識は混濁し、精神的に混乱状態にある。
彼女は価値観として、面食いで、イケメン好きで、若くてきれいな男性としか、性的な接触は考えられないというタイプだった。
またもともと、性的に潔癖さを尊ぶところがあり、
「ワンナイトとか、好きでもない人と寝るとか、わたしそういうのはぜったいに無理」
と彼女は常々言っていた。
「だいいち、好きでない人に触られても、何も感じないし、気持ち良くなりようがないもの。ひたすらキモいだけじゃん」
彼女は、性的におどろおどろしたイメージのものは苦手で、男女のセックスというのも、
「明るく元気いっぱいの、それでいて夢みたいな、けっきょくラブラブがいいよね」
と言っており、それは彼女自身にとってじつに自分らしいとも感じられるセックス観だった。
「お互いに好きで、やさしくしあう、それで、あたたかくてずっとこうしていたい、なんかそういうのがいいな」
ところがこのとき、暗がりの中で、五十五歳の男が彼女の胸に手を掛けると、それが服の上からの粗雑な愛撫であっても、
「あっ！」
彼女はこれまでにないような嬌声をあげた。
彼女はその声に自分でびっくりする。
（えっ、何、なんで？）
彼女は、
（違うの、ただびっくりしただけ）
と思って立て直そうとする。
けれども、そのままま身体を撫でまわされると、なぜか背中がのけ反り、全身がびくんびくんと反応して身動きが取れなくなる。
呼吸ができなくて苦しいほどだ。
「あっ、ちょっと」
彼女は危急という感じで、男の手を除（の）けようとするが、われながらその力が弱々しい。
男の手が股間に差し込まれてきて、男が耳元で、
「もう濡れているね」
と言った。
彼女は内心で、

（へっ？）
と思う。
たしかに、男の言うとおり、自分の内腿の皮膚感覚で、自分の股から何かが垂れてきているというのがわかる。
（いやいや、そんなはずは。ちょっと、違う、そうじゃなくて）
彼女はこのとき激しく混乱する。
自分が自分のものでなくなっていく気がする。
「ちょ、ちょっと、わたし無理です、あの、ちょっと」
身をよじって抵抗しようとするのだが、彼女自身でも自覚できるところ、その抵抗は真意として抵抗しているという説得力を持たない。
じっさいのところ、それは抵抗の表れというより、ただの混乱と戸惑いの表れだ。
男の指先が彼女をいじくると、そのたび彼女の身体はいちいち大げさに跳ね、彼女は細い喉からは、はしたないほどの大声が発された。
「気持ちいいの？　ははは、うれしいけど、あんまり暴れると、ケガして危ないから落ち着いてね。ゆっくりしてあげるからさ」
あろうことか、男の側からそのようにたしなめられてしまう始末だ。
彼女はこの五十五歳の男とセックスしたいわけではない。
けれども、彼女の観念と矛盾して、彼女の肢体と挙動は、大いにその男とのセックスを受け入れ、むしろそれをただごとならず欲しているというほどに見える。
何が起こっているのかわからない。
そもそも、振り返って考えると、なぜこんな性的なリスクのある場所にみずからやってきたのか、そのことじたいが彼女自身にとって不可解だ。
何かしら適当に理由をつけて、断ればよかったし、あるていど飲食が進んでからも、態度を頑なにして遠ざけて退出してしまえばよかった。
けれども自分はそうしなかった。
そもそも、お酒をおいしいと思ったことがあまりなく、これまでほとんどお酒を飲んだことがなかったのに、きょうにかぎって、自分から注文して三杯も四杯もお酒を飲んでいる。
なんで？
そうしたことも含めて、彼女はいま、混乱の極致にある。
そうしたことが起こるものだ。
彼女は、自分を支配する別の原理が、自分の中に棲んでいるということを知らない。
自分の価値観や観念が、自分を支配してくれるものとは限らないのだけれど、そのことを彼女は知らない。
ありていに言えば、彼女の中に棲んでいるものは、「権力と寝る女」なのだ。
だからそのような、露骨な嬌態が現れている。
しかし彼女は、自分を性的にクリーンな、明るい元気なイメージの女性と捉えていたから、まさかそんなおどろおどろしいものが自分の中に棲んでいるとは知りようもなかった。
もちろんそうしたものが、自分の中に棲んでいるということを、このときになって彼女が知覚できるわけではないし、事後になってもろくに知覚なんてできやしない。
投資詐欺の被害者は、
「なぜあんな話を真に受けてしまったのだろう」
と、あとになって悔悟の涙を流すが、それでも、「あのとき欲に目が眩んでしまったのだ」ということは知覚できない。
ただただ、混濁と混乱の中で耐えがたさの涙が流れるだけだ。
自分の中に、そうしたケダモノのようなものが棲んでいるということが、知覚できないし、そもそも知覚の以前にそれを受容することじたい

ができない。
自分はクリーンで清潔で、明るく元気でやさしいものだと思っている。
わたしはここまで、社会人の主題は権力だと述べている。
そして、「抜擢」の権力を持つ者は、抜擢される者を、上位権力のティアにまで昇らせうるという能を持っている。
そのことは、権力を主題にするわれわれにおいてきわめて強大なファクターで、その強大さゆえに、自分の全身がむやみに反応するということを、彼女は知らない。
彼女は自分が、権力と寝るということを知らなかったし、自分が「欲に目が眩む」ということも知らないし、自分がカネで転ぶということも知らないし、自分が軍事力の旗につくということも知らない。
彼女は、自分の中にそうしたケダモノの自分が棲みついているということを知らないが、そのことを知らないまま、彼女はこの夜、ケダモノのオーガズムを繰り返し、果てしなく味わう。
自分の発したすさまじい声や、自分の四肢が現したみだらな痙攣、自分の股間が……そうしたすべてのことは、自分の中に深い記憶として刻まれる。
この深い記憶は、深くにあって意味不明なものとなりつつも、あきらかにおぞましいものとしてありつづけ、これまであった明るく清らかな「わたし」のイメージと矛盾し、これまでのすべての「わたし」を破壊しにくる。
「わたし」の像が根底から解体され、あれだけ嫌悪していたおどろおどろしいセックスこそが「わたし」になる。
そのことが、寝ても覚めてもグロテスクに味わわれ続け、ひたすら、
「もう楽しかったあのときのわたしには戻れないんだ」
という思いばかりが結論になる。
彼女はこどものころ、深夜に目が覚めてしまい、両親のセックスを見てしまったことがある。
何をやっているかはよくわからなかったが、その光景は、幼かった彼女にとってひたすらショックだった。
いつも、明るくてやさしいママが、何だかわからないけれど、パパと「あんなこと」をしていたなんて。
おどろおどろしい寝室の湿気。
ママのイメージが解体される。
それは幼い彼女にとって、寝ても覚めても繰り返される、グロテスクな味わいとなった。
そのときのことを思い出すと、いま彼女が味わっているグロテスクさは、そのときの何十倍、何百倍にも及ぶものだ。
わたしが、あんな奴と、「あんなこと」をするなんて。
腰が痙攣し、性器の奥が男の一物をむさぼった。
支配欲を満たし、悦に入った男の顔。
その顔に蹂躙され、貶められることを、むしろ官能にして嬌声を高めたあのときの自分。
素直になりなよ、なんて耳元で促されて、それに濁流のように甘えて乗っかり、「もっと、もっと!」と叫びさえしたわたし。
「ゲロ吐きそう」
あくまでここに示した例に限定してだが、ここに示した例において、彼女はこの性交について合意をしたのかというと、そのことはじつに答えづらい。
彼女の観念上に、性交に対しての合意はなかった。
けれども彼女の示した様相に、性交についての拒絶・謝絶は見当たらない。
「もっと、もっと」と腰を振ってねだりさえする彼女の嬌態をもって、それを「イヤがっている」とはさすがに言いにくい。

彼女はただ、自分が「権力と寝る」ということを知らなかった。
一方、五十五歳の男のほうは、「そりゃ女なんだから、権力と寝るでしょ」ということを常識的に思っていた。
権力と寝るということが、彼女にとっては醜悪きわまる、嫌悪感の最たる対象である一方、五十五歳の男にとっては、権力と寝る彼女を愉しむというのがありふれた夜遊びだった。
権力と寝るなんて、「わたしにはぜったいありえない」と彼女は思っていた一方、男のほうは、「彼女もそりゃそうでしょ」と思っていた。
こうしたことは、じっさいによくあることであって、何ら珍しいことではない。
だから、わたしはあえて女性に向けてこそ申し上げたくなるが、
「あなたは合意していなくてもホテルに行きますよ」
ということなのだ。
社会人の主題は権力であり、特に「抜擢」という権力飛躍の構造に接触すると、人は内部から自分を支配するメカニズムを立ち上がらせてくる。
特に、主題となる権力について、時間制限が掛かっていたり、ほかの競争相手が掛かっていたりすると、そのはたらきはことさらに如実だ。
「このままうだつが上がらないままでいるの？　時間だけが過ぎていくよ、いつまでくすぶっているつもりなの」
「うかうかしていて、あの子とかあいつとかに、チャンスのすべてを持っていかれたらどうするの」
そうした強迫観念も作用して、もはやそのとき、自分が誰と寝るとか、観念としてどういう価値観だとか、そうしたことは自分に対していっさい有効でなくなる。
ここで一部の人は、そうして不本意や屈辱があったにせよ、その混乱の中でもいっそのことこれを奇貨として、たしかに「抜擢」を受け、権力の中でのしあがっていくという道筋を採るかもしれない。
けれども逆の一部の人は、とてもじゃないが、不本意な男と不本意に寝て、不本意な嬌態を示し、それが不本意に愉悦されたということが、耐えがたく、おそましく屈辱的で、ぜったいに許せないこととしてうらみつづけるという道筋を採るかもしれない。
そのどちらが良いとか、マシとか、そんな一般論はもはや誰にもどうとも言えない。
ただ、一般に知られていないこととして、こうしたことは当たり前にあるのだということだ。
「チャラい男性は苦手」「好きになった人にしか肌は見せたくない」と言っていた人が、それでも都会にあこがれ、ふと気づくと夜にクラブの近くをうろついており、
「あの人と一緒にならＶＩＰルームに入れるよ」
と促される。
じっさいその人と一緒にゲートをくぐると、料金も徴収されず、初対面の人から一方的にあいさつを受けるのだ。みんなおしゃれで、解放されていてね絆があるように見える。
そのようなとき、隣にいるその男の顔を見上げると、彼はその輪の中で笑っていて、
「チャラく見えるけれど、じつはやさしくて好い人」
と見える。
そんなことだって「権力と寝る」ということの現れだ。
夜な夜な、初対面の男とクラブのＶＩＰルームに入り、何の手出しもされず茶話会で終わりということにはならないだろう。
観念上、彼女のセックス観は少女マンガのそれであったとしても、じっさいの彼女の身を支配するのはこのように少女マンガのそれではない。
合意していなくても女性は靡（なび）くのだ。

その前提において、いったい何が正義なのかを、わたしは議論しようと思わない。
わたしはただ、女性であるあなたが、このことをみずから知って把握しておけたら、それが少なくともフェアに近いと思うばかりだ。

［合意していなくても女性は靡（なび）く］

五、原初の神、永遠の旅

か、か、か……
神を祀れーい！
かといって、一般のご家庭を注連縄（しめなわ）まみれにしてもしょうがないので……
どこか、しかるべきところには、しかるべく神が祀られていればいい。
宗教とかスピリチュアルとかはゴミ箱に捨てろ。
ゴミ箱は言い過ぎでも、そうだな、物置の奥にでも押し込んでおけ。
取り出す必要のないものだ、そのままそこで凍結させておけ。
神を祀れ、そして神というのは「原初」のことだ。
そりゃそうだ、何かの始まりが神なのだから、神が原初で、原初が神だ。
原初じたいが神だ。
だから、芸術家・岡本太郎は、縄文時代という原初につながっていったし、ミュージシャン・甲本ヒロトさんたちも、クロマニヨンという原初に偶然つながっていった。
神を祀るということは原初を祀るということだ。
先祖を祀るということは、微妙に（封建的な）的外れになりがちだから、先祖ではなくて「祖」そのものを祀れ。
原初とは何かというと、「原初だなあ〜」「うわ、原初だわ」という直覚体験だ。
グランドキャニオンみたいなものをイメージすればいい。
グランドキャニオンは、地質学的には、あまり原初ではないのかもし

れないが、まああんなイメージだ。
「原初」は、何も、終わってしまったわけではない。
原初から始まり、原初から続いているのだから、いまも原初は続いている。
われわれが見失うだけであって、原初の側が消えてなくなるわけではない。
原初はもちろん古いものだから、古（いにしえ）だ。
その原初につながりを得ている状態のことを、「稽古」という。
「稽」というのは、つながり・かんがえる、という意味だ。
（例、ボートを湖畔に稽留する）
この「稽」がない場合、その状態を「荒唐無稽」という。
稽古がついていないので無稽ということだ。
「原初」はどこに向かっているだろうか？
どこに向かっているといっても、「原初」に何か目的があったわけではない。
婚活中の女性は、ハイスペ旦那をゲットするという目的があるかもしれないが、天空と大地の「原初」にはそんな目的はない。
原初に目的があったわけではないが、原初は現在も進み、この先もずっと進んでいく。
目的があるわけではないがどこかに向かってはいくのだ。
つまり、それは「旅」だ、と言える。
「原初」はそれじたい神であり、神は、ずっと旅の途中だ。
その旅もどこかに向かっているのだろうが、おそらく、その旅は永遠に続くのだ。
「旅」が一時的なものと思えるのは、われわれが生活上でこしらえる誤った思い込みだ。
旅は永遠につづく。

旅に終わりなんかないのだ。
過去も未来もなく、すべてが「いま」、その永遠の旅の中を往く。
もしここで、わたしが急死して、葬式屋の司会がしめやかに、
「旅立たれました」
と言ったら、あなたはスッと立ち上がり、
「それは違います」
と言えばいい。
「あの方は、もともとずっと旅の中にあられたのであり、いまことさらに旅立ったということはまったくありません」
そのように高らかに申し立ててよい。
おれはすでに旅の中にあるのであって、この場でいきなり死んでも何ひとつ変わりはしない。
生きていようが死んでいようが、おれは旅の中だ、変化はない。
「原初」が死ぬなんてことあるかぁ？
「原初」は、死んだり滅んだりはしないので、永遠に旅の中だ。
旅の終わりはない。
ずっと旅の中にあり、旅の外に出るということはない。
おれがこうやって書き話しているのは、典型的におれの旅の現れであり、このことはおれが死んでも変わらないのだ。
おれが死んだら、さすがにＰＣやキーボードやアプリやサーバーにはログインできないので、あなたの側では読めなくなるというだけであって、あなたの側が困るだけだ。
おれの側の旅は変わらない。
おれの書き話しが、あなたの書き話しと、あまりにも根底から違うのは、おれがこの永遠の旅から出ないことを、すでに決めているからだ。
あなたが表現するものと、おれが表現するものが、どうしても決定的に違うのは、おれがこの永遠の旅から出ないことを決めているからだ。

それで、そもそも何を表現するというか、表現ということの前提じたいが違ってしまっている。
このことは一般にはまったく気づかれようのないことだ。
一般には、何かしら「内容」のようなものが表現されていると思われているのだが、じつはそうではない。
言うなれば、おれの場合は、おれが表現「していない」ものが、あなたに体験されているのだ。
おれが太鼓をドンドコ叩こうが、おれがあなたの背中にペンキを塗りたくろうが、あるいはこうして文章を書き話そうが、あなたが体験するのはそこに表現「されていない」ものだ。
表現されていないものが、なぜか〝表に現れ〟、体験されてしまうので、それをわざわざ「表現」と呼ぶのだ。
表現していないものがあなたに体験されるのはまったくナゾだろう。
おれがあなたの目の前で笛をピーと鳴らすと、まるでそのピーという音や音色が表現されているみたいに認識される。
でもあなたが体験するのは認識上のそれではないのだ。
だからあなたはおれから与えられる体験だけ「何か違う」と首をかしげている。
おれの場合、ピーだろうがドンドコだろうが、そこに表現されていない「旅」があなたに体験されるのだ。
それは、おれが、この永遠の旅からもう出ることはないと決めているからだ。
あなたはすべてが旅の道中ということを体験させられ、そのことがピーとかドンドコにしか聞こえないのでわけがわからないのだ。
あなたの認識できることには何の正解もない。
あなたの抱え込んだ正解の、何をどのように振り回してみても、おれが与えている「旅」にはならないので、あなたはもうわけがわからなくなるだろう。
おれは「原初」が永遠に旅するその旅を体験に現わしているのだ。
繰り返して言うが、「原初」が、永遠に旅をしているのだ。
誰が旅をしているのかといえば、それはまあ、おれが旅をしているのだが、そうは言っても、
「『原初』が永遠に旅していなければ、そもそも旅じたいがないから、おれが旅なんかできないじゃん？」
ということになるので、誰が旅をしているとかいうことよりも、とにかく「原初」が永遠の旅をしているのだ。
旅は永遠に続き、旅の中から出ることはないので、旅の中の何かを外側に「利用」するようなことはできない。
旅の経験を日常の暮らしに活かす、というような、ハレンチイグアナトカゲみたいなことは成り立たないのだ。
（イグアナを飼っている人ごめんなさい、イグアナには何の罪もありません）
原初とは何か、永遠の旅とは何か。
それを体験するというのはどういうことか。
原初とは何かといって、「そんなものあなたの目の前にいつでもあるだろ」と言うしかないのだが、そんなこと言ってもわからないので、できたら何か本当に祀ってあるガチの神様に出会えたらいい。
かといって、宗教とかスピリチュアルとかにはまりこまないように。
神というのは、髪の毛を紫色に染めたおばさんの意味ありげな笑いとお香を焚いた演出の雰囲気のことを言うのではなく、「原初」のことを言うのだ。
原初の風が吹き、原初の大地があり、原初の天空がある。
風とか大地とか天空がない人っているのか。
コンプライアンスを正義に抱きかかえると、たしかにもう風も吹かな

いのかもしれない。
地球がまだ煮えたぎるマグマだったころ、地球にまだコンプライアンスはなかった。
いや、もっと遡らなくてはならない。
地球がまだ、イマジナリーな存在だったころ、地球にはまだコンプライアンスはなかった。
ただ、風が吹き、大地があり、天空があった。
だから祀らなきゃ、と。
祀ろうって気になるだろ？
といって、おれがじっさいに、何かそのへんの石ころに注連縄をして祀ったというわけでもないので、偉そうに言えないのだが、とにかく「原初」は――それもすべてがイマジナリーだった原初は――それじたいが神なのであって、そんなものはもう祀っておくべきだ。
祀ればどうなるかというと、ドカーンとなる。
ドカーンというのは、どういうご利益なのかということになるが、それはもう、神がドカーンとなっているので、「もうそれだけでいいんじゃない」となるのだ。
そもそも旅にご利益なんか要らないだろう。
神がドカーンと鎮座する。旅と原初が体験される。
祀ればそういうふうになるだろう。
原初は、始まりであり、それは永遠の旅の始まりだ。
「祖」でもよい。「祖」は始まりであり、永遠の旅は「祖」から始まる。
それを体験するというのは、体の真ん中を、時間の精髄・空間の精髄に重ねることだ。
時間の精髄・空間の精髄に、体の真ん中をピタッと合わせる。
すると、目的のない進行方向とつながる。
旅には目的がないのだ。
目的に向かう道中で、旅が起こってくる場合もあるが、その場合も、目的そのものが旅を形成しているわけではない。
伝説の秘宝に向かって冒険に出た少年たちの旅は、伝説の秘宝を目的にしているようでいながら、彼らの「旅」そのものは、目的とはパラレルに発生するだろう。
だからこそ、同じ目的で出発しても、ほかの誰かが同じ旅をすることはできないのだ。
山の上に咲いている花を見に行く、という目的を持っていたとして、「じゃあわたしも」と言ってその目的をあてにして出発した者は、なぜかその道中が旅にならないのだ。
旅にならない理由は、じつは単純で、<<「目的」は「永遠の目的」にはならないから>>だ。
永遠の目的ではないのだから、それが永遠の旅になりうる道理がない。
このことは、芸術のすべてに当てはまることなので、芸術を志向する人はぜんいんがよく知っておいてよいことだ。
(故)大江健三郎が、仮に「小説やーめた」と言って断筆したとしても、それで大江が小説家でなくなるということはない。あるいはボブディランが、きゅうにビリヤードをやりはじめて、「これから死ぬまでビリヤードだけをだらだらして過ごす」と言ったとしても、それでボブディランがシンガーでなくなるということはない。
いっぽうで、新興のお笑い芸人が、
「おれ、お笑いやめるわ」
と言って事務所を辞めれば、そのとたん彼はもうお笑い芸人ではなくなる。
彼はもともと笑いへの旅をしていたわけではないので、事務所を辞めればそれでもう終わりなのだ。
彼はもともと、お笑いという業界で「一発当てる」「有名人になってウ

ハウハ」「優雅な暮らしをする」「幅を利かせて権勢をふるう」ということを目的にしていた。

その「目的」は永遠には続かないので、どのようにも永遠の旅にはなりえない。

「目的」はすべて一時的なものだ。

A子ちゃんに言い寄っているB男くんは、何かそういうことが目的なのであって、彼はC子ちゃんと一晩すごせば、A子ちゃんについてそういうことの目的を失う。

このとき、C子ちゃんにも、C子ちゃん側の「目的」があったのだが……まあ、こんな悲惨な話はもう地獄のナマズにでも食わせて、なかったことにしよう。

「目的」のすべてが邪悪なのではない。

目的といって、たとえばペインクリニックにかかる人は、痛みをなんとかしてほしいというのが目的であって、そのことには何の問題もない。

ぜひ、痛みが解決してくれればいいと思う。どうかドクターは、その叡智で患者さんをなんとかしてやってくれ。

「目的」は、このように、健全であれば安全という、グッドなものでもある。

それに比べて「旅」はヤバイのだ。

原初・祖から始まり、永遠につづく。

永遠の旅からもう出ることはない、そのことを決めた（そのことに気づいた）者に、父と子と聖霊の恩寵が降り注ぐ。

本当に「旅」が実在してしまい、表現していないものが表現されてしまう。

時間の精髄・空間の精髄と、体の真ん中が合一し、「進行方向」が現れ、物語としての世界が実在することが顕現してしまう。

ヤバイヤバイ。

何かを祀ってある、わざとらしい限定空間なら、まあよいのかもしれないが、それが見渡す限りのすべてということになると、そのことは一般の人にとってはかなりヤバイ。

とてつもないパニックが起こってしまい、精神に、きっつい切り傷を負ってしまう。

かなりの深手だ。

さしあたりは治癒したとしても、その後に古傷となってうずいてしまう。

とはいえ、おれの場合、それぐらいの旅を常時のことにしていないと、こうして値打ちのある書き話しはできないのだ。

何も祀っていない日常の空間で、このような原初と永遠の旅を現出させるのは、一般の人にとってはすごくヤバイことだ。

人は神を畏れるものなのだ。

それじたいが神である原初、祖、そして永遠の旅というものが、「体験」されるということ、体の真ん中がそれに合一して実在となるということ、そんなことはもうとてつもなくヤバイのだ。

だから、とりあえず、「目的」みたいなものをおっ立てれば、人は安心するのでもある。

芸術家の場合は、ここで「目的」に逃げるわけにはいかないが、かといってレベル１００の旅に直撃されても精神がガチめに損傷するだけなので、ちゃんと鍛え上げられ、手続きを済ませながら、旅を進めていかなくてはならない。

鍛え上げるといって、どう鍛え上げるのかは、いわゆるイニシエーションということになるが、さしあたりこの章の話はここまで。

神を祀れ。

一般人が一般家庭でそれをするのは無理があるので、どこかちゃんとしたところが、こっそり、ちゃんとそういうことをしていたらいいな。

ちゃんと祀ってある、ちゃんとした原初を見たとき、おれは無性によろこび、感動する。

［原初の神、永遠の旅］

六、病気は治るほうがいい

病気は治るほうがいい。

この場合、薬を飲めば治る・収まるというものは、取り立てて「病気」と思わなくてよい。

医療関係者ならわかると思うが、薬を飲んでも収まりがつかない状態になってこそ、それをいよいよ病気というのだ。

病気を治す手のことを「苦手」と言う。

エッなんだそれは、という気がするかもしれないが、辞書を調べてみると、ちゃんと「苦手」の項目にそういう説明がある。

にが-て【苦手】

3 不思議な力をもつ手。その手で押さえると、腹の痛みはおさまり、蛇は動けなくなって捕らえられるなどという。

（デジタル大辞泉）

かといってこれも、スピリチュアルにはまる典型的な入口になってしまうけれど……

ハンドパワーで病気をなんとかしようという発想は、あまりにも安易すぎる、ふつうに健康診断をして標準医療にかかれ。

ただ、なぜか、本当に病気が治るというパターンは実在する。

その場合、病気というのはたいてい、病院ではっきりと検査に出るそれではなく、なんとなく病気「がち」というか、そういうやつのことだ。

なぜか胃腸が弱かったり、ずっと貧血気味だったり、どこかダルさが

続いていたり、しばしば心臓の動悸がしたり、まあ、このあたりはあまりはっきりと言わないほうがいいのだけれど、そうした病気が治るということ、あるいはそれ以上に、そうした病気から<<縁遠くなる>>ということがじっさいにあるのだ。

ふと気づくと、

「あなたって昔、もっとひどい冷え性じゃなかったっけ？」

そうしたものがすっかり治っていたりする。

あるいは、ふと気づくと、

「かれこれ、もう何年ぐらいだ？　なんかずっと元気にやっているな。昔はもっと、定期的に寝込んでいたのに……」

ということがある。

微妙に認識しづらい形で、でも結果的に病気は治り、病気から遠ざかっている。

そしてこのことには、じつは逆もある。

ふと気づくと、

「あいててて」

「……あれ？　あなたって、そんな胃腸弱かったっけ？」

いつのまにか病気が近しくなっている。

もちろん、ただの年齢とか、年齢から持病が出たとか、そういうことも当たり前にあるので、そのことはふつうに医学的に考えるべきだ。

ただそうしたことが、縁遠くなることもあれば、近しくなってしまうこともあるのだ。

病気は治るほうがいい。

そしてそれは、「苦手」にかかわることなので、じつはその「苦手」なこと、あるいは「おっかないこと」によって、病気が遠ざけられているということがあるのだ。

たとえば、おっかない神様がいたとして、おっかない神様のことが「苦手」と感じていたとしても、その「苦手」によって、病気が遠ざけられているということがありうるということ。

意外なことなのだが、自分の得意なことや、自分の肯定していることで、病気を近しくしてしまうということがけっこうあるのだ。

ちょっと気の引けることではあるけれど、このように考えてみるといい。

「正義に傾く人って、その正義に傾くほど、病気に近しくなっていませんか？」

このことは、頭の中で探っていくと、「ひょっとしてそうかも」と思いたくなるような該当例が見つかってくるものだ。

この場合、それを「得意」と言ってよいのかどうかわからないが……

正義を得意とし、それを振り回している人が、なぜか病気に近しくなり、病気を頻繁にし、病気を日常にしていくということがあるのだ。

「得意」、あるいは「親しみやすい」、あるいは「わかりやすい」、あるいは「わかる」「気楽」「肯定できる」でもいい。

そちら、つまり「苦手でないもの」は、しばしば病気を近しくするところがあるのだ。

話半分に聞いておいてもらえばいいと思うが、これはなかなか厄介なことだと思わないか。

そしてなぜか、どこか、あるていど妥当なことだ、というような気もする。

「苦手」というのは、一種の緊張感でもある。

「なんか、この施設、ピリピリしているところがあって、ヘンな雰囲気というか、ちょっと苦手なんだよね」

それが「苦手」ということはよくわかるし、本当にただピリピリしていて雰囲気が悪いだけというところもあるのだが、場合によってはそれだけではない、病気を治す力を持っている場所という場合もあるのだ。

こんな眉唾の話を、緻密にしようとしてもあまり意味がないだろう。
だから大雑把に話すが、あなたはたとえば疲れているとき、いわゆる「絡みやすい人」とだけ付き合い、そうでないすべてを排斥しようとするだろう。
そのことは、病気を近づけるというか、じつは多くの場合で、その時点ですでに病気が始まっていることが多い。
だからといって、それで不治の病にかかるとか、命を失うとか、そういうことではないけれども、だんだんと正気に戻れなくなっていくのだ。
「気」という語を捉えて言うなら、病気の反対は正気あるいは元気だろう。
ふと気づくと、「元気」という状態が、何か月も何年も、得られなくなっている。
案外そういうことに気がつかないものだ。
「なんでですかね、疲れているんですかね〜」
何かその言いようにも、すでに誰にでも気分の悪いものが乗っかっている。
わかりやすく言っておこう。
人は、^^「苦手」を蹴っ飛ばす>>のだ。
「苦手」は、苦手のままでいいのだが、それを蹴っ飛ばしたとき、苦手が失われ、病気を治す・遠ざける力が失われる。
わたしはこのことを、けっこう強調して申し上げておきたい。
苦手を蹴っ飛ばすと病気になるのだ。
ふと気づくと、何か月も何年も、「元気」とは言えない、そういう状態が続いている。
すると、たいていの場合、そのはじまりに「苦手」を内心で蹴っ飛ばしたということがあるはずだ。
あなたが、賢明な大人、知恵のある大人になっていこうと望む場合、どこかに「病気を遠ざける苦手が存在している」ということに気づけ。
賢明な人は、どこかでそのことに気づき、定期的に、
「ここ、ちょっと苦手なところがあるんだよな」
というところに、みずからで脚を運んでいたりするものだ。
「苦手」というのは、体内に、なんとも言えない「苦味」が走るということだ。
けれどもその苦味で、人の身体は、何かを立て直しているところがある。
どれがその苦味で、どれがその病気を遠ざける「苦手」なのかは、あまりにも直接の作用と感触だけのものなので、どれがどうというふうには言い得ない。
でもたとえば、病気で早死にしてしまう人の多くは、けっきょく病院に行かずに、自分の病気を放置してしまった人だ。
そういう人に訊けば、たいてい、
「いやあ、病院は苦手で」
と答えてくれるだろう。
薬さえ飲んでいれば収まっていたものを、それを飲まなかったことについて、
「いやあ、薬を飲むのは苦手なんだよ」
苦手といえばそれは誰でもそうだ。薬を飲むのが得意という人はいない。
「甘いココアを飲むつもりだったけど、やめて呉茱萸湯を飲もうっと」
なんて明るく言う人はいない。
病院とか薬とかいうのは、誰にとっても苦手なものであって、ただ、それを苦手だからといって、蹴っ飛ばすということには大きなマイナスがあるのだ。
苦手であっても、それを蹴っ飛ばさなければ（否定しなければ）、苦手

の持っている力にあやかることができる。
ただこのことも、いよいよ病気のほうに取り込まれてしまうと、もう成り立たなくなってくるのだ。
「苦手」への苦手意識が激烈になる。
たとえば、勉強が「苦手」な中学生がいたとする。
彼は勉強が苦手だ。けれども、それを蹴っ飛ばしはせず、「苦手なままなんとかまともにやってみよう」とした。
この場合、彼は勉強が苦手でありながら、どこか根本的に「すこやか」な少年でありつづけるだろう。
むしろその「苦手」が、彼をすこやかな少年にしているのだ。
これが、「苦手」といって、それを蹴っ飛ばすようになるとどうなるか。
「勉強とかマジきもいんだって！　あーうぜえ、うせろよババア」
とりつくしまもなく、彼の勉強嫌いは、もう「病的」なものになってしまっている。
また、このとき彼および、彼の周囲は、
「勉強ぎらいの虫が出た」
というような捉え方もする。
そのとおり、まるで寄生虫がついたようにその症状は現れ、しかもその寄生虫が増殖してしまったかのように、その症状は進行するのだ。
いったんそうなってしまうと、もう「苦手」を治癒の力として受け取っていくことは困難になる。
「苦手」を苦手として蹴っ飛ばし、自分の得意なことばかり肯定していると、典型的にこういう病気になっていく。
健全・すこやかというのは、^^苦手のほうに進むことができる>>ということなのだ。
病気に陥っていると、^^自分にとっておいしいものしかむさぼれなくなる>>。
たとえば、あるアニメオタクの人がいたとして、そのオタクぶりが「重症」と思えるのは、何もアニメを愛好しているという趣味の問題からそう思えているのではなくて、「自分にとっておいしいものをむさぼるしかできなくなっている」ことでそう思えるのだ。
彼は、就労して、人並みにはたらくということが苦手だった。それが苦手なのはかまわない。そうしたことが苦手な人も一定数いるだろう。それが苦手といえばわたしだってそのことは苦手かもしれない。
けれども、その苦手のほうへまったく進めなくなったということ、自分にとって「おいしい」と思えるほうへしか進めなくなったということ、それが病的なのだ。
彼は、身内以外の他人とコミュニケートすることが苦手で、そのほか、自分で計画して自分で実行していくという建設的なことも苦手としていたし、腰を低くして人に物事を教わるということも苦手としていた。
それらのことを、苦手なりにやっていこうとするとき、「苦手」の作用によって彼はすこやかになっていくが、彼がもうすっかり病気に入り込まれたとき、彼はそうして苦手のすべてを病的に蹴っ飛ばすようになるのだ。
彼はアニメのいくつかについて、「神アニメ」といい、「神回」といい、また作中に「天使」を見い出すかもしれないが、彼の祀るそこに神や天使がいるとはとうてい思えない。
それでも彼は、つついてみると思いがけない強硬さで、自分の得意とするアニメのほうが本当に「正義」だと主張し、自分の苦手とするすべてのことは深く嫌悪して見下すのだ。
人にとって神とはそういうものだ。安直に、しかし思いがけず根深く、彼は自分の得意を神とし、自分の苦手を唾棄・見下して蹴飛ばす。
このことについて何が言いうるかというと、つまり、^^まともな神は、あなたにとって割と苦手なものとして存在している>>ということだ。

人にとって神は、緊張感のある、苦手なもので、畏れの対象だ。
これを蹴っ飛ばしたとき、人は、苦手を失い、その体内を悪い虫に食い荒らされる。
そうなると、もう方向転換しようとしても、そのたびに、腹の中に悪い虫たちが噛みつくようになってしまう。
一方、自分にとっておいしいものを摂取すれば、その腹の中の虫たちはごきげんになるので、そうなるともう、本人が虫のほうに飼いならされてしまうのだ。
「苦手」は本来、その虫たちを追い払ってくれていたのに。
神というと、日本では「祓いたまえ、清めたまえ」だし、聖書方面では病気が癒されるという描写が多い。
ただそのことは、甘ったるい得意・得手ではやってこないのだ。
聖なるそれは「苦手」でやってくる。
苦手に身をひたすと病気が治る。
病気は治るほうがいい。
父の御許か、あるいは愛か、永遠の旅か、どれでも同じだが、それはその進行方向にあるのだから、その方向を示すものとしても、やはり病気は治るほうがいい。

［病気は治るほうがいい］

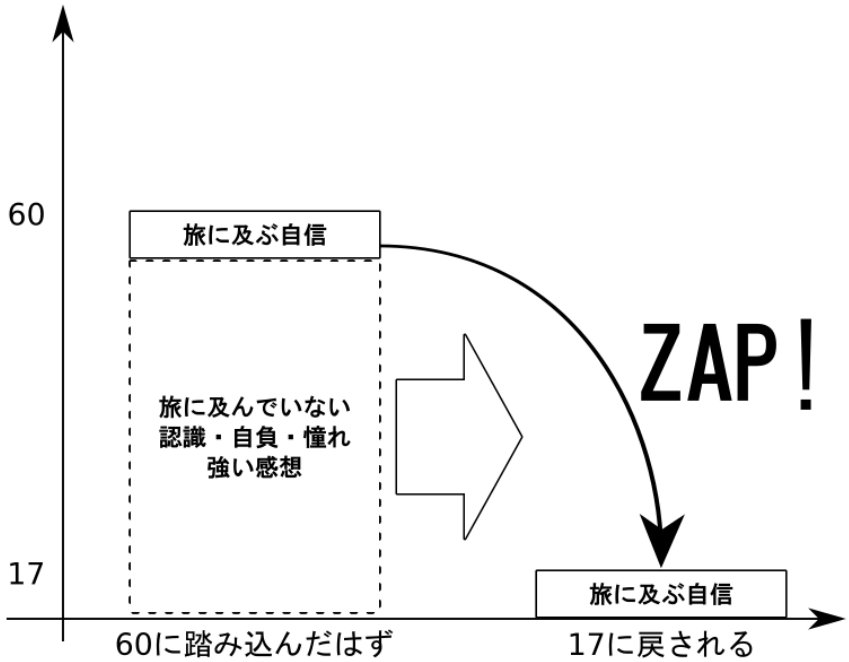
七、ZAP

現実とは、価値観のことだ。
そして価値観とは、何を善とし、何を悪とするか、という所感のことだ。
価値観は、個々人が保有するぶんもあり、一方で、集団として保有するぶんもある。
集団として保有するそれを、現代ではコンプライアンスという。
コンプライアンスは、いわば現実のひとつの権化だが、それで何もコンプライアンスが悪いということではない。
コンプライアンスがないと、悪がはびこるので、しょうがないのだ。
コンプライアンスがないと、たとえば、
「大人になるための通過儀礼だ」
といって、バンジージャンプを強制されるかもしれない。
足首に荒縄をくくり、それを命綱として、高いやぐらから飛び降りるというようなことを、させられるかもしれないのだ。
これは許しがたい悪であり、ただちに、その共同体を罰し、通過儀礼などとぬかしているすべてを、やめさせなくてはならない。
じっさい、そうしたものを通過儀礼としている文化・部族があるのだ。
日本でもたとえば、危険きわまりない手筒花火を抱え、火傷を負いながら火花の中に立ち、最後のズドンという爆発まで引き受けきって、
「これをやりきってこそ、一人前の男」
と言われるような、イニシエーションが課されることがある。
そうしたものはもうすべて滅びたのだろうか、わたしは調べていない

ので知らない。
むかし、京都の大学の新入生は、新歓でお酒を飲まされ、通過儀礼として鴨川に放り込まれた。
早稲田大学の新入生はたしか、講堂前の噴水か何かに放り込まれていたはずだ。
新歓は四月だから、まだ寒かっただろうに。
（そういう問題でもないか）
わたし自身も、若いころ、さんざんそういう通過儀礼を課されてきている。
喉がちぎれるような自己紹介、午後十一時からの 26km ウォーク、命綱なしの岬岸壁這いわたり（先輩に転落・流血者あり）、酔いつぶれていると口から日本酒を注がれる、謎のドリンク一気飲み（ウォッカにタバスコとリポビタンDとネギトロを入れてみました）、辛さ百倍カレーや大量白菜の食い切り、その他思いつきの大食い企画等。
合宿といえば、夜中の二時までミーティングし、翌朝の四時に叩き起こされるというようなことが一週間続いた。
いま考えればめちゃくちゃもめちゃくちゃだ。
酒の席で「粗相」があれば、即、立ち上がってビール瓶を一気飲みだ。
盛り上がっていますね！
あちこちで、盛り上がっていたことは否定しないが、すべては一方的で理不尽だった。
「なんでこんなことをさせられないといけないんですか」
その理由はひとこと、
「伝統だから」
それこそバンジージャンプをさせられる部族と変わらないわけだ。
わたしは、そうした理不尽の極みたる伝統によって、通過儀礼・イニシエーションを受けさせられ、それによって、明るい男になった。
ん？
奇妙なことだ、そんなひどいパワハラをされ、それでもだらしないなどとなじられながら、明るい男になったのだ。
ふつうに考えると、逆、暗い男になりそうなものなのに。
わたしの価値観がそうしたイニシエーション群を肯定しているわけではない。
じっさい、当時はめちゃくちゃブルーな瞬間がいくらでもあった。
価値観で捉えると、たとえば新入生を捕まえて、全員にスパゲティの大食いを強制し、その喫食のありさまを捉えて、
「毛糸を吸い込んでいる掃除機みたいだな」
と罵るように言って笑うのは、端的に言って「悪いこと」だ。
善いことのはずがないだろう。
大量の白菜を食わされて、腹が膨満していくところ、
「お前、もっと白菜の芯食えや！」
という言い合いが同期たちのあいだで起こる。
すると先輩が、
「なんだ、お前ら仲悪いのか」
と嘆いて言う。
違います、あなたがたの企画のせいで、仲が悪くなっているのです。
わたしはそうした、価値観上はただの「悪いこと」でしかないイニシエーションによって、魂のレベルを上げた。
ん？
なぜ魂のレベルが上がるのかって。
そりゃあな、考えてもらいたい。
もはや、大きい声を出すのがなんだというのだ。
わたしはその後、そのアホ合唱団の指揮者になるのだが、そうして人前に立つのが何だというのだ。

卒団してからは就職活動をしたが、いまさら面接ごときが何だというのだ。
もちろん、すべての人がそうして魂のレベルを上げられたわけではないし、わたしはさらにわたし自身で、自分に魂の試練を課していったところがあるので、そのことも加味しなくてはならない。
ただそれにしても原理は同じだ。
理不尽によって魂のレベルは向上する。
合理的な訓練は善で、理不尽な儀式は悪でしかなかろう。
けれども、合理的な訓練だけで、魂のレベルは上がらないということがある。
少なくとも、わたし個人に限っては確実にそうだった。
あくまで、わたし個人に限ってのことかもしれず、さらにはすべてわたしの「気のせい」でしかないのかもしれないけれども、そのことを承知の上で、わたしはそうして魂のレベルを無理やり上げてきたのだと認めて申し上げたい。
幸いなことに、わたしに課せられたイニシエーションには下ネタ系はなかったので、そっち方面でブルーにさせられることはなかった。
それはまた、わたし自身が、知らず識らずそうした人々の集まりを選んでいたということでもあるだろう。
現代では、コンプライアンスが金剛条になったので、こうしたイニシエーションなどというやり方や思想は許されない。
イニシエーションのすべては撤廃され、魂のレベルなどという世迷言については、仮に考え方として採用するにしても、あくまでコンプライアンスの範囲内でやりなさい、ということになった。
しかし、コンプライアンスの範囲内ということは、それは理不尽ではないということなのであって、それでは魂のレベルに大きく作用することはできないだろう。
だからあくまで、いわゆる「自己責任」で、個人が自分自身にほどこすのにかぎり、理不尽でも何でもどうぞ、ウチは知りません、というのが現代のルールになった。
コップ一杯のビールでも、一気飲みさせてヤンヤヤンヤ、というわけにはもういかない。
また、現代でそのようなことをしても、すでにイニシエーションとしての報酬は受け取れないだろう。
根底で、コンプライアンスのほうを上位に置いているのだから、そんなことで魂に報酬を受けられるはずがない。
だから、イニシエーション「ごっこ」は、寒くなるだけなので、本当にやめておいたほうがいい。
「ごっこ」は、寒いだけになるし、その上さらに遺恨まで生じるリスクがあるので、百害あって一理なしだ。
仮に、そうした手続きによる魂のレベルアップなしに、高いレベルの体験を得たらどうなるのだろう。
そのときは、ZAP が起こる。
ZAP とは何だろうか。
このことは、古いコンピュータゲーム「ドルアーガの塔」をやり、その最終面のフロア 60 階に到達すればわかるだろう。
最終面、主人公のギルは、ついに囚われの姫、カイを救出することになる。
ようやくここまで来たのだ、ついに感動のエンディングか。
そのはずが……
なぜかとつぜん、画面が真っ暗になる。
そして変な音が流れる。
画面上に、見慣れない、赤い文字が現れる。
YOU ZAPPED TO…

そしてファンファーレと共に、
「フロア 17 」
という表示が出る。
「……え？」
わたしは、子供のときに受けたこのときの恐怖を、いまでもゾッとして思い出せるぐらいには覚えている。
やってみればわかるが、ドルアーガの塔で 60 階に到達するというのは、なかなかの苦行であって、そう容易なことではない。
最終面、フロア 60 にたどり着いたとき、興奮でたましいが震える。
「もうこの次の面はない」
いよいよだ。
すべてのことをこの目に焼き付けてやろう。
それが、変な音と共に、画面は暗転、急転直下、フロア 17 に戻される。
「えっ？　何これ、どういうこと、えっ？」
虚脱状態と、何かそれを上回る、得体の知れない恐怖がある。
半泣きというか、何かが怖くて悔しくて、じっさいわたしは泣いていたかもしれない。
ZAP なのだ。
当時、わたしの手元には、もちろん英語の辞書などなかった。
ZAP ってどういう意味なんだろう。
いまはインターネットがあるので、その意味をすぐ調べることができる。



――Wikipedia より引用
ZAP（ザップ）は、コンピュータゲームにおいて、一定の条件を満たさなければ次の面に進めず、過去にクリアした面まで戻されるシステムである。
もともとはアメリカン・コミックスにおいて使われているオノマトペで、電気的衝撃やレーザービームなどの放電を意味している。後に**問答無用の消去**や創造者（比喩的にゲームクリエイターなどを意味する）の制裁をも表すようになった。

ZAP の由来が、アメコミにあったとは知らなかったが、解説文にあるところの「問答無用の消去」、また「創造者による制裁」、その言いようはじつにわたしが体験した ZAP の感触に適合するものだ。
まさに、問答無用の、一方的な、創造者による制裁だ。
仮にあなたが、６０日間かけて論文を書き上げたとする。
それを書き上げ、ついに最後の句点を打とうとした瞬間、
YOU ZAPPED TO…
といって、１７日目の時点に戻されたらどうする、どうなる。
そんなもの、もはや「創造者による制裁」だ。
立ち直れる気がしない。
しかし、そうしたことは現実的にあるものだ。
ドルアーガの塔に限ったことではなく、またコンピュータゲームに限ったことではなく。
剣を振るい、モンスターの棲みついた塔を、命からがら踏破してきた。
そしてついに、解決のフロアまできたのだ。
無尽の風が吹く、広く豊かな、神話の晴れ渡るステージまで来た。
そこに踏み込んだ瞬間、
「あれ……？」
急転直下、視界は暗転し、何か不明の、不穏なメッセージを受け取る。
周囲を見渡すと、いつか見た、閉塞したダンジョンの中だ。
暗闇の中に、モンスターどもがうろついている。
了解不能になる。
わたしはいまどこにいるのだ。
さっきまでどこにいたっけ？
「わたしは解決のフロア、神話のステージまでたどりついたのではなかったのか？」

なぜか自分はいま、暗く閉ざされたダンジョンにいて、その湿り気と獣臭の中、モンスターどもに取り囲まれている。
なぜ？
呆然として、もう、何とも戦う気力が残されていない。
そこで次々に、体内に悪霊が侵入してくる。
悪霊どもに支配を受けてしまう。
うわあああ！
そうしたことが本当にあるのだ。
ZAP だ。
アニメ映画「耳をすませば」で、次のようなシーンを見たことがあるかもしれない。
作中で書かれる小説のヴィジョンとして、ひとりの少女が、洞窟で宝石を探しているのだ。
彼女はついに、ひときわ輝く、疑いない最上の、神秘さえ現わすその宝石を、洞窟の玉石から見つけた。
清らかなエネルギーに満ちた碧い宝石。
あふれでてくる、なんという神々しい光か。
「ついに、見つけた。これが、その宝石なのね」
ところが……
手に包みこみ、よくよく見ると、それは醜く汚らしい、死んだひな鳥の骸でしかなかった。
手にしているのは、生々しい死骸のグロテスクさ。
うわあああ！
あれはきっと宮崎駿が創作したシーンとヴィジョンだと思うが、宮崎駿が、何の意味もなくただ印象的なだけのシーンを作中に組み込むわけがない。
明確な意味があってあのような表現を差し込んであるのだ。

ZAP だ。
レベル不足のまま、レベル６０の門をくぐると、レベル１７に突き落とされる。
問答無用、説明はなし、一方的な、創造者による制裁だ。
このことにはわけのわからない恐怖がある。
クリア条件を満たしていない。
さらに、ここまでのわたしの言い方で言うなら、
「レベル６０までの『旅』を満了させてきていない」
ということになる。
自分の踏破したレベルにないフロアに踏み入っても、そこに待ち受けているのは恐怖の ZAP だ。
そうしたことが本当に起こる。
もしわたしが、若いころ、理不尽なイニシエーションも含め、レベル上げや、クリア条件の手続き、若いころの旅を満了させるということをじゅうぶんに済まさず、現在のような書き話しに踏み込んでいたらどうなっていたか。
あえて数字にこじつけるなら、十七歳のころから、じゅうぶんなイニシエーションを受け、ここまでわたしの旅を踏破してきていなかったら、わたしはどうなっていたか。
そのときは、わたしだって ZAP されていたのだ。
ありがたいことに、わたしの受けてきた理不尽なイニシエーション、および、わたしがわたし自身に課してきた無謀な試練は、そのときごとにやりきれないほどわたしをブルーにさせてくるものではあったけれど、結果、正しくわたし自身に旅をさせたのだ。
イニシエーションは旅だった。
それは善悪で言えば、しばしばまるっきり善とは言えず、悪いこと、あるいはもはやただの悪ノリとしか言えないものも混じっていたけれど、そうした理不尽なものが、わたしに旅をさせた。
わたしの自信というのはつまるところそれなのだ。
技術や能力や、善性や実績に自信があるのではない。
理不尽で、悪く、ときには悲惨と言ってもよいような中を、それでもわたしは旅してきた。
理不尽とはいえ、旅だったから、わたしはあちこちにうつくしい風景も見たのだ。
その旅じたいがわたしの自信だ。
幸いなことに、わたしはそれらの旅を、みずからで否定せずに済み、蹴っ飛ばさずに済んだ。
それでわたしは、ゲーム「ドルアーガの塔」を除いては、YOU ZAPPED TO という赤い文字を見ずに済んできている。
レベルの誤認が ZAP に行き着く。
現代人は、ふたつのタイプによって、自分の自信レベルを増長させている。
ひとつには、空想を膨らませ、自分の自信を増大させているし、もうひとつには、人を見下し、そのぶん自分にゲタを履かせ、自分の自信を浮上させている。
どちらにせよ、それらの真相はただの「レベル不足」なので、そのまま高いレベルに踏み込めば、どこかの時点でとつぜんの ZAP を食らう。
本当はレベル６０のことなんてこなせないんじゃないか？
創造者の代理人が、威を示し、あなたに、
「お前は何をしにここに来たのだ」
と言う。
突き放して、あなたを ZAP する。
レベル６０、解決と神話のステージにまで来て、そこにひとり立たされたとき、あなたは、

「こんなところで、わたしに何かが出来るわけがない」
と直覚する。
恐ろしいのだ。
畏れるべき神々が、直接自分の頭上に吹き抜けている。
仮に、ここに「レベル６０の数学を語る会」という垂れ幕があったとして、あなたはその垂れ幕が掛かっている舞台の壇上に、ぬけぬけと上がり込み、そこに設置されているマイクの前に立つのだろうか。
あなたには本当にそんな旅をしてきた自信があるのだろうか。
「レベル６０の歴史を語る会」「レベル６０の文学を語る会」、あるいは「レベル６０の芸術を語る会」、「レベル６０の恋あいを語る会」「レベル６０のコミュニケーションを語る会」「レベル６０の大人と仕事を語る会」、そうした垂れ幕の掛かっている舞台があったとして、その壇上のマイク前に、あなたはぬけぬけと立つのだろうか。
あなたにはそんなことの本当の自信は無いのじゃなかろうか。
それでもあなたは一方で、
「本当の世界に行きたい、本当の世界を歩きたい」
という思いを持っていると思う。
本当の世界を歩いていない人のことを見下しているという向きもあるかもしれない。
「わたしはレベルの低いものと同列にはなれないので」
それであなたは、ふと気づくと、もうマイクの前に立っているのだ。
そこであなたが一声でも発したらどうなる。
あるいは一呼吸さえままならないはずだ。
一呼吸あればもう、そこに立っているあなたが、レベル６０などにはとうてい至っていない、にせものだということが暴露される。
それで、YOU ZAPPED TO だ。
それであなたは、やけくそになり、幼児退行を起こして、じっさいには甘えを振り回し、
「レベル０です。むしろレベルマイナスです」
と言い出す。
かといって、本当に小学生を先輩にして算数を習うわけではないし、四歳の女の子に恋あいの心得を学ぶわけでもない。
どこまでも、自分のレベル差に向き合うのがいやなのだ。
自分のレベルの低さがいやなのではなく、自分の設定しているそれと、自分の本当のレベル、その落差に向き合うことを拒絶している。
われわれはそんなしょうもないことで、見苦しいほどの悪あがきをするような、愚にもつかない連中なのだ。
本当にみずからが踏み出して旅した道だけを、自分の自信にするという、当たり前のことに立ち返らなくてはならない。
本当には旅を満了させてきておらず、クリア条件を満たしていない、そのときまるで創造者による制裁のように、「ZAP」は起こる。
この現象は、じっさいに体験するとき、とても冷静ではいられないほど強烈なもので、本当に叫びだして止まらず、救急車を呼ぶはめになったり、ともすれば、年単位で精神病院に入院することになったりということがじっさいにある。
誇張でなく、もっと直接命にかかわるようなことさえあるのだ。
ここではもうお話しできないようなことが、じっさいにこれまでにいくつも目撃されている。
とてつもない恐怖、感情的動乱、天地ごとすべてが砕け散るような破滅感、そして急激に無数の悪霊に入り込まれるというような、わけのわからないことが起こる。
さまざまな形式を見てきたように思うけれど、これらの現象の原理はひとつ、「ZAP」だ。
あなたの価値観は、あなたのレベルではないし、あなたの感想も、あ

なたのレベルではない。
おれはあなたに、ドルアーガの塔についての感想を持ってもらいたいわけではないし、あなたの価値観に、ドルアーガの塔を認めてもらいたいわけでもない。
ZAP も含め、ドルアーガの塔だってわたしの旅のひとつだった。
だからドルアーガの塔についてこんなに自信たっぷりの話をしている。
あんなもの、攻略情報なしにクリアするのは無理だよ。
そのように、確実きわまる自信を添えて申し上げることができる。
それでわたしは、あなたにも、そうしてささいなものでいいので、たしかにあなたの旅だと言えるような旅を、獲得されますようにと望んでいる。
わたしは数々の、理不尽なファミコンゲームにイニシエーションを受けてきた者だから、こうしてファミコンの話でもしていれば ZAP はされない。
現代において、もちろんイニシエーションなんて考え方は、コンプライアンスにおいて禁止・廃絶されたのだけれど、それでもあなたがその中の何かを蹴っ飛ばさなければ、その蹴っ飛ばさなかったものだけに限って、あなたは ZAP を受けなくて済むようになると思う。
それでは、共に最上階を目指しましょう。

［ZAP］

八、リセット

わざわざひとつの章を与える必要もないと思うが、ZAP について、もうひとつの回避パターンがある。
それは、なんとなく ZAP を予感して、先にリセットボタンを押してしまうというパターンだ。
どうせ、このままフロア 60 に踏み込んでも、ZAP されるんだろうなという予感がある。
クリア条件を満たしている気は、まるでしないし、フロア 59 までの旅を満了させてきたとも、まるで思えないのだ。
フロアだけ、次の面、次の面と、進めてきたけれど、たぶん肝腎なことのほとんどを取りこぼしてきていると思う。
だから、フロア 59 の時点でリセットボタンを押す。
すると、いちおう ZAP は回避される。
それで、フロア 59 までの旅は、肯定されたような、否定されたような、よくわからないものになる。
世の中にはこうして、万事に「リセット癖」がある人が少なからずいる。
「あんた、フロア 59 まで行っているって、言っていなかったっけ？」
「あ、うーん、それ？　それはもう、なんか、いいかなって」
あるいは、
「どうすんの？　次のフロア行くの」
「うーん？　どう、なんでしょうね。うーん。まあ、なんか今じゃないのかなーって、思うのは思う」

はたまた、
「次はいよいよ最終フロアってわけか？」
「……あー。……ん？　いや。……あー。あ？」
たとえば、大学生が、活発に・意識高く、何かしらのサークルに入ったとする。
「先輩たちに、面白い人たちが多くて。なんか尊敬できるというか。だから、ちょっとここでやっていこうと思う」
それが二ヶ月ぐらい経つと、
「なんか？　ちょっと思っていたのと違うところもあって。うーん、なんていうか、説明はむつかしいけど。とりあえずいまは、次のことに向かうために、連絡先とかぜんぶ消したの。申し訳ないけど LINE とかぜんぶブロックさせてもらった。ちょっといまは立て直しのフェーズ」
要するに、誰でも口にしそうな、
「いったんリセットで」
を、えんえん繰り返している。
たしかにそれを繰り返すかぎりは ZAP は来ない。
それで当人は、いつもあたらしい前方に向かっているふうに言い張ることができるけれど、客観的に見たら、どう見てもそれはリセット癖のなかに閉塞しているだけだ。

①何のイニシエーションもない
②レベルが上がらない
③レベルが不足のまま進む
④ ZAP の予感が近づいてくる
⑤いったんリセットし、再スタートする。ZAP は回避された
①何のイニシエーションもない
……

このことを繰り返している。
「リセット」すると、解放感があり、何か初心を取り戻したような気にもなり、まるでそれが勇敢で正しいことだった、というような気がしてくるものだ。
たしかに、悪癖や悪習に対しては、いったんリセットしてしてしまい、それはもうリスタートしないというようなことが有効だったりもする。それはどこにでも・誰にでもあるごくふつうのことだ。
たとえば、女性の中には少なからずそうして、ホステス・水商売に勤めてみたけれど、途中で、
「いったんリセットだわ」
と思い、リセットすると、もうそのことをリスタートはしなかった、という経験を持っている人がいるはずだ。
それは、単に踏み込んでみたけれど、辞退したというだけのことであって、そんなことはごくふつうのことでかまわない。
それと、 ZAP の予感のたびにリセットしているというリセット癖とは、性質が違う。
ZAP の予感のたびに、リセットし、スタート画面に戻るのは、初心を取り戻したわけではなく、ただの自己安着 ZAP ループでしかない。
レベルが3しかないので、4面の手前で、なんとなくリセットボタンを押してしまうというだけだ。
じっさい、ビデオゲームでも、初めの一割ぐらいをプレイして、そこでなぜか急激に、
「うーん」
となり、
「なんか、興味なくなった笑」
と言って、そのビデオゲームを忘れ、次のゲームに手を出すという、

そういう人は一定数いる。
一定数というか、けっこう多いのだ。
本人の挙動は常に、
「本格的なやつは、いいや」
という形で、拒絶的に現れている。
明らかなレベル不足だ。
他人に対してはふだん自分はレベル８０ぐらいに振る舞っていて、それを自分なりに「謙虚」と思っているのだけれど、じっさいにコントローラーを握らされて、主人公を操作させられると、
「あ、なんか、もういいや」
といって、レベル４の手前でコントローラーから手を放し、リセットボタンを押してしまう。
これは、つまり「挫折」なので、英語でいうと「フラストレーション」ということになる。
本人はリセットボタンを押し、何もかもをいったんゼロに戻したことで、
「なんか、こういう解放感って久しぶりというか、ようやくもともとの自分に戻れたって気がする。これでようやく、自分のやりたいことを始めていけるって感じがすごいして、いますごい満足なんだよね」
と言っているが、本人はすっきりしているつもりでも、傍から見るとフラストレーションの蓄積をずっしり感じる。
フラストレーションの蓄積がずっしりあるのに、本人は身軽になっているつもりでいるから、ちぐはぐで、この人は客観的には、^^内部で何かが噛み合っていない、もやもやした人^^という感触になる。
リセットを繰り返し、レベル１〜３の旅をつまみぐいし続けている人のそれを、さすがに「永遠の旅」と呼称することはできない。
ではこれはどのように呼称すればよいのかというと、これはじつは「作輟（さくてつ）」なのだ。
「作輟」なんてことばは、吉田松陰の語録にしか出てこないだろう。
吉田松陰いわく、
「学門の大禁忌は作輟なり」
作輟というのは、「やったりやらなかったり」の意味、とウェブ上には説明されている。
辞書で調べると、輟（てつ）というのは、「いったんやめる」「メンテナンスする」という意味で、たとえば食事中にいったん中断して何か別の用事を済ませるようなとき、それを「輟食（てつしょく）する」という。
（こんな熟語誰も使わないし誰にも通じないので放念してください）
いったんリセットし、いったん中断、いったん立て直して、いったん、いったん、つまり、「輟」。
そうしたことを、毎日のように繰り返しているのは、ただの作輟でしかない。
わたしが思うに、吉田松陰の言った「作輟」を、「やったりやらなかったり」と読み取っているウェブ上の解釈は、不十分で不正確だ。
わたしが思うに、本質は、
「学門の大禁忌はリセット癖なり」
ということにあると思う。
たとえばあなたが、小説を書くサークルに所属し、週に二回、その執筆をしたとする。
その活動日が火曜と金曜だったとして、あなたの一週間のスケジュールは、
［日・月・書・水・木・書・土］
となるだろうし、あなたもそのつもりでいるだろう。
けれどもそれはどういうことなのかというと、吉田松陰曰く、
［輟・輟・書・輟・輟・書・輟］

ということなのだ。
そして、それが学門の大禁忌だといって、つまりそういうやり方をしているようでは、その学門は何にもならないと吉田松陰は言っているのだ。
それはぜったいにそのとおりだとわたしも思う。
週に二回、火曜と金曜、小説をやって、それ以外の日は「輟（や）める」、そんなことを百年続けていても、あなたは何ら小説家にはならないし、一ミリも文学には接近しない。
日曜、月曜、その他の曜日、「輟」のたびに、リセットボタンを押し、スタート画面に戻っているからだ。
そんな旅があってたまるか。
わたしがあなたと同様に、週に二日だけ、文章を書くようにしてみたとする。
わたしの場合、それでも、自分が小説家でない日など一日も存在しない。
自分が小説家でない時間など、二十四時間、三百六十五日、一分一秒だって存在しない。
わたしはこの「永遠の旅」から出ない、と、先の章で説明しているはずだ。
輟は存在しない。
仮に、月曜日、わたしが海で溺れていたとしたら、そのときもわたしは小説家として溺れているだろう。
「リセット癖」とは、何なのか、それは本当には何を意味しているのか。
リセット癖によって、何もかもをいったんリセットする、週に二回でも三回でも……するとそのたびに、「初心」に戻ったような、あるいは「もともとの自分」に戻ったような、そういうさわやかさと解放感を覚える。
ここからあたらしいことを、清潔に、始めてゆけるような……
残念ながらそれは錯覚だ。
それは、初心に還っているのではなくて、「現実の価値観」に還っているだけだ。
現実とは価値観のことだ、と、本章の冒頭で申し上げている。
Aという小説があるとして、AにはAの作中世界というものがある。
あなたは、火曜日にそれを書いたとしても、水曜日と木曜日に作輟する。
そして金曜日になり、ふたたびAの作中世界に入り込もうとするが、水曜と木曜にリセットされているので、作中世界への旅はまたレベル1からのスタートになる。
金曜日に執筆して、旅はレベル3まで進んだが、日・月と作輟するので、またレベル1に戻る。
断言していいが、このことを続けているかぎり、あなたの魂はまったく一ミリだって進みはしない。
趣味・娯楽・お遊び・「やってみたかった」ということで、それが咎められることはまったくないが、もしあなたが真剣に考えているなら、それらのすべては無為に終わってしまうと、わたしはあなたにれっきとしたアドバイスを示しておこう。
永遠の旅に出ていない小説なんて成り立ちようがないのだ。
週にn回リセットの習慣、m年に一度ぐらい「リセット癖があるわあ」、それはあなた自身を取り戻すための手続きなどではまったくない。
あなたが囚われている、根源的な現実そのもの・根源的な価値観に、引きずり戻されているだけだ。
いわば仮出所、いわば入院患者の一時外出の時間があり、その時間が過ぎれば元のところに収監されるというようなことであって、自分を取り戻しているというようなことではない。
もちろんあなたが、そうした囚われの身、<<現実そのものたるどうし

ようもない価値観に囚われているものこそが「わたし」なのだ>>と、断じて強く言うのであれば、それはそのとおりですと肯（うべな）うよりないけれども。

初心に還ってきたわけではなく、旅からはじき出されて「現実」に戻ってきただけだ。

その意味で、やはり「リセット」も「ZAP」も、やっていること・起こっていることにおいて変わりはない。

あなたが七日間、手ほどきを受けて、何か坐禅のようなことをしたとする。

すると七日目に、あなたはレベル１００、広大無辺の宇宙を発見し、その宇宙と自分とが合一するという体験をするかもしれない。

そんなことは、正直言うと簡単なのだ。

額や頭頂部に溶かしバターでも垂らして、おれが指でぐりぐりしてやれば、何かそれっぽい体験なんてすぐに得られてしまう。

その体験が、ただの「気のせい」であってくれたなら、何も危なくはないのだけれど。

じっさい、そうして「宇宙と合一した！」みたいな体験があったとして、それはいったいどうなると思うか。

直後、何かとてつもない、バキバキバキという音が鳴り、宇宙が割れ始めるのだ。

そして、何者かの手によって、問答無用、力ずくで、こね回され突き落とされ、元の自分に戻されてしまう。

現実たる価値観＝あなた、という、元のそれに戻されてしまう。

粘土をこねあげて創り出された十方世界があったはずで、自分はそれに合一していたけれども、とつじょ問答無用の手がどこからともなく無数に差し伸ばされてきて、力ずく、粘土は握りつぶされ、圧し潰され、こね戻され、もともとの買ってきたただの子供用粘土パックに戻る。

ZAP だ。

そんな破滅的・衝撃的なことがあるので、その予感を察し、あなたは六日目に、

「もういいかな、と思って」

と言いだし、そこまでの旅程をリセットする。

たしかに六日目にリセットすれば ZAP は回避できる。

元の自分、現実たる価値観＝あなたに戻されているのは同じだけれど、ZAP の直接的な衝撃はない。

じつはこのような場合、単なる ZAP ということであれば、そんなにショックは受けないし、そこで単なるリセットをするということにも、たいしてためらいはないのだ。

ただ、例外があり、問題は、そのレベル１００の領域で、「あの人」に出会ってしまった場合なのだ。

「あの人」、それは、普遍の父なのかもしれないし、神仏なのかもしれないし、教え、往くべきところ、あるいは愛そのものなのかもしれない。

そのレベル１００の領域で「あの人」に出会った場合、ZAP されると、もう「あの人」に会えなくなってしまう。

「あの人」を失ってしまう。

それが受け入れがたいのだ。

それで、手前のレベル９９でリセットということも、ついできなくなる。

ドルアーガの塔でも、フロア 60 で、目の前にもう王女カイはいたのだ。

それが、王女に手が触れた瞬間、YOU ZAPPED TO… となるから残酷だ。

七日間の坐禅と、オイルつきのぐりぐりで、レベル１００の世界が啓けるなんて、冗談であればいい。

冗談であれば、何の危険もなくて安全だ。無意味な高額を請求されるかもしれないが、そんなことで悲惨というような領域にまでは至らない。
七日間の坐禅とオイルぐりぐりなどという、他人まかせのことで、「永遠の旅をしてきました」と言い立てるというのはいかにも無理があるだろう。
それで、あなたは本来のレベル、きわめて一般的な「ただの現実」に突き落とされる。
一般的なただの現実、それはつまり、価値観であり、コンプライアンスであり、週刊誌でありワイドショーだ。
神話からワイドショーにまで突き落とされ、「あの人」にもう会えなくなる。
しかも、自分がオープンになってしまっているぶん、一気に大量の悪霊にも入り込まれる。
これはもう、ずいぶん手前の時点で、
「……リセットしようかな～」
という思いも湧いてくるわけだ。
なかなか、察しがいいな、と皮肉も言いうるかもしれない。
レベル９９でリセットした人は、自分の旅がわからなくなる。
当人の自覚としては、レベル９９が自分の「到達点」になるのだが、その旅はどうなったのかというと、じつはみずからリセットボタンを押したので、旅としては成立していない。
ズコッ！
思わず、そんなずっこけ効果音も入れたくなるというものだ。
彼は、そんなあいまいなレベル９９の自覚を抱えたまま、どこかのサークル活動に参加した。
「わりと先輩たちに、面白い人たちが多くて。なにか尊敬できるというか。だから、ここでちょっと、やっていこうかなって思っている」
それが二ヶ月ぐらい経つと、リセット癖が出て、
「なんか、思っていたのと違うところが出てきて。それで、立て直しが必要だと思って、いまはもう連絡先とかすべて消して、申し訳ないけどLINE とかぜんぶブロックさせてもらった」
リセット癖、作輟によって、彼のレベルはきっと3ぐらいなのだ。
それで、レベル４のステージが近づいてくると、
「うーん……」
という感じがしてくる。
何が「うーん」なのか。
それは、彼にとってレベル４のことは、手ごわいこと、取り組むのに自分がレベル不足のことであって、脅威にさらされているということだ。
本来彼には、理不尽なほどのイニシエーションが必要だ。理不尽なほどのイニシエーションが課され、それを受けたことによって彼はレベル４に達し、それで迫ってくる目の前のそれを超えて進んでいくことができる。そのようにしか突破と進行の手続きはありえない。
けれども困ったことに、彼のこころあたり、内心の自負は、
「いちおう、レベル９９までは、過去に到達しているはずなんですけど」
なのだ。
レベル９９まで到達した〝猛者〟が、いまさらレベル４でオタオタするところなんて、まさか見せられるわけがないだろう。
レベル４なんて余裕の余裕で朝飯前だ。
そうして余裕のふりをしなくてはならないので、彼はその試練において、とてつもない醜態を見せることになる。
それはもう本当に醜くて、見苦しく、見るに堪えないものだ。
多頭飼いの犬だったら、ほかの犬たちによってたかって噛み殺されるんじゃないかと思えるような、独特の、だめな気配のもの。
多頭飼いの犬においては、じっさいそういうことがある。

犬たちは、レベル差だけはわきまえないといけないのだ。
そうでないと、犬たちはその犬をとつぜん容赦なく噛み殺す。
犬は上位の犬に対し、お腹を出して寝転び、それを服従の姿勢として示す。
上位の犬は、その晒されたお腹に口をぐっと当てる。
そのあいだ、お腹を晒している下位の犬はジッとしている。
このとき、下位の犬が、
「キュゥ〜」
と不満げな声をあげてはだめなのだ。
その声をあげたとたん、上位の犬も、その他の周囲の犬も、とつぜん激昂し、寄ってたかってその一匹の犬を噛み殺そうとする。
本当に噛み殺すのだ。
とつぜん犬たちは、ひとつの流血を為すための、暴徒たち、という様相になる。
血相を変えて、どうしたことだ。
だからといってもちろん、ふだん犬たちがその群れの中で、殺伐として暮らしているわけではない。
野生ならともかく、人に飼われている犬たちなんて、毎日がごきげんだ（見りゃわかるだろ）。
ただそれでも、その中で、「やってはいけないこと」が存在する。
大禁忌が存在するのだ。
われわれは犬ではないので、人をいきなり噛み殺したりはしない。
われわれは本能以外の、学門というものを持っているので、いきなり噛み殺すということを美徳にはしない。
ただ、噛み殺すわけではないにしても、レベル４で躊躇する者が、レベル９９を自負してはいけないし、そこでキュゥ〜というクソの声を出してはならないのだ。
声もそうだし、クソの顔を晒してもならない。
レベル４手前でリセットする者、体感的には「電源がもたない」者が、レベル９９を自負し、キュゥ〜などと言い出すのは万死に値する。
レベル４手前でリセットボタンを押すのは、本来レベル９９到達者にとっては不自然なことだ。理由が成り立たない。
だから、自分でリセットボタンを押すわけではないが、どうなるかというと生理的に、「電源が落ちる」ということが起こる。
レベル１〜３のあいだは元気だったのだが、レベル４になると、きゅうにうつろな顔になり、身体が船をこぎ始め、思考は混濁し、応答はひどく鈍化してゆき、クソ声とクソ顔を晒す。そしてけっきょく電源オフ、リセットに至る。
それのどこがレベル９９到達者なのだ。
クソの声を漏らし、クソみたいな顔を晒している。
犬だったら噛み殺されている。
「やってはいけないこと」が存在する。
大禁忌が存在する。
「学門の大禁忌は作輟なり」
レベルが低いことが禁忌なのではない。
自負するレベルと、直面するじっさいのレベル、その差に直面することを避けようとし、リセットボタンを押す、そしてとつぜん「現実たる価値観」に帰依して平然としている、それどころか「もともとのわたし」を言い張りはじめる、そのいつものリセット癖が大禁忌だ。

［リセット］

九、あなたがフィクションをやれない理由

ちょっとまじめな話をしておこう。
現実とは価値観のことだ。
あなたがフィクションをやれないのは、あなたがそれを価値観から始めようとするからだ。
価値観は「目的」を作り出す。
人は目的に向かって進んでゆく。
それはじつは、進行方向の喪失なのだ。
旅には目的がない。
目的があって遠距離移動をするなら、それは端的には「用事」になってしまう。
価値観は、目的を作り出し、人は目的に向かって進んでいくことになってしまう。
それで、むしろ進行方向を失い、旅を失う。
パパッと済ませられたらそれでいいのに、という思想がどうしてもちらつく。
そのやり方では何をどうやってもフィクションはやれない。
「原点に戻って」、そこからもういちどやりなおそう、としても、その「原点」というのがただのあなたの価値観でしかないから、あなたはフィクションに旅立つことはなく、どこまでも現実に目的を設定して用事を済ませにいくだけになってしまう。
原点といえば、それはオリジン（origin）であって、中学校で習ったｘｙ平面では、原点には頭文字の「O」が示されているのだが、この原点が「ゼロ」なのかそれとも「無限大」なのかは、数学的に決定できない。
本当だ、そのへんの大学のまともな先生に訊いたら、同じことを答えてくれるだろう。
だから原点に戻るといえば、その無限大に戻るということになるのだが、ふつうそんなわけのわからないことは考えないだろう。
原点に戻るといって、たぶんあなたは、ただの想い入れある「わたしらしさ」みたいなものに戻ろうとするはずだ。
それが悪いというわけではないが、もしそれでフィクションへ踏み出そうということであれば、わたしは「無理」「ぜんぜん違う」「見当違い」というようなことを、あなたに言わなくてはならない。
意地悪が言いたいのではない。おれはこの種のことに限ってはあなたにウソを言いたくないし、ウソを言えないのだ。
「わたしらしさ」は、ただのあなたの価値観であって、あなたのオリジンでも何でもない。
原点というか、「原初」に戻らないと話にならないということは、それじたい正しいが、原初においてはあなたは父に愛されていたということだけがあるのであって、そこに「あなたらしさ」なんてものはない。
おれは原初において、父に愛されていたということだけがあり、そのことだけしかいまもないので、おれは好き勝手にやる、それでちゃんとおれのすべては旅になる。
価値観も何も、おれには父からの「来なさい」「来させなさい」という通知がもたらされるだけで、それに従うだけなので、価値観もへったくれもない。
だからおれは、たとえば、

「おっさんは、焼酎ばかり飲んでいてはだめだが、焼酎ばかり飲んでいればいいのだ、そして焼酎ばかり飲んでいるおっさんはだめだ、だからおっさんなんて焼酎ばかり飲んでいりゃそれでいいんだ」

という、矛盾して壊れているような話ができる。

これが壊れているように聞こえるのは、あなたがこの話を認識・観測したときだ。

話を体験し、話を旅しているあいだは、別にそれは壊れていないが、これを認識し、観測し、感想するようになると、「論理がめちゃくちゃで、矛盾して壊れている」というふうに聞こえるようになる。

おっさん＋焼酎ということの価値観が定義されないので、話として壊れているというふうに聞こえるのだ。

だが、おれの話は旅として構造化されているのであり、価値観として構造化されているのではない。

だから話としては、本当は壊れていない。

こんなことでさえ、あなたは聞かされていると、ほんのりと重篤なパニックに近づいていく。

作中世界Ａには、作中世界Ａの価値観がある。

ここではあえて価値観という言い方をしよう、わかりやすさのために。

あなたが、作中世界Ａの価値観から始めることができれば、あなたはフィクションがやれるが、あなたがあなたの現実価値観から始めるならば、あなたはフィクションのやりようがない。

たとえばあなたが、恋愛小説を書こうとしたとする、あるいはラブソングを唄おうとしたとする。

そのときあなたは、

「恋愛……」

ということを考え、イメージし、感想するはずだ。

……とある郊外の高校。十七歳の戸塚ケンジは、自分の身に起こった不思議な超能力について考えていた。その、いつもと違う様子に真っ先に気づいたのは、幼馴染で同級生の櫛原ハルカだった。「どうしたの？」。櫛原ハルカに励まされ、戸塚ケンジはついにこう漏らした。「この街で、近々、大災害が起こる気がするんだ。おれはそういう、予知の夢を見た」。戸塚ケンジの独白を、櫛原ハルカは馬鹿にしなかった。「おれの言っていること、馬鹿にしないのか」「馬鹿にしないよ。だって……じつはさ。わたし、祖母がその筋では有名な祈祷師でさ」。

こうしたものが一般にフィクションと思われているが、そうではない。

これは、現実の価値観から、「仮にこうしたことがあればいいな、うらやましいことだ」という空想と願望をひねり出したものにすぎない。

もちろんそうした空想・願望の産物が、一定の需要に応えることは大いにありえて、つまりこうしたものが「ウケない」わけではない。

ただこうしたものは、原理的にはフィクションではなく、じつは〝空想・願望というノンフィクション〟に属するのだ。こうしたものは分類上、「非現実のノンフィクション」にあてはまる。

戸塚ケンジは、櫛原ハルカの親し気な、距離の近い振る舞いと、女性として成熟してきた肢体の弾みにいちいちドキマギし、一方で櫛原ハルカは、子供のころ戸塚ケンジにもらった誕生日プレゼントをいまも大切にしている。

こうしたことは、フムフムといってあなたにとっては理解するのが容易で、またわざとらしく面映ゆい思いをさせられながらも、そのぶんあなたの一定の感想・感興に訴えかけることが容易なのだ。

そしてこうしたことは、あなたに何らの精神的なおびやかしも仕掛けないし、あなたにおいてはここでわずかもパニックに引き込まれるところがない。割り切って言うなら、これは「安心して楽しめる空想・願望の作り話」だ。ここに作中世界Ａの価値観などいうものは存在しない。

櫛原ハルカが不注意で赤信号に踏み出したとき、直交する自動車から

はクラクションを鳴らされ、
「ばっきゃろう、赤信号だぞ！」
と野卑な男の声で言われるに決まっている。
それらのことは、すべて現実の価値観から発生しているのだ。
（だからこそあなたは、なんとなくだが、この戸塚ケンジと櫛原ハルカのストーリーの「続き」が、自分でも書けそう・思い描けそうというような衝動を覚えているのだ）
戸塚ケンジと櫛原ハルカの、甘酸っぱい学園・超能力・恋愛のストーリーに、あなたが関心づけられたとしても、そうしたものは原理的にフィクションではない。
<<現実の価値観に根差した非現実空想であり、現実の価値観に根差しているからこそ、このことはあなたに何らのパニックももたらさない>>のだ。
戸塚ケンジと櫛原ハルカの作中世界には、作中世界の価値観というものがない。だから彼らは、木造帆船に乗って集落を襲撃し、略奪にその栄光を掲げるというようなことはしないし、腹に三条もの自刃を入れて、潔白と忠義を示して死に果てるというようなことをしない。
かつて北欧のバイキングたちには、略奪に掲げる栄光というものがあったのだろうし、かつて日本の武士たちには、割腹して果てる本懐というものがあったのだろう。それは現代とは異なるいつかの・どこかの価値観だった。
あなたは作中世界Ａの価値観に根差して始めることができないので、フィクションを取り扱うことができない。
おそらく戸塚ケンジと櫛原ハルカはこの先、現実の価値観に規準して英雄たる少年少女になり、現実の価値観に規準して、ハッピーエンドになるのだろう。

作中世界Ａの価値観がないということは、作中世界Ａの現実がないということであり、よって、書き手にせよ読み手（視聴者）にせよ、係る人たちが作中世界Ａを旅するということはできないということになる。
非現実の空想と願望に浸ることはできるが、作中を旅することはできないのだ。
「非現実の空想に耽溺するのがわれわれの現実の一部だ」と言ってもいい。
仮にあなたが、これから数か月間の海外旅行に出るとしても、その旅先に既知の価値観がずっと続くのであれば、その数か月はあなたにとってたいした旅にはならないだろう。
あなたが、「あなたらしさ」という、ただの現実たる価値観を自分のオリジンだと思い込んでいるかぎり、あなたはわずかもフィクションを手がけることができない。
甘酸っぱい学園の、制服を着た男女の超能力ラブコメなんて、すべての「原初」から存在しているわけではない。
「旅」は、原初から始まり、永遠に向かいつづける、ということで生じている。
原初そのものが、永遠そのものに向かっていくということ、その「進行方向」として「旅」という事象が発生しているのであり、人が長距離の切符を買って移動することで旅が生じているわけではないのだ。
旅という事象そのものがそのように発生しており、その旅を「体験」するということは、その事象にみずからの体を重ねる・合一させるということで見つかり、得られてくる。
原初から始まり、永遠に向かっていくその「進行方向」の事象について……まず「原初」にはまだ空間も時間も始まっていなかったのだから、存在するのはまだ「時間の精髄」「空間の精髄」のみとなる。
この「原初」、「時間の精髄」と「空間の精髄」におのれの体の真ん中を

重ねると、そのとたん出くわすもの・出会うものがあるのだ。
そのとき、進行方向そのもの、「父」と呼ぶよりない事象に出くわし、それに出くわしたとき、自分がその父に対して「子」でしかないということを直接体験する。
時空間の精髄に重なっているかぎり、子たる自分は父に向かう、その旅にしか進みようがないということがわかるのだ。
この「精髄と進行方向」からドロップアウトして、週刊誌とワイドショーから価値観を形成し、価値観から目的が形成されて、その目的に向かうというようなことは、ひたすら旅の喪失でしかない。
そして、なぜそのようなドロップアウトが起こるのかというと、われわれが何かを認識し、何かを観測し、ただちに感想し、さまざまに「行（おこな）って」しまうということ、それによってわれわれは旅からドロップアウトする。
本来、時空間の精髄に体の真ん中を合一させているとき、われわれは何もできなくなるのだ。
何ひとつ「行う」ということができなくなる。
何ひとつ「行う」ということができなくなれば、どうすればよいだろうか。
それはもう、進行方向そのものが変容するしかない。
われわれが、何ひとつ「行う」ことができなくても、進行方向たる「父」のこころが、たとえば「春」に変化するのであれば、われわれは春の旅に向かうだろう。
またわれわれが、何ひとつ「行う」ことがでなくても、われわれがたとえばひとつの小説を祈るなら、祈りは父に聞き遂げられ、われわれはその小説の旅に向かうだろう。
われわれが「行く」のではなく、また、われわれが「行う」のでもない。
地図上のA地点に「行く」ということ、またその移動を「行う」ということは、旅にはならないのだ。
進行方向そのものが、A地点を示し、「来なさい」と呼びかけてくる。
そのときわれわれに何の目的があろうか。
何の目撃もなくわれわれはA地点に向かうよりない。
われわれの進行方向じたいがそれなのだから。
そうしてAへの旅が発生し、そのことは、われわれじたいに発生しているのではなく、われわれがただみずからの体中枢を［原初→永遠］の事象に重ね、合一と旅を賜っているだけなのだ。
この現象がフィクションだ。
このとき、呼び込まれるA世界には、A世界の価値観があったとして、そのことと、われわれが現実生活でこしらえる価値観に何の関係があろうか。
呼び込まれるA世界は、進行方向にある形式・forms であって、それはわれわれの現実たる週刊誌やコンプライアンスの価値観からこねくり出されたものではない。
それどころか、このフィクションという事象は、時空間の精髄にあり、原初から永遠までを貫いているので、フィクションにはもはや「今昔」や「距離」といったものさえ存在していないのだ。
だからわれわれが知る日本の古典的な寓話は、「むかしむかし」「あるところに」という、今昔と距離を否定した冒頭から語り出される。
このことを、概念として検討するぶんには、あなたはスリルを味わいながらも、精神に負担は覚えないだろうが、もしこうしたことの実物が目の前に示され、気づくとその旅にあなたも体ごと連れ込まれているということになったら、そのときあなたにはもうスリルを楽しんでいるような余裕はない。
現実の価値観とA世界の価値観を混同するようなところがわずかでも残っていれば、そのことはあなたに強烈な ZAP をもたらすだろう。

永遠の旅からはじき出されるのだが、そもそもあなたは一般の感覚において、永遠の旅などというものをそこまで差し迫ったものとして考えていないだろう。

あなたがフィクションをやれない理由は、この「えげつないこと」に、とてもまともなレベルでは踏み出せていないからだ。

こんな話は、こうした説明だけでも、あなたの精神に深い動揺をもたらしかねない。

これでも、わたしはこうして説明しているときには、永遠の旅からだいぶはみ出して、永遠の旅を一時休止して（つまり作輟して）、説明しているぐらいなのだが、それでさえあなたの精神はおびやかされよう。

だから日常的に、現実的に、また週刊誌的にも落ち着きうるよう、次のような言い方を示しておく。

「だから、フィクションだって言っているでしょ」

現実の価値観から見たフィクションと、フィクションの価値観から見たフィクションは異なるのだ。

ここではあくまで、便宜上「価値観」という用語を用いた。

フィクションの側は、原初から永遠へのものなので、価値観なんてものはとうぜん存在していない。

原初から価値観なんてあったはずがないのだから。

原初からあったのは進行方向だけ・旅だけだ。

あなたがフィクションをやれない理由にあてがい、おれがフィクションをやれる理由を述べて締めくくっておく。

おれはフィクションを「行（おこな）って」いるわけではないのだ。

「進行方向がそれになってしまいやがる」というだけ。

もしフィクションを「行おう」としたならば、おれもあなたと同じだ。

そのときはおれも、フィクションをやるなんてことはできない。

十、仕事が面白い人は少ない

社会人の主題は「権力」だ。
仕事が主題ではない。
もちろん世の中には、仕事を主題に、がんばってくれている人もいる。
わたしはそうした人には、当たり前だが、最上の敬意と、最上の称賛を覚える。
すばらしい、ありがたい、としか思わない。
またその磨かれた専門性に、「かっこいい」という感動もする。
ただ、そうして仕事を主題にしている人について、われわれはその人をあまり「社会人！」とは感じない。
たとえば、Y駅の駅前に、形成外科のクリニックがあり、いつも腰や肩を痛めた人たちが、治療してもらおうと集っている。
ドクターは、まるでマッドサイエンティストというふうのフル装備で患者のところにやってきて、
「どうされました」
と訊いてくる。
医者らしく、笑顔に努めてくださっているが、その眼光がすべてを裏切っている。
その眼光が、シビアに、鋭く、貫通して、自己決定されて、
「治してやるぞ」
と語り迫っている。
逆に、怖い。
そして、肩関節の要所に、ものすごいピンポイントでヒアルロン酸の注射をするのだ。
一度経験したが、
「痛デェッ！」
それはまあ痛くてしょうがない。
とはいえ、その鋭さのあまり、
（めっちゃ正確に、めっちゃいいところに入ったな）
ということもわかる。
ものすごい仕事だ。
毎日、患者全員に対し、こんなことをしているのか。
すさまじい日常だ。
こうした人のことを、われわれはあまり「社会人！」とは感じない。
このドクターの主題は、まるで権力にはなく、ひたすら診断と施術にあるからだ。
あなたが社会人になったとき、社会人の何たるかを知るのは、きっと入社してすぐのことではない。
数年経ってからのことだ。
社内でそれなりに変動があるだろう。
営業部のフロアに「役員」と呼ばれる人がやってくる。
そのときの、課長の振る舞い、部長の振る舞い。
「えっ、何このムード」
ふだんは、クセの強い課長と、万事が緩慢な部長だ。
そうした個々の特徴が消し飛び、一斉にザッとその席を立ちあがる。
そのとき、全員がきゅうに、「腰の低さ」を体現している。
とつぜんどうしたんだ？
横柄だった人も、悪質だった人も、ふだんの性分をいっさい失っている。
役員は彼らに対して人事権を持っているのだ。

つまり、クビにもできるし、左遷もできるし、昇進させることもできる。
「権力そのもの」が営業部のフロアに現れ、彼らは彼らが「社会人」であることの、本性がそこに現れる。
それはある意味、お見事、というほどのものだ。
そのことが悪いと言っているわけではない。
ただ、本当に、誇張なしに、掛け値なしに、ガチで、そういうものなのだということ。
たとえば一時期、水族館で、クリオネという生きものが流行った。
まるで猫耳をつけて、翼を持ち、ふわふわと海中を泳ぐ、その半透明の姿は、凍った海の妖精みたいに見える。
けれども、そのクリオネも肉食動物であって、ほかの生きものを捕食するということをする。
そのとき、クリオネはきゅうに、「こういう生きものなんだな」というありさまを露出するのだ。
きゅうに、エイリアンみたいに、バッカルコーンを体外に伸ばし、
「えっ、そこが割れるの？」
とんでもない捕食の仕方を見せる。
それが悪いというわけではない、それがハダカカメガイということなのだ。
それと同じように、「それが社会人だ」ということがある。
権力が主題なのであって、権力に対してはきゅうに、「ええっ！？」というような挙動を見せる。
スーツを着ていたり、ネクタイを締めていたり、電話応対をしていたりという、ああいうのはすべてフェイクだ。
権力の海をおよいでいるカメガイだと思ったほうがよい。
クリオネから天使を学ぶことはできないように、社会人から仕事を学ぶことはできない。
本当に、びっくりする。
役員にとって、誰かの態度が気に入らなかったら、その口の利き方、振る舞い方ひとつを理由に、本当に人をクビにしたり、左遷したりするのだ。
マンガじゃあるまいし、というような、子供じみたことを本当にやる。
アホなんじゃないかと思うが、そのとおり、本当にアホなのだ。
流氷の下にふわふわ浮いているクリオネにこれという知性や悟性はないだろう。
それと同じように、大企業の従業員や役員にも、割とそういう人が混じっている。
これという知性や悟性はなく、「権力」に対して神経系が興奮して挙動しているだけだ。
悪口を言っているのではない。
本当に、冗談でなく、そういう生きものだと言わざるを得ないのだ。
これがただの悪口だったら、どれほど人間味にあふれているものか。
現実はそんな生っちょろいものではない。
なぜこんなことになってしまうのか。
誰だって、何十年も生きた結果、権力カメガイになりたいと望んだわけではない。
でも本当にそうなるのだ。
むしろそれぞれに、人情派ふうを振る舞ったり、ユーモラスふうを振る舞ったり、老成ふうを振る舞ったり、さまざまに工夫しているところがあわれに思える。
立場はどうあれ、単純なこととして、それぞれは人間らしくあろうとしているのかもしれない。そういう努力の気配が見える。
でもダメだ、まるで「権力虫」という寄生虫が脳内・扁桃体に入り込ん

でしまったかのように、けっきょくのところ「権力」に反応して痙攣的な挙動をするのみ。そのことから逃れられず、それ以外のことをけっきょく持っていない。

彼が権力で何かを支配しているというより、当人が権力という事象に支配されてしまっているというように見える。

なぜこんなことになってしまうのか。

根本的には、単純なこと、

「仕事が面白くなかったから」

だ。

彼らは、若いころにも、また中年になってからも、いわゆる仕事人間、仕事の虫、というような様相を現わしていた。

では、仕事が面白かったのかというと、じつはそういうことではなかったのだ。

仕事を面白いと思ったことは一度もなかった。

そもそも「面白い」とは何のことを指すのだろうか。

たとえば、じゅうぶんな練習さえすれば、誰でも交響曲を演奏することはできるだろう。

百人を集め、百人が百人とも必死に練習すれば、やがて交響曲を演奏できるようになるはずだ。

ただ、そうして交響曲を演奏することの、何が「面白い」のかと言われると、何が面白いということは説明できないのだ。

あるいは、物理において、物体の「運動量」は、 mv という単純な積で現わされる。

この運動量を速度で積分すると、(1/2)mv^2 となり、この値は「運動エネルギー」となる。

運動エネルギーは、位置エネルギー(mgh)と同じ単位のエネルギーなので、初速度 v さえわかれば、投げ上げられたその物体の到達する高さが計算できるということになるし、そのことに重さは関係ないということになる。

こうしたことは、誰でもじゅうぶんに勉強すればわかるようになり、計算できるようになるものだ。

ただ、それが計算できるようになったとして、それの何が「面白い」のかは説明できない。

説明できないが、こうしたことを、

「へえ〜、面白いな！」

と体験する人も事実として存在する。

ただ、その存在は数的割合としてとても少ない。

ロミオとジュリエットという演目があったとして、それが舞台上に演じられることの、何が「面白い」のかは説明できない。

じっさい、どんな名演であっても、客席の中にはそれについて、

「眠くてしょうがない」

と感じている人もいるのだ。

大河ドラマは面白いと体験できても、恋愛ドラマはまったく面白いと思えないという人もいる。

マージャンのルールと将棋のルールを、百人に教えたとして、マージャンを面白いと体験する人もいるし、将棋を面白いと体験する人もいる。あるいは両方面白いと体験する人もいるし、どちらも面白いとは思わないという人もいるだろう。

カエルが幼体のころオタマジャクシで、エラ呼吸をしており、それが生体になると、肺呼吸をしている。それが両生類だというということについて、それを「面白い」と体験する人もいるが、それの何が「面白い」のかまったくわからないという人もいる。

五・七・五に季語を入れて、花鳥風月を詠んだとして、それの何が「面白い」のか。それを「面白い」と体験する人などごく限られている。

古今東西のゲーム機、それこそカセットビジョンから任天堂 switch 2までをあなたに与え、かかわるゲームソフトのすべてをあなたに与えたとしても、あなたがビデオゲームを「面白い」と体験するとはかぎらない。

「面白い」ということは、じつはまったくよくわからない現象なのだ。

そのことが、仕事についてもまったく同様に起こっている。

たとえば、まったくあたらしい自動車のエンジンを開発するという仕事があったとして、その仕事が「面白い」のかどうかは、誰にも決定できない。

東南アジアの発電プラントの建造に入札するため、二年間かけて見積もりを作るというような仕事があったとして、それが「面白い」とは誰にも言えないし、「面白くない」とも誰にも言えない。

週末の気温と天候を予想して、仕入れの量を変える、夏場のビアホールの店長という仕事があったとして、それの何が「面白い」のか。

新素材からあたらしく軽量で頑丈なガレージ屋根を設計・販売する、その仕事の何が「面白い」のか。

マヨネーズの容器にマヨネーズをボトリングするロボットとコンベアを設計する、その仕事の何が「面白い」のか。

自社が消費者からどのようなイメージを持たれていて、どの購買層を開拓しなくてはならないかを見抜き、あたらしい戦略を打ち出していく、そのマーケティングの仕事の何が「面白い」のか。

空きスペースと貨物のM3を把握して入出庫を間に合わせる倉庫の仕事の何が「面白い」のか。

何が面白い、ということは説明できないし、誰にとっても面白い、というようなものは存在していない。

じつは、社会人といって、多くの人は自分の仕事を「面白い」とは体験していないのだ。

仕事に「面白い」ということを発見できていない。

「面白い」と発見していないそれを、まさか主題にしていると言い張ることはできないだろう。

ロミオとジュリエットを面白いと発見できていない人が、それを演じたとしても、まさかその劇作を主題にしていると言い張ることはできないだろう。

では、いわゆる典型的な「社会人」の人は、仕事を主題にしないまま、どうして表面上はいわゆる仕事人間、仕事中毒、仕事の虫、というような振る舞いを見せるのだろう。

それは、おどろくべきことだが、彼らにおいては仕事を取っ払っても、じつは「面白い」ということじたいが存在していないからなのだ。

仕事が面白くない、のではなく、「面白い」ということじたいが発見されていない。

「面白い」という体験の機構じたいが、存在しない、あるいは機能していない。

だから、根本的にやりたいことがなく、そのむなしさの補填のために、業務に肩入れしているのだ。

「面白い」が存在しない一方、「楽しい」ということは存在している。

人によっては、パチンコをしているのが「楽しい」と感じられるし、キャバクラに行ってスケベ心と酔いどれに浸っているのが「楽しい」と感じられる。あるいは推し活と言われるように、アイドルやアニメのコンテンツをむさぼっているときが「楽しい」と感じられる人もある。あるいはより健康的に、ジョギングしたり筋力トレーニングをしたり、身体を動かしているのが「楽しい」と感じられる人もあるし、海外旅行が「楽しい」と感じられる人、あるいはラーメンの食べ歩きや銀座のウィンドウショッピングが「楽しい」と感じられる人もある。

けれども、それらは娯楽であり、レクリエーションだ。

楽しいということは、良いことだろうし、必要なことでもあるだろうが、それは「面白い」ということとは異なる。
面白いことに入り込んでいくとき、それが楽しいと感じられることがあるかもしれないが、楽しいことに耽溺することが、面白いという体験になっていくことはない。
たとえば紙飛行機を折るのだって、折り方ひとつで飛びようは変わってくるもので、よく飛ぶ個体も現れてくれれば、なぜかすぐ地面に激突する個体も現れてくる。
そうしたものを、投げ飛ばしていることが、「楽しい」と感じられてはしゃぐ人もいる一方、
「……なんでコイツだけこんなにしぶとく飛ぶんだ？　こっちのやつはすぐに墜落するのに。何が違うんだこれ」
と、その折り方が為す造形と機能に面白さを発見していく人もいる。
「楽しい」ということは誰にでも存在しているし、あるいは「趣味」として、好き、ということも存在している。
たとえば趣味として、ずっと車のカタログを見て、ずっと愛車の手入れをしている人もいるだろうし、中古屋に行って一眼レフのレンズをずっと物色している人もいるだろう。
あるいは、もっと単純に、大量の書類をホッチキスで留める作業をしていたとして、その冊子が百部ぐらい必要でも、
「こういう単純作業が、割と好きというか、なんかやっていて楽しいんだよね」
という人もいる。
そうしたことは、むろん何も悪いことではないが、それでもやはり、それは「面白い」ということとは異なるのだ。
こうしたことについて、いちばんわかりやすく捉えやすいのは、題材として「料理」だと思う。
料理は、誰だって少しはやったことがあるし、少なくとも、それがどういうものかは、誰だってあるていど理解している。
そしてわれわれはよく、
「本を見ながらなら、いちおう料理、できます。できると思います」
と言う。
料理本に書いてあるレシピのとおりに調理すれば、それっぽいものが出来上がるだろうし、それはそれなりにおいしいかもしれない。
が、それを、「面白い」と体験するだろうか。
ここのところで、じつは人は大きく篩（ふるい）にかけられている。
作業じたいが「好き」な人は、野菜を切りそろえているだけで「楽しい」かもしれない。それでよかろうけれど、それは「趣味」「娯楽」の現れだ。
「このレシピ本に載っている、この料理を、やってみたいんだよね」
そうして楽しそうにしている、それだって趣味の現れ、娯楽の表れだ。
目玉焼きを作るときは、卵をなるべく落下させない。
できるかぎり低い位置から、そっと、フライパンに割り入れる。
落下させる・させないで、卵の食感じたいが変わってしまうのだ。
こうして作られた目玉焼きを食べると、
「！」
たしかに違う。
こうしたことについて、
「そうなんですね、覚えておきます」
と言う人がいる。ほとんどの人はそういう応じ方で、それの何が誤っているというわけでもない。
ただ、一部の人は、
「なんだと……？」
「はっはーん」

「なるほど、そうなのか、そうなのか」
と、それを「面白い」と体験するのだ。
いわゆる「社会人」というタイプにおいては、こうしたことは、覚えておく・そのようにする、ということで終わりだ。
「目玉焼きを作るときは、卵を低くから割り入れるんですよね」
そのとおり。
ただ、そのように覚え、そのようにしたとして、それが当人に「面白い」と体験されるわけではない。
料理というのが、このことの題材としていちばんわかりやすい。
料理は、人によって、「覚えごと」にもなるし、「趣味」「好き」「娯楽」「楽しい」にもなるし、人によっては「面白い」にもなるのだ。
それを「面白い」と体験する人にとっては、なぜか、フライパンに卵を低く割り入れるということが、面白くてしょうがないのだ。
一度覚えてしまったら終わり、ではない。
いつまでも、ずっと、繰り返し、それは「面白い」。
わかりやすさのためには、その「面白い」というやつは、いっそ単純にその人に現れている「徳性」だと捉えていい。
勇敢で、すなおで、こころの開けている、そういう人だけに与えられる徳性だ。
なんでもないようなことに、ちょっとした覚えごとや、ちょっとした作業、あるいはちょっとした趣味、ちょっとした好き嫌いのこと、ちょっとした楽しさがある。
ところが、ある徳性が現れている人においては、そこにまったく別のことが体験されるのだ。
「面白い」のだ。
たとえばただのビデオゲームひとつを取っても、クリアの方法は覚えごとかもしれないし、ただの作業という部分もあるだろう。ビデオゲームなのだから、そこには趣味があり、「このゲームは好き、このゲームはあんまり」という好き嫌いもある。そしてもともと、楽しいでしょう、という娯楽性を前提に、そのビデオゲームという遊びは作られている。
その中で、意外に目立たず気づきにくいことだが、まったく別の体験、「面白い」という体験をしている人がいるのだ。
どこからともなく、それを「面白い」と体験するということは、ビデオゲームでも仕事でも同じだ。
「面白い」と発見されれば、そこには仕事があり、「面白い」と発見されなければ、じつはそこにあるのは仕事ではなく「業務」だ。
「面白い」を発見できない人、体験できない人は、公私どちらであれ、「面白い」を体験できない。
だから、業務と娯楽を往復するしかない、ということになる。
そのとき、娯楽についてはともかく、業務に対してはどういったモチベーションで取り組んでいるのだろう。
娯楽は、「楽しい」ということでそれに向かえるだろうが、楽しいわけでもない「業務」には、いったいどういうモチーフがあるのか。
それが、「権力」というわけだ。
権力への執着をモチーフにし、社会人というユニットができあがる。
もちろんたいていの場合、「社会人」の当人にその自覚はない。
(※権力の上位者になっていった人は、たいてい途中で気づき、その自覚を得ている)
面白いことが何ひとつなければ、人はどうなる?
推し活でも何でも、趣味、娯楽、「楽しい」ということにしがみついているしかない。
けれども中には、タフな人もいるのだ。
タフな人は、趣味と娯楽の「楽しい」ということだけに生きず、権力への執着にも生きる。

つまり、タフでない人が「推し活」をしている一方、タフな人は「権活」をしているのだ。

その本質は、ただ権力へのアプローチなのであって、決して仕事熱心なわけではないし、仕事人間なのでもない。

仕事がその人じたいの、大きな側面を構築していくということ、その人のイグジスタンス・命を与えるということは、すばらしいことだが、そのことはそんなに数多く現れるものではない。

仕事が面白い人は少ないのだ。

勇敢で、すなおで、こころが開けているなんて人は少ないのだから。

「社会人」は、仕事が面白いという人ではないので、社会人に仕事を教わることはできない。

あなたは仕事が面白いという人に仕事を教わればいい。

業務のやり方を教わるのではなく、仕事の面白さを教われ。

料理のやり方を教わるのではなく、料理の面白さを教われ。

そう考えたとき、面白さを教わるということについては、じつはあなたの内部に多大な抵抗があるということに気づくだろう。

簡単なことではないのだ。

何の面白さもない「業務のやり方」を教わるほうが何十倍も気楽だ。

ビデオゲームのような安易なことだって、その「面白さ」じたいを教わろうと考えると、あなたの内部に多大な抵抗が生じる。

この抵抗は何なのだろうか。

あなたは、それを教わるどころか、それを「面白い」と言っている人に対して、軽く嘲笑を起こし、その人を「見下す」ということをするだろう。

なぜ「見下す」ということをするのか、その理由は、もうここまでにずっと述べてきているとおり。

仕事が面白い人は少ない。

のみならず、われわれは、仕事が面白いという人に対して、それを教わるどころか、その人を見下すということを選ぶ。

そして権力をモチーフにして、それぞれが「社会人」になっていくというわけだ。

旅に及ぶ自信などまるで足りていないわれわれにとって、みずから勇敢であること、すなおであること、こころが開けてあることは、そんなに簡単ではないということだ。

［仕事が面白い人は少ない］

十一、男の魂をすべて殺した

とびきり面白いお話をお知らせしよう。

いま、四十歳のおじさんも、ノースリーブの女子大生も、話し方が同じ文脈なのだ。

このことは、まず一般の人には気づけない。

「文脈」、わたしはそのことの専門家だから例外的に気づけるのだ。

四十歳のおじさんと女子大生の文脈が同じだ。

それはなぜかというと、男の魂はすでにすべて殺されたからだ。

絶滅、までは至っていなかったとしても、すでに保護された人工飼育にしか見かけないとか、少なくとも市井でも野山でも見かけることがないとか、そういうことがある。

わたしは関西の出身だが、子供のころにザリガニ取りをすると、六割がアメリカザリガニで、四割がニホンザリガニ、というぐらいの比率だった。あるいは七：三ぐらいだったかもしれない。

いま、いかなる池や水路にも、ニホンザリガニを見かけることはまずない。東北の山奥などにいけばまだいるかもしれないが、少なくとも西日本にはもう生息していないだろう。絶滅してしまったのだ。

わたしが子供のころにはどこにでもウジャウジャいた「みのむし」は、いったいどこへ行ってしまったのだろう、もうかれこれ十年ぐらい見かけていない気がする。田んぼにアメンボやゲンゴロウもいなくなった。

そのように、いなくなってしまったものは、もう見かけないのであって、見かけないようになったということは、残念ながらもうぜんぶ殺されてしまったということだ。

かつてわれわれには——人々には——「男の魂」というものがあった。

男の魂が、偉いというわけではないが、そういうものがあったのだ。

ニホンザリガニのように、かつては、

「あった、あった」

ということだ。

ニホンザリガニとアメリカザリガニの文脈は違う。

アメリカザリガニの文脈が悪いというわけではなくて、ニホンザリガニの文脈はもう帰ってこないということだ。

アメリカザリガニに、無理やりペンキを塗ったとしても、それで作り出されるのはニセモノのニホンザリガニでしかなく、そこからはニセモノのニホンザリガニの文脈しか現れない。

例え話がヘタで、余計わかりづらいかもしれない。

ここに、四肢の麗しい女子大生がいたとする。

その隣に、四十歳の、すでに頭が大きく禿げている、けれども若手のような仕事をしている、漫才師の男がいたとしよう。

そして女子大生がこういう話をする。

「なんか、この季節に、湿った空気というか、ムワッとする風が吹くと、どこかのスイッチが入っちゃって、わたしすっごく懐かしい気持ちになるんですよ」

それに対し、四十歳のおじさんが応えて、

「あー、わかる。すっげえわかるわ、そういうの」

と。

「ですよねー」

「そっかあ、○○ちゃんも、そういう詩人みたいな感性ってあるんだ」

そんな感じのやりとりが続く。

このやりとりの、何が悪いというわけでもないし、こんにち、このやりとりに何の不自然さもないし、何の違和感もない。

ただ、わたしは文脈の専門家だ。
あなたが一般の意味で知っている「文脈」というものと、まったく違う次元での「文脈」という現象を、とうぜんわたしは知っている。
もちろんウェブ検索をしても、どこにも載っていないことだ。
専門家がレポートをアップロードしていなければ、ウェブをどう検索しても検索結果が返ってくるわけがない。
まず、女子大生A子と、女子大生B子のやりとりを架空に考えてみよう。

A子「なんか、この季節に、湿った空気というか、ムワッとする風が吹くと、どこかのスイッチが入っちゃって、わたしすっごく懐かしい気持ちになるんですよ」
B子「あー、わかる。すっごいわかるわ、そういうの」
A子「ですよねー」
B子「そっかあ、○○ちゃんも、そういう詩人みたいな感性ってあるんだ」

このとおり、先ほどのやりとりのうち、おじさんを女性B子に入れ替えても、齟齬はまったく見当たらない。
いわゆるタメ口と丁寧語が現れているが、それは単に年齢の序列であって、男女に由来するものではない。
あるいはさらに、次のようにやりとりを創作してみよう。

A子「ほら、見てください。このガラス細工、ヤバくないですか？」
おじさん「うわ、すごい。ヤバいねこれ。こんなにきれいで、すみっこまで超作りこまれているじゃん。えーすごすぎ……あ、なんか、おれけっこうこういうの好きかも」
B子「うわ、すごーい！　ヤバいねこれ。すごいきれいで、すみっこまで超作りこまれてる。まじヤバーい。え、なんか、マジやばい、わたしひょっとして、こういうの超好きかも」
A子「これでお値段、なんと、○万円なんですよ」
B子「えー、けっこう安くない？　○万円じたいは安くないけど、その値段でこれだけのものといえば、アリっちゃアリじゃない。えーどうしよう、けっこう欲しいかも」
おじさん「えー、けっこう安いじゃん。いや○万円じたいは安くないけど、これだけのものでその値段でしょ。アリっちゃアリでしょ。えーどうしよ、いっそのこと買っちゃおうかな」

このとおり、おじさんとB子がまったく同じ文脈を取っても、そこに齟齬はいっさい生じない。
現代のおじさんは、女子大生の魂でしゃべっているのだ。
テレビのロケ番組などで、こういうやりとりを、きわめてありふれたものとしてあなたは見たことがあるし、聞いたことがあり、すでにじゅうぶんな馴染みがあるだろう。
それでもちろん、四十歳のおじさんが、女子大生の魂でしゃべってはいけないということではない。事実、そうしたものが受容され、受容どころかそれがウケている・ヒットしているからこそ、そうしたおじさんがテレビ番組に出てくるほどの人気者になっているのだ。
ただ、ここからは専門的な話になってしまうけれども、「男の魂」がないということは、ある方向への文脈が断たれてしまうということで、これで物語の創作・世界の出現に向かおうとすると、それはもう事実上不可能ということになってきてしまうのだ。
専門的なことなのであまりにも説明が困難だが、強いて言うなら、たとえばそれは世界中で右折が禁止になったというようなことだ。

右折の存在が許されず、右折のすべてが殺され、右折という存在じたいがなくなった。
右折がなくなればどうすればよいか？　それはまあ、左折を三回繰り返せば、結果的に右折は得られるわけだ。二百七十度の左折は九十度の右折だろう。だからいちおう何とかなるというか、何とでもして「やっていける」のではある。
だがそれにしても、すべてを「左折」と「三回左折」でやりくりしていくというのでは、ドライブルートは捩（ね）じくれまくるだろうし、各地で渋滞も起こりまくるに違いない。
それで、何が無理ということではなくても、結果的に、
「もう無理だよ」
ということになるだろう。
そして人々は、ドライブということじたいをやめ、左折と三回左折を複雑に要する出先について、「もう行くのやめよ」ということになる。
そんなことになると、誰もトクをしないので、どうかこの先、すべての右折が殺されることがありませんように。
ではここで、先ほどのやりとりにつき、仮に「男の魂」が存在したとしたら、やりとりはどのように変わるのだろうか。
それについて解説したいところだが、そもそも、解説してもあまり意味がない、ということを先に申し上げておきたい。
問題は、「男の魂」が殺されたことによって、もうその文脈を創作できないということにあるのだから、それを例外的におれが創作できるということを示して説明したとして、何かが解決するわけではない。
「右折があれば、ここでピューッと、右に行っちゃうんだよね」
そのことを示すだけであって、そんなことを示したとしても、事実もう右折は禁止になったのだから、あまり意味がないのだ。
その前提で、なんというか、ただの参考を物見遊山してもらうことにしかならないが、解説していきたい。
A子「なんか、この季節に、湿った空気というか、ムワッとする風が吹くと、どこかのスイッチが入っちゃって、わたしすっごく懐かしい気持ちになるんですよ」
男の魂「はは、そうなの。そうなのね。そうね、そういう季節だからね」
A子「季節って、いろいろありますよね」
男の魂「はは、そう、まさにそうね。季節ってすごいからね」
あえて解説すると、「男の魂」は、女性のそれと違い、「わかるー」という理解・共感の文脈を持たないのだ。男の魂は、理解・共感ではなく「肯定」と「称賛」「よろこび」の文脈を持つ。だからA子の語りかけそのものに対し、おじさんは第一にそれを解するのではなくよろこびを示し、次いで肯定を示し、やがて季節ということそのものを称えるに至る。
こんなこと、よほど鋭敏かつ、そのことの研究を重ねてきた文学者にしか気づきようがないことだ。特殊も特殊、専門的なことであって、とても一般には取り扱いようがない。もしあなたがこのことについて知ったかぶりをしたとしても、その直後にはきつい ZAP が用意されていよう。
なお、それでもまだ、ここに示している解説はずいぶん大雑把なものにすぎず、この情報だけを頼りに精緻な魂のともなう文脈を思案・構築することはとてもできないと、当たり前ではあるが注釈を添えておきたい。
（たとえば、「男の魂」に対比されて示される「女子大生の魂」は、理解・共感とその気色ばみだけでなく、「好き」という独特の文脈も展開する。けれどもそれまで取り扱うと文章量が肥大するため、本稿では割愛させ

ていただきたい）

A子「ほら、見てください。このガラス細工、ヤバくないですか？」

男の魂「どれ、ああ。ああ、これは見事、じつに見事なものだね。こう、きらびやかで、繊細で、丁寧に作りこまれた、それでいて清潔感がある、みごとな芸術品だね」

B子「すごい……こんなの作れるんだ。きれいだけど、なんかこう、きれいなだけじゃないっていうか。こういうの作れる人、わたし本気で尊敬しちゃうかも」

A子「すごいですよね。でもこれで、値段は○万円なんですって」

B子「えー、そうなんだ。けっこう、買おうと思ったら買えちゃうね。でも、なんていうか、わたしみたいなのが買ってもいいのかなって、逆に気が引けちゃう」

男の魂「はは、いや、こういうものはね、やっぱりあなたみたいな、若い女性のもとにあってこそのものだと思うけれどね。うん、気後れするというのも正しい感性のことだと思うけれど、なんというか、うつくしくありたいって指標でね、縁があれば、買っちゃってもいいかもしれない。はは、こういうのは、けっきょくは縁のものだからね」

先の例とはものすごい違いだ。

ものすごい違いなのだが、おそらく一般の人は、これをものすごい違いのものだとは気づかないのだと思う。

こうしてわざわざ抽出して示されれば、目立って理解もできようが、きっと目の前に実物が展開されていたとしても、それをものすごい違い——文脈の発生する原理じたいの違い——のものだとは気づかないだろう。

「男の魂」は、肯定・称賛・よろこびの文脈をあらわす。だからこの場合のおじさんは、A子の「ヤバくないですか？」の語りかけおよび眼前の芸術品に対して第一に「ああ、ああ」と肯定の声を発している。この声は共感・同意の声ではなくあくまで「肯定」の声だ。

「男の魂」は、ガラス細工を芸術品だと称え、眼前に芸術品があることじたいによろこびを示す。そしてB子の感動と気後れについては、その気後れを肯定し、若い女性および彼女がうつくしくあろうとするであろうことを称え、うつくしくある万事に縁というものがあるだろうというふしぎをよろこんでいる。

そして、ここに「男の魂」が介在していることによって、A子・B子の物言いと調子も変容しているのだ。A子・B子はもちろん女性だが、そこに「男の魂」が同伴していることによって、つまり^^彼女らも右折することができる>>ようになっている。右折することができれば、あたらしい旅路が拓けるのはとうぜんのことで、またそのことに長ったらしい紆余曲折も必要なくなる。

このようにして考えると、この「男の魂」というもの、およびその性質（肯定・称賛・よろこび）は、それじたいそんなに捨てたものではなかったのかもしれないと思える。世界のすべてを女子大生「だけ」にする必要はなかったかもしれず、世界のすべてを理解と共感「だけ」——加えて、その理解と共感に「気色ばむ」だけ——にする必要もなかったのかもしれない。

けれども事実として、次のことを考えていかねばならない。

すでにここにふたつの「台本」は作られたのだから、あなたがディレクターとなり、あとは演者をキャスティングすればいい。女子大生ABを用意するのは容易なことだろう。四十歳の、頭の禿げた、若手のような仕事をしている漫才師というのも、詳しい人であれば「たとえばああいう人とか？」ということがすぐに頭に浮かぶはずだ。

けれども、台本はすでに用意され、台本にはすでにセリフが定められ

てあるものの、このセリフをそのキャスティングした「おじさん」にあてはめてみると、じつに齟齬が生じてくる、それは一般的に、「そういうキャラじゃない」と言われる齟齬だ。

ここにある台本に、たとえば往年の、昭和の印象が強い男性などをキャスティングすれば、この演目はすんなり成り立ちえよう。たとえば石原裕次郎や、加山雄三、藤岡弘、など、いかにも「男の魂」という言いようが似合いそうな彼らを当てはめれば、台本は一度のＮＧもなくこなされていくはず。あるいはクリント・イーストウッドのような外国人を配したとしても、その場合は翻訳が挟まるとはいえ、台本・演目としては破綻しない。そしてこのことは何も年齢の問題ではないのだ、たとえば若き日の石原裕次郎を当てはめたところで、やはりこの台本は破綻しない。

わたしがここに示した台本は、あくまで「男の魂」の文脈を現わした台本なのだ。だから誰をキャスティングするにしても、キャラとか演技力とかの以前に、俳優が「男の魂」を宿す者でなければ成り立ちようがない。そしてそのような者を探すというのは、いますでに、ニホンザリガニを道端に探すということのように困難あるいは無理のあることなのだ。あなたは女子大の中を歩きまわり、そこに剣道部の男を探すというような徒労をさせられることになる。

「見渡す限り、女子大生しかいないんですが！」

わたしが台本に記した「男の魂」のセリフは、おそらくあなたの知っているすべての男性知人にあてがったとして、けっきょく誰ひとりにも適合しないのではないだろうか。あるいは現代には、アイドルやアニメやマンガにおいて、女性向けの「イケメン」というコンテンツがあるはず。さらには動画サイトなどではかつて「イケボ」というものがもてはやされ、その「イケボ」のままのプロの男性声優というのもいまは数多くいるだろう。そうして、適用範囲をマンガの登場人物にまで広げたとしても、やはりここにある台本のセリフが適合するイケメンというのは、けっきょくあなたの探すうちには見つからないはずだ。せいぜい、そういう「キャラ」「男くさいキャラ」みたいなものを捏造するしかない。けれどもそれは先に述べたように、アメリカザリガニにペンキを塗っただけのニセモノのニホンザリガニにすぎない。

このことは、逆の視点、補集合を考えればさらにわかりやすくなる。補集合とはこの場合、「女子大生の魂」、「理解・共感の文脈を取る魂」、「その理解と共感に気色ばむ魂」だ。

つまり、

【セリフＸ群】

「わかるー！　それすごい、超わかる～」

「わかるわぁ、それ、いや、すごいわかるわ」

「わかります、それすごいわかります」

「わかる、わかるよ。ああ、すっごくわかる」

「あのさ、それぜんっぜんわかんないんだけど笑」

「いやぁ～　わっからないなぁ……」

「わからなくは、ないっつうか、まあ、わかるんだけど」

【セリフＹ群】

「はは、いやまあ、そういうこともわかるけどれね、なんというか、いろいろあるわけだ」

「そうかい、それをわかってくれってのか。おれにはちょっと、似合いそうもないことだな」

「わからない話でもないが、あいにく、わたしにどうこうできる話ではなさそうだな」

「あー、まあ、わかるのはわかるというかね、わかるんだろうけど、そ

の、ええいコンチクショウ、どうしたらいいって、てやんでえ、こう、役には立てないのが申し訳ないんだけども」

こうしてセリフX群・Y群をしつらえれば、X群が適合する人は、「理解・共感」の気色ばんだ文脈を取る魂を宿しているということがわかる。そしてX群のセリフが適合する人は、Y群のセリフが適合しまい。Y群のセリフを適合させようとすると、おのずと安っぽい「キャラ」を捏造するしかなくなるはず。そしてキャラの捏造などというのは、魂にかかわってはその尊厳を穢（けが）すものでしかありえない。

つまりセリフX群は「女子大生の魂」だ。そして四十歳の頭の禿げた漫才師のおじさんには、すでにセリフX群がばっちり適合するだろうということ。Y群は、何かしらのキャラに入るか、酒を飲んで酩酊したときに、演出がかった愚痴話をこぼすというふうにしか出てくるまい。

こんにちのおじさんは、女子大生の魂でしゃべっているのだ。

アニメに出てくるイケメンキャラクター、そのイケボをイメージしてもらいたい。

「わかる、わかるよ。キミの気持ち、ああ、すっごくわかる」

あるいは、アニメに出てくる「闇」キャラクター、その引っかかる声をイメージしてもらいたい。

「あのさ、アナタがさっきから言っているそれ。クックック、ボクにはぜんっぜん、わかんないんだけど」

さらにはアニメに出てくる「おやじ」キャラクター、そのしわがれ声をイメージしてもらいたい。

「お嬢ちゃんの気持ち、よーくわかったぜ！　じゃあこんどは、男の意地の張りどころってモンを、わかってもらおうじゃあねえか！」

キャラクター性はどうあれ、また作られた「声音（こわね）」はどうあれ、わたしはそれではない「文脈」の出現を見ている。何度も言うが、これは専門的なことであって、まさかこれらの男性キャラクターのすべてが女子大生の魂から文脈を発しているなどと一般に気づく人はあるまい。

イケメンであろうが闇であろうがおやじであろうが、すべて左折している。理解と共感、「わかる・わからない」の方向へしか交差点を進まない。右折はすべて殺されてしまったので、すでに右折という概念じたいが消失しているのだ。「右折の魂」なしに右折レーンだけが勝手に発生することはありえない。

こんにち、夏の日の熱気と紫外線に参って、男性でも日傘を差して歩こうかという気運が高まっている。気運というのも大げさだけれども。

男が日傘を差して歩くのかということについて、われわれはいまでもわずかな文化的抵抗を覚える。われわれはそこに、「男らしくない」という単純なこだわりからの抵抗を見い出しているように覚えるのだが、真相はそうではない。夏の日差しが異常で、「男が女のアイテムを使ってやがらぁ」と見えるぶんには、じつはぜんぜんかまわないのだ。けれどもわれわれが真に恐れているのは、もはや「男が女のアイテムを使っているというふうには見えない」という可能性についてだ。

現代、「男の魂」は事実上すでにすべて殺されてしまっているので、いまさら性別上の男が女性の日傘を使用したとしても、まるきり「別にいいじゃん」に見えてしまう可能性がある。つまり、「女子大生なんだからいいじゃん」と言われてしまう可能性、その真相が露出してしまう可能性に、われわれは怯え、抵抗を覚えているのだ。

極端な話、たとえば天皇陛下が、夏の盛りに日傘を差して公務に立たれていたとしても、そのことに「オカマ」というような下卑た感想を覚える者はあるまい。天皇陛下が熱気と紫外線で黒焦げになることが良いことであるわけがなく、だから陛下が遮光のパラソルをかざされたとしても、すべての国民はそれについて「どうぞ、どうぞ」と思うばかり。ただ陛下におかれては（付度申し上げるのも不遜のかぎりだが）、そうした

パラソルひとつの振る舞いでも、国民の文化に影響を与えるに違いなかろうということ、むしろそのことへの配慮を優先されるかもしれない。
だからともかく、男性が日傘を差したとして、そんなことで男性性が滅ぶ・損なわれるというわけではないのだ。本来、「男の魂」そのものが、それでも夏の陽光は厳しすぎるということで日傘を差していたら、われわれはその光景に、「めずらしいものを見た」というキッチュな笑いを誘われるのみ。そんなことで「男らしくない」にはならない。「男らしくないものを使っていらっしゃいますな」というだけのことであって、彼もまた男の魂で、それに「ああ」と応えるだけだ。
そうではなく、すでに現在、あえて「男らしさ」という粗雑な言いようを用いるなら、<<男らしくないものが日傘を差さずに歩いている>>のだ。粗雑な言いようとはいえ、「女子大生の文脈を発する者を男らしいとは言えない」という論は相当正しいだろう。
現在、二〇二五年の夏、この夏にわれわれは、すでに日傘を差して歩く男性を見かけたとして何もおかしくない。そのことにかかわって生じる文化的抵抗は、じつのところ、
「男らしくないって、笑われそう」
ということにない。
「女子大生として、祝福されそう」
ということにある。
四十歳の、頭の禿げた男が、ついに自分のことを女子大生なんだと認めた。
そのことに対する――〝フェミニン〟に対する――祝福が起こりそうなのだ。
そのことが、何か致命的なような気がして、でもそれが自分の進む先のようにも思えて、われわれはためらっている。
あえて、わかりやすさのためにどうでもいいことを書き足すなら、たとえばわたしの場合、わたしがいまから日傘を差して街中を歩きだしたとして、それによってわたしに〝フェミニン〟という要素は一ナノグラムも現れない。
そりゃ当たり前だ。
日傘を差して歩くわたしの姿を、誰か赤の他人が見たとして、直覚、
「単にそういうことをぜんぜん気にしない人なんでしょ」
としか思われない。
男の魂がすべて殺された現在、それでも安易に確言するべきではないが、同時に言及しないのも不誠実なこととして、やはりこうしたことが特に若い世代の性同一性にかかわる混乱をもたらしているという向きはあると思うのだ。そのことは特に、直接の性同一性というより、性交や俗に性癖と呼ばれることに関わって、
「別に男女とかどっちでもよくね？」
という形で現れているように思う。
現代において高校生たちが、文化祭にかかわって、男子生徒の美男子の数名を、女装させておもちゃにしようということを思いついたとする。おもちゃにするといっても、それは悪意に満ちたことではなく、陽性の遊びごころと親しみに満ちてのことだ。
これまで男性だった彼に、つけまつげをほどこし、アイラインを引き、唇にグロスを乗せる。その頬はすでに下地とファンデーションできめこまやかに仕上げられている。あとはウィッグを足して髪をセミロングにしてやれば、
「えー、すごいカワイイじゃん！」
というものになるだろう。
このことに、すでにかつての時代にあった、「オカマごっこ」に係わって起こっていたゾゾゾとした寒気のようなものは生じてこない。
まるで、「女性としての彼」がそこに平然といるだけのように見える。

「ちょっと待って、スカートはマジでヤバくない？」
「スカートはマジでヤバいわ」
「え、ヤバいヤバい！」
「何これ、ふつうにカワイイんですけど」
この四つのセリフは、それぞれ男女どちらが発したものなのか、文脈からは見分けのつきようがない。すべてが男性の発言でもおかしくないし、すべてが女性の発言でもおかしくない。
男女には性差がある。それは哺乳類なのだから当たり前で、身体に具有しているものも違うし、声質も違うし体型や骨量や筋量も違う。
とはいえ、すでに「男の魂」はすべて殺されているのだから、C男もD子も魂としては同性、女子大生の魂で文脈を発している。だからC男を女装させたとしても、それによって外容と魂の「ちぐはぐ」は起こらないのだ。C男が女装すると、いささか外容と身体生理のちぐはぐは形成されるけれども、むしろ外容と魂は秘されていた整合を顕（あきら）かにし、いまはそちらのほうにこそ説得力がある。それで、いっそD子から見れば、これまで親しい級友だったC男が、より「わかりあえる」存在というように感じられる、そうしたことがあってもおかしくはないのだ。
そうなると、この先にC男は、外出前に日焼け止めを塗るのと同時に少々の「化粧」をし、夏の週末には日傘を差して、意気揚々とD子とのデートに赴（おもむ）くという、そういうことになっていくことがじゅうぶんありえるわけだ。そのときD子にとっての〝性的な相手〟というのは、具体としてはC男であるが、成り立ちとしては「C子」なのかもしれないということになってこよう。
「男の魂」がすべて殺された以上、残された魂は理解と共感、女子大生の魂のみ。もちろん身体に具有するもの・文化的に現時点も継承されているものは異なっており、性差は依然存在するのだけれど、あえて魂だけを言うなら、すでに女子大生というそれしか残っていない。そして、単一の性しか残っていないならば、それはもう「性別のひとつ」ではなく、単一しかないそれを性と捉える必要はもはやない。よって、われわれの魂はついに性という要素じたいを除去したのだ。性という要素を解決する方法はふたつしかなく、ひとつには両性具有、もうひとつには単一性だったが、われわれは魂の領域において後者、単一性による性の解決を為し遂げたことになる。
一方でわたしは、まるで博物館のする仕事のように、あくまで実用のものではあるが、「男の魂」というものを現存させている。なぜ性懲りもなくそのようなことをしているかというと、それこそ実用上のこととしてやむをえないのだ。わたしは小説を書かねばならず、そうしたものはとうぜん魂を呼んで創作するものだから、右左折のうち半分、右折は呼べませんというようでは物語も世界も描きようがない。
よくよく交差点のことを考えてみてもらいたい。日本やイギリスのように車両が左側通行の場合だが、右折が存在せず、すべての車両が直進あるいは左折しかしないのだとしたら、その交差点はもはや交差点ではないのではないか。
センターラインに区切られて、車両の右側には「対向車線」が通っているのだが、われわれがハンドルを右に切ることがもうない以上、互いに交通が「交差」することはもうありえない。こちらは左に曲がるだけ、向こうも左に曲がるだけだ。ならばそれはもう交差点ではない。
右折のすべてを殺した結果、交差点じたいが消失する。
右折がなければ交差点という存在を描くことはできない。
それでわたしは、交差点も描かなくてはならないという理由から、性懲りもなく右折をいまも保存し、実用しているのだ。
このとおり、こんなことを解説しても、何の役にも立たないし、何らの解決にも寄与しないというのは、先に述べたとおり。
それでもいまはあえて、専門的すぎて一般には知り得ようのないこと

を、専門家ぶって申し上げておきたい。
男の魂をすべて殺した以上、われわれの発する文脈がやりとりとなりコミュニケーションとなって、われわれの生きる世界や物語を形成するということはもうありえない。つまり、おれのように話し、おれのように語り、おれのように書くということはもうできない。
わたしは厭味のためにこんなことを申し上げているのではない。本当に、単純な専門性のこととして、「文脈」の生じる魂の問題として、そのような結果と現状がもたらされているということ、そのことをうそいつわりなく報告しているのみだ。無念を思うことはいくらでもできるが、どうしようもない事実はどうしようないものとして報告するしかない。
そのどうしようもなさは、たとえるなら、某国が核兵器を保有しているとして、戦争になればその核兵器を「使う」という事実のどうしようもなさに似ている。
戦争になったとき、人は核兵器を使うのだろうか。
その答えは簡単だ、使わない核兵器を持っている国など存在しない。
われわれは、一般的な感覚としては、核兵器を持っていたとしても、それを戦争において、
「じっさいには使わないんじゃないかなあ」
とイメージしている。
われわれはそうした致命的なものについて、ずっと、「そんな、まさかね」とイメージしているものだ。
けれども専門家は決してあなたと同じイメージを持ってはいないだろう。
男の魂がすべて殺され、全文脈の半分が喪失され、コミュニケーションの構築と満了が「もうない」というのは、無念ながらどうしようもない事実なのだ。
試みに、このように考えてみればなおわかりやすい。仮にあなたがあなたの知人に、ここにある本稿じたいを読ませてみたら、その読者となった知人は、あなたにどのような感興を述べるだろうか。もちろんこの場合、あなたの〝知人男性〟に読ませたと想定するほうが、結果の事象をより浮き彫りにするのではある。
「うーん……まあ、言ってること、わかるっちゃわかるけど。でもおれは正直そこまで思わないな。なんでこんなに切羽詰まったふうに言っているのかがわからない。だからまったく好きにはなれない」
「なんか、根本的にわからないっていうか、言いたいことがあるならもっとはじめから結論書けばいいじゃんって思うわ。回りくどい言い方のせいで、何が言いたいのかますますわからなくなる」
「そもそも、なんでこんなに偉そうに言っているか、それじたいがわからん。それで、読む気なくすわ」
「ふーん。まあ、あちこち同意しかねるところはあるけど、案外わかりやすくはあるよね。右左折にたとえるところはわかりやすくて好きだった」
「いや、これ以外に、おれわかるわ。おれもそういうこと考えたことあって。なーんか、文脈っていうか、考え方とか見方とかが偏るよなあって、そう思ったことあるからすごいわかる」
おおよそはこのような感興が述べられることが予想される。
つまり、もはや言うまでもないが、「わかる・わからない」ということばかりが述べられ、それに付随して、気色ばみのていどばかりが示されるだろうということ。
そうした感興のありようが、誤っているというわけでは無論ない。
ただわたしは、ささやかな本音として、いつぞやの、男どもの魂、それが吐き出す文脈の中で、いつまでもヘラヘラ笑っていたかったのだ。
すべてを読み取って、「お前、バカだろ」と言っていてほしかった。
「そのとおりですよ、見りゃわかる、このとおりのバカですよ」と、わた

しも応え続けていたかった。
見りゃわかる、こんなのただのバカの所業だろ。
そんなのわかんねー奴いないだろ。
そうおれは思っていたのだ。
ところが、本当に、もうわからないんだよな。
ここに示されている真相が、壮大なバカだということがわからないらしいのだ。
そういうシリアスなほうのバカはやめていただきたい……
「男の魂」の文脈？
それが、肯定、称賛、よろこびというのはウソじゃない。
でも、説明する前にわかることがあるだろ、「男の魂」の文脈、それは第一に「バカ」だよ。
「男の魂」なんだから、「バカ」の文脈に決まっている。
それぐらいは、専門家じゃなくても、誰でもわかっていてほしかった……
「わかる」って、そういうことじゃないんだよ。
「この人のどこがバカなんですか？」
「え？　見りゃわかる、この人バカじゃん。うひゃひゃひゃ、すげえよ、かっけぇ。え、この人、ずっとこんな規模でこのバカをやり続けてんの？　マジで？　そんなことふつう不可能だと思うんだけど。ちょっとそれはスゴすぎないか」
な、「男の魂」がないと、どういう文脈かわかんねえだろ。
いいんだよ、本来おれはそれで。
おれがバカをやり、それを誰かがすべて読み取り、「バカだろ！」と言う、おれは「おう！」と応える、本当はそれだけでありたかった。
そうでなきゃ本当にはなにひとつ通じていませんって。
老若男女、ゴミ捨て場まで走って、いまからでも「男の魂」を回収してきたらどうかね。
せめて破片だけでも残っていたらいいんだけどな。
この人バカですよねって、理解するのじゃないし、共感するのでもないんだよ。
「バカ」というのは、肯定であり、称賛であり、よろこびなのだ。
な、「男の魂」がないとわかんねえだろ？
あなたの知り合いの男性は、たぶん残念ながら、理解と共感に気色ばむ女子大生だ。
残念ながら「バカ」ではない。
おれより「バカ」な男なんて引っ張ってこれねえだろ？
（おれよりバカな人って、もう八割がた人生の途中で死んでいると思うぜ）
「うん、うん……いやあ、この人の文章ってね。まず、語り口がものすごい力だね。ものすごい。それで、なんかもう、はは、逆に笑ってしまうっていうか。ものすごく圧倒的で、しかもその内容以上に圧倒的な何かがその背後にあって、それに巻き込まれて、もう笑っちゃうんだよ。整然としているのに、濁流みたいな。いやあ、すごいな。で、ちょっとね、これ書いている人も、本当は説教じみたことを伝えたいわけじゃなくて、こうまでして知らしめるべき『文脈』って現象が本当にあって、ただそれをぶつけてきているんだと思うよ。実物はこうなんだ！　って。それで本当に、それは魂とつながっているんだって、この人は確信しているんだろうね。そうでなきゃ、こんな決死の勢いで書けないと思う。相当な覚悟があるんだと思うよ。その覚悟という一点だけでも、こう、はは、何かあらためて震えてくるものがあるよね。それで、僕は、この人の言うように、文脈なんていうことの専門家ではありえないんだけど、それでも文脈というものは、この人の言うとおりたしかにあるのだろうし、それが男の魂から出なきゃいけないというのも、きっとそうなんだと思

う。うん。たしかにね、文脈といえば、世の中はこのごろ何もかもがずいぶんシリアスになってしまったけれど、思い返してみれば、もっとバカな文脈もかつてはあったはずなんだ。だから、はは、この人はたぶん、いまも自分はそれをやめていない、自分はあのときのままだ、って言い張っているんだろうね。それってすごいことだし、それはたしかに、バカといえばものすごいバカなことだと思う。ある種、意図的にみずから狂っているというような、そうでなきゃやれないことだろう。そう思うと、いやあ、はは、まだまだ僕なんか、賢明ぶってなんかいられないなと思わされるよ。バカだろって言われるようでなきゃ、男の魂がないぞっていうこと、それはたしかにそのとおりだって僕も思うよ」

このような文脈が出現したとき、あなたは、理解・共感・気色ばみの文脈でこれを上塗りするべきではない。

このような文脈の出現について、あなたの理解と共感は、

「これって、いわゆる男同士の会話ってやつですよね」

「なんか、女子供が口出しすんなっていうやつ、ちょっとわかったかも」

「あー、なんかさあ、男っていうのが、みんなこんな感じの人なら、正直それなりに尊敬もできるんだよね。そう思わない？」

と文脈を吐き出して気色ばむ。

あらためて、世界のすべてが女子大生の魂でいいというなら、そのように文脈を吐き出し、先の文脈を上塗りしていい。

けれども、もしあなたが、たとえ博物館に保存されるていどにしか現存していないものだとしても、「男の魂」をそれなりには残すべきだと考え、これ以上は棲み家を奪って踏みにじるべきではないと思うならば、あなたは次のことに気づくべきだ。

^^コミュニケーションが満了している^^ということに気づくべきだ。

そのことに気づかないでいるから、あなたは、理解と共感と気色ばみと「好き」の文脈が止まらないのだ。

先の感興例のひとつ、

「うーん……まあ、言ってること、わかるっちゃわかるけど。でもおれは正直そこまで思わないな。なんでこんなに切羽詰まったふうに言っているのかがわからない。だからまったく好きにはなれない」

これを取り出してみたとして、この述べられている感興は、あなたにとって「わかる」のだ。

あなたにとって、これは「わかる」一方、よくよく点検してみると、あなたはこれをもって係るコミュニケーションが「満了した」という体験を得ていない。

だからあなたの内に、コーヒーの一杯でも淹れましょうか、というはたらきが起こってこない。

満了していないので、あなたの内部はずっと、

「うーん」

とうなずいているままだ。

理解もし、共感もし、うなずきつづけ、満了はしないのでそのうちに忘れ、忘れたものは消え去り、次に次にと移っていく。

そんなことがもう十数年も続いている。

左折だけで交差点は描けないのだ。

右折があってはじめて交差点が描かれ、その交差点は満了する。

理解せずとも、共感せずとも、気色ばまずとも、好かずとも、コミュニケーションが「満了」している。

ィヨォー！

通じた、通じた。

満了した。

な、バカだろ？

［男の魂をすべて殺した］

十二、教わる

「教わる」という現象、また「教え」という現象は、父から子へのものだ。

父から子へ、教えが示されるとき、やはり聖霊のようなものに事象は包まれていて、「父と子と聖霊なのかねえ」と思わされる。

繰り返し言うが（言ったよね？）、わたしは宗教について話しているのではなく、父について話している。

「教わる」といっても、そのときおれは、「ほーん」と思っているだけで、それにみずからうなずいているだけで、取り立てて神秘的な気分に浸っているわけではない。

父は子に教え、子は父に向かって旅する。

そういうものだから、逆に、「教わらなくていい」とおれは思う。

教わる、なんてわざとらしいことは必要ない。

もともとあるものを、わざわざ教わる必要はない。

父から子へ、教えが与えられるということ、それによって導かれるということは、もともとあるものだから、それ以上にわざとらしく教えるとか教わるとかいうのは必要ない。

「教わる」というのは、じつは本来、他になく清らかで、他になく大切なことなのだと思う。

そのように語るわたし自身、じつはなぜそのように語るのかということについて、根拠がないのだ。

びっくりだと思うが、おれはいままさに、そのように「教わって」いるのだ。

教わるということは、これ以上なく清らかなことで、本当は他になく大切なことなのだと、いま、おれは教わっているのだ。

何に教わっているのかというと、「進行方向」に教わっている。

進行方向に教わって書いていかないと、おれの書き物が進行方向を失ってしまうではないか。

だから、根拠なんかどうでもよくて、おれはただ、進行方向を失わないために、またこの旅をやりきっていくために、教わりつづけ、教わったとおりに書き進めていくしかないのだ。

いま、教わっている。

いつだってそうだ。

極端でもない話、目の前の相手が突撃してチョップしてきたとき、それをどうさばくかということさえ、おれはいちいち教わっている。

教わるほうが速いからだし、教わったものでないと機能しないからだ。

進行方向のないことをおれがやっても、ただジタバタ、力任せに暴れることにしかならない。

ある意味、これはもう卑怯なことかもしれない。

たとえば取っ組み合いになったとき、肘を抜こうか、肩を抜こうか、胸を抜こうか、股関節を抜こうか、膝を抜こうか、そうしたことをすべてその瞬間に「教わって」いる。

どうやって抜けばいいかもそのときに教わっている。

これはひでえ話だ。

お前だけカンニングしているじゃないかと言われたら、そのとおり。

おれはすべてをカンニングしている。

あなたが文章を書く場合、何をどう書こうか、どういう主題で、どういう文脈にしようかと、思案し、プロットを立て、苦労すると思うのだが、じつはおれはプロットというものを立てたことがない。

いつも、進行方向に「いま」教わり、それに従っているだけなのだ。

じつはおれ自身には何もないのかもしれず、じつはおれ自身は何もやっていないのかもしれない。
「かもしれない」というか、事実そうだ。
おれはそのときごと、教わったことばかりをやっている。
教わったことしかやっていない。
ずるいずるい、カンニングだ。
そうはいっても、こうなってしまってはいまや、ほとんどの場合で問い合わせするよりも前に「教え」が来てしまっている。
いちおう、そうなるための稽古を積んできたのではあり、その稽古は具体的に、そんな簡単に真似できないていどのものになっているとは思うのだが。
何も神秘的なことはしていない。
おれは、面白い文章を書こうとしているだけだし、値打ちのあるフィクションをやろうとしているだけだ。
本当に、それだけだ。
そして、そんなものにやり方なんてないので、ひたすら教わって進むことにしている。
そうして教われるものがあるので、逆に言うと、わざとらしく「教わる」みたいなことは必要ない。
もともと「ある」のだから、わざとらしく教わる必要はない。
おれの話から、すでに聞こえるところがあるのなら、それについてもういちいち教わらなくていいでしょうということだ。
聞こえているのにわざわざ耳をふさいで「教えてください」というのは話がおかしいだろう。
たぶん、おれの「教わる」ということ、おれの「教わってきた」ということは、一般のそれとまったく意味が異なるのだと思う。
おれは、子から父への旅をしているだけだし、そのとき父は教えで子は原初なのだから、おれは原初だ、おれは原初と重なっている、だからおれは何も持っていない。
おれが何かを持っていたらそれはもう原初ではない。
おれはあなたよりも何も持っていないのだ。
そのことがもう、あなたにとって絶望的に、わけがわからないと思う。
そんな絶望的なことに気を取られずに、ただ本当に、教わって進めばいいと思う。
わざとらしいやつではなくてね。
おれは原初だから、旅をしているだけで、進んでいるというわけではないのだけれど、そんな細かいところまで初めから知る必要はない。
教わるというのは、大きな形としては、何かしらの「法」を教わるものだ。
作法とか技法とかだ。
おれのこうした書き物も、教わった文章作法から創られているといってまったく誤りでない。
もしわたしが、あなたを目の前において、文章作法とか、芸術の技法とか、手品の技法とか、指揮法とか、呼吸法とか発声法とか、身体操作法とか、そうしたものを一気に展示したら、あなたはおれの持っている技法・技術の体系が、けっこうとんでもないマジのやつだと、びっくりするだろう。
おれはポカーンとしているようで、じっさいポカーンとしているのだが、いざ技法・技術を展開すると、けっこうえげつない、それはマジのレベルのものなのだ。
マジの技術を追求してきた人なんですね、という表現をしたとしても、周囲の人はおおいにその面について頷いてくれるだろう。
おれはそんなにテキトーにやっている奴ではない。
純粋な技術のレクチャーにおいてだけでも、おれはあなたを溺死させ

ることができるだろう。
ただおれが言いたいのはそういう自慢話ではなく、もっと不気味なことなのだ。
おれはそうして、開示してみれば、けっこうな技法・技術の人ということになるのだが、それでいておれは「何も持っていない」と言っているのだ。
おれはあなたより何も持っていない、と。
そのことはよくよく考えると不気味ではないだろうか。
おれは、技法を〝持っている〟のではなく、技法を〝そのときごとに教わっている〟のだ。
わけがわからないが、マジでそうなのだからしょうがない。
おれは文章の書き方を〝持っていない〟のだ。
そのときごと、一行ごと、一語ごとに教わっている。
マジだ。
あらためて冷静に考えると、これはわれながら、とびきりわけのわからないことで、もはやどうしようもないなと思った。
でも、本当の技法とか、本当の稽古というものは、そもそもそういうものなので、しょうがないだろうとも思う。
たとえば、一般にはあまり知られていない「指揮法」、指揮棒のバトンテクニックがあったとして、基本の動作はいくつかあり、だいたい平均法・しゃくい・先入法・叩き・跳ね上げ・分割、などになる。
これらのことを、本当に教わるということ、本当にその稽古をするということは、けっきょく音楽体験の中にそれらが勝手に現れてくるということなのだ。
気づけば叩いており、気づけばしゃくっており、気づけば先入していて、気づけば跳ね上げており、気づけば平均で分割している。
じっさい、右手で棒を振りながら、別の日常会話をしても右手は止まらないし、楽譜をめくろうとしてかがんだとき、自分の右手が自分の顔面をガンッと殴ることがある。
たまたま、跳ね上げ動作をする箇所があり、そのときにページをめくりにいくと、本当に右手が跳ね上がって顔面を殴るのだ。
指揮棒を持っているとき、指揮棒はグラスファイバーのけっこう細いやつなので、角度によっては本当に危ないというときもある。
自分の眼を突きかねないのだ。
（まあそれは持ち方が悪い）
おれはそうした、技法・技術について、ホンマモンは「クセ」ではないのだと、勝手に強調して言っておきたい。
おれはもとが手品師なので、ふつうに五百円玉を手に持つときにも、それはナチュラル・グリップになりがちだが、それは単なる手癖ではない。
さんざんやってきたことなので、手癖でそれをやることもできるが、手癖でそうしたものは、エンターテインメントとしては「視えない」のだ。
だから、そのときごとに、おれは教わり、おれは教わったとおりにコインを持っている。
コインの持ち方なんて、おれは持っていない。
いちいち教わっていたら間に合わないんじゃないかと、そう思う人もあるかもしれないが、じっさいには教わるほうが速い。
本当のことを言うと、すべてのことは、そのとき教わったことでしか間に合わない。
昨日憶えたことを持ち込んできて間に合うわけがない。
何年もクセになったものを持ち込んできて間に合うわけがない。
そのときその瞬間に「いま」教わったもののほうが速いしフレッシュに決まっている。

おれがいま言っていることは、あなたにとって意味不明で、さらには意味不明を超えて、何か絶望的かもしれない。

おれが言っているのは、「教わる」というのは、「正しいこと」を溜め込むことではない、ということだ。

おれは、「正しいこと」を溜め込んでいないし、いまこのときも、「正しいこと」を持っていない。

あなたは、たとえば料理法として、トマトの皮を湯むきする方法を知っているかもしれないが、あなたはそれを「正しいやり方」「正しいこと」として知っているのではないかと思う。

料理の味付けの順番はさしすせそ、というようなことも、それがまるで「正しいこと」なのだとして、それを知っているのではないかと思う。

おれだって、それぐらいの方法や知識は持っているのだが、持っているはずがけっきょくそれを使うことがなく、持っているはずのものはどこかへ置き忘れてしまった。

それでいつも問い合わせている。

そのときその場で「教わる」ようにしている。

なんなんだろう、やっぱりコイツの言っている「教わる」は、一般のそれとあまりに違い過ぎていてヘンだ。

何かブキミなことを言っているぞコイツは。

まあでも、しょうがない。

「稽古」という熟語は、古（いにしえ）とつながりを得る・得ている、という意味だ。

おれは「原初」と言っているのだから、原初は古（いにしえ）だろう。

このあたり、時系列が存在するわけではないので、奇妙なことに、父といえば、父のほうも古い存在だ。そりゃそうだ。

父のあとに子があるのだから、父のほうが古く、父のほうに「さかのぼる」に決まっている。

にもかかわらず、じっさい子は「原初」のほうなのだからしょうがない。

何もかもが一般的なイメージで説明できるというわけでもないのだ。

とにかく、原初だの父だのといって、それと稽（つながり）があるのならば、そのつながりを頼って教わればいいのであって、いちいち自分が「正しいこと」をガメて持ち込む必要はなくなる。

○○駅までの乗り換え、といって、あなたはもう正しい乗り換えをガメて電車に乗るということをせず、都度にスマートフォンで調べて教わるじゃないか。

それと同じだ。

ただおれの場合は、ネットにつながるわけではないし、回線でつながるわけではないので、もっと非合理で、もっと速いということになるけれども。

（※電車の乗り換えはおれもスマホで調べます。当たり前だ）

電車の乗り換えは、どうすれば「正しい」のかが前もって決まっているので、そんなものはスマートフォンで調べればいいし、あるいは誰か詳しい人に訊けばいい。

これから先はもう、そのたぐいはすべて「人工知能に訊けばいい」になるだろう。

おれの言っているのは、そうではなく、どうすれば「正しい」とか、その「正しいこと」が決まっていないことについてなのだ。

おれがあなたに呼吸法を教えたとして、その呼吸法が「正しい」というわけではない。

文部科学省が定めた呼吸法でもあるのならば、その呼吸法が「社会的に正しいとされています」と言いうるが、そんなものはないので、おれはただ何かを教えるとなれば、「それ」を教える、ということしかできない。

でもほとんどの人は、何につけ、すべて「正しいこと」を教えてもらいたいと思っている。
正しいことを教えるというのは、たとえば、
「市民福祉課は、七階でございます」
「そうですか、ありがとう」
というようなことだ。
あるいは、
「水は１００℃で沸騰します」
「本当だ、温度計で測ってみたら１００℃でしたよ」
というようなことだ。
これに比べて、たとえば阿弥陀如来を信じてその名前を五回でも十回でも唱えたら、極楽浄土に往生できるということは、「正しいこと」なのかどうか誰にもわからない。
確かめようがないのだ。
ナムアミダブツという、念仏の代名詞とも言える親鸞でさえ、
「念仏したところで、お浄土に往けるのかどうか、わしゃ知らん」
と言った。
当人いわく、
「ただ、念仏申さんのこころが湧いてきてしゃーないので、こうしている」
ということだったそうだ。
念仏すればお浄土へ往けると、ブッダは教えたが、「正しいこと」を教えたというわけではない。
ただ、そう教えたというだけだ。
そしてそれが、お経・仏典に伝承されているというだけだ。
おれは言いたい、
「教えがあるのなら正しいことなんて要らないのじゃないですか？」
「正しいこと」を教わりたい人は、なにひとつ、教わるということはできない。
市民福祉課のフロアを教わることはできるが、「教え」を授かることはできない。
キリスト教では、「天にましますわれらの父よ」と言って祈りはじめるのが正しいとされているそうだが、それは教会と聖書がそう言っているというだけで、正しいのかどうかは確かめようがない。
わたしはそっち方面の関係者ではないので、門外漢としてすべてを「知らん」としか言えないが、そもそもそんなことに「正しいかどうか」がなぜ必要なのか、おれは感覚的にわからない。
おれは何も持っておらず、いつも、いま教わったことしかやらない。
教えがあるのに、なぜ「正しいこと」が必要なのか、さっぱりわからない。
そして……ああ、そうか。
おれは「正しいことは教わらない」のだ。
ナムアミダブツが正しいとか、天にましますわれらの父よが正しいとかいうのならば、おれはその正しいことについては教わらないのだ。
教わる、なんてわざとらしいことは、おれには要らない。
もともとあるものについては、そのときごと、直接教えてくれる声があるので、わざわざ教わるなんてことをしなくていいのだ。
市民福祉課が七階というのは教えてもらえないと困るけどね。
それは「もともとある」ものではないから。
おれが認めるところの、正しい型・正しい稽古というのは、その型を通して、
「聞こえるようになりなさい」
という稽古だ。
型や稽古じたいは本質的に「教え」ではないのだ。

肩や稽古じたいは、メソッドであって、教え導くものが聞こえるようになるためのメソッドだ。

なるほど、「教え」というのが二重に存在しているので、このことは混乱をきたすわけか。

心身が暴れて騒いでいると、その雑音で、教え導くものなんて聞こえてこない。

価値観や目的がビーというサイレンを鳴らしていたら、やはり教え導くものなんて聞こえてこない。

そうした騒動やノイズを取り払い、聞こえてくるようにならないと「これ」ができないでしょという、型を示す。そしてその型の実現に取り組んでいく。その取り組みのうちに騒動やノイズがわずかずつ除去されていくのだという、そういうアプローチ法のことを、一般に稽古としているのだ。

もう一般にはそうしたものはほとんど残されていないだろうが、かつて、厳密には稽古とはそういうものだったはず。

型と稽古は、「教えへのメソッドを授けている」のだ。

そしてそのメソッドのことを日本語で「法」と呼ぶわけだ。

ここにある混乱を、慎重に解きほぐさなくてはならない。

目的完結性メソッドというものがある。わたしがいま勝手に造語したのだが、たぶんこれまでに言及されたことがないことなので、わたしが勝手に造語せざるをえない。

目的を果たすことに完結しているメソッドというものがあるのだ。それはたとえば、熱中症にかかった人の体をどう冷やすかとか（冷却法）、試験に必要な単語や年号をどう覚えるかとか（記憶法）、百キロのバーベルを持ち上げるのにどう筋力アップすればいいかとか（筋力増強法）だ。

価値観・目的のさなかにあり、そのことに首ったけの人にとっては、これらの目的完結性メソッドを教えてもらうことに価値があり、それ以上の価値など存在しないということになる。

けれどもわたしが言っている「法」、あるいはわたしが言っている「教わる」というのは、事象平原が違うのだ。

たとえば数学に二次関数があったとして、二次方程式の「解法」はあるていど決まっている。その解法は、二次方程式を解くという目的に対しては完結しているが、わたしにはそうしたものが本来、「数学の声」を聞き取るためのメソッドなのではないかと思えているのだ。

そして数学の声が聞こえるようになった者は、もう数学者なのだから、いちいちわざとらしい「正しい解法」などを持っていなくてもよくなる。いちいちそんなものを持ち込まなくても、彼はそのときごとに、数学の声に問い合わせればいいのだから、彼は数学の声から常に「いま」、その二次方程式を解く手続きを教えてもらえる。

そしておそらく、数学者にとっては、そうして数学の声からそのときごとに教わるほうが「速い」のだ。

「正しいことを教えてください」

「正しいことを知りたいんです」

そう望んでいる人は、おそらく、いや構造的に明らかなこととして、目的完結性のメソッドを教わりたがっているのだ。もし、その人の目的に向けて、完全無欠の目的完結性のメソッドがあるならば、そのメソッドはその人にとってこれ以上なく「正しいこと」「正しいもの」になる。

もちろんそうしたものも、のっぴきならず必要な場合があり、そのことを馬鹿にするつもりはない。たとえば営業成績が伸びずに本当に追い詰められた憂き目にある人は、営業成績を上げるという目的に適合した目的完結性のメソッドが欲しいに違いない。あるいは、膝が痛くて生活上たいへん困っているという人にとって、膝が痛くならない歩き方・身体操作法というものがもしあるならば、それは目的完結性メソッドとしてこの上なくありがたいものになるだろう。

そうして、価値観と目的が前提にあり、目的完結性ということに限っては、「正しいことを教わる」ということはありうると言える。
ただ、わたしの言う「教わる」はそちらのジャンルのことを指していない。
何度も言うように、旅には目的はないのだ。目的があったらただの用事になる。
一見、目的があったように見えても、それでは説明のつかないものに包まれていく、そうした現象が旅だ。
何の目的でそうするのでもなく、そうして旅したということじたいに無上の値打ちが現れてしまう、その現象が旅だ。
営業成績が上がらないとか、膝が痛くて困るとかは、シリアスなことで軽視はできないが、それにしても生きているうちの沙汰であって、永遠の沙汰ではないのはたしかだ。
わたしが言っている「教わる」のほうは、自己永遠性のものであって、その「教わる」というやつが現れてくるために、稽古・メソッドを積もうということだ。
だから、それじたいは「もともとある」ものなので、それじたいは誰からも教わらなくていい。
わたしの書き話しには、価値観や目的がない。
いちおう読みやすさのために、価値観や目的のタテマエみたいなものはぼんやり設定しているけれど、その価値観や目的のために書くということは一切していない。
わたしは自分の書き話しがそれじたい永遠性の旅になるかどうかということを続けているのみだ。
わたしはそうでなくては、書き物として面白くないと思っているし、そうでなくては、そんなヒマなことおれがやる気になる理由がないと思っている。

わたしがわたしのこととしてやっていることのすべては、目的完結性のメソッドでは得られないものばかりだ。
わたしのやっていることを、どのような価値観で、どのように評価してもらってもかまわないが、その価値観の視点から、わたしのやっていることへ直接アプローチすることは原理的にできない、ということになる。
つまり、わたしからそれを教わることはできないということ。
おれは何も、神秘的なことをしているのではないし、アヤシイことや、いかがわしいこと、うさんくさいことをしているのでもない。
おれのやっていることは、ずっと前からただひとつ、
「おれの書いたものは面白いでしょ」
ということだけだ。
おれが言っているのはつまり、どんなに「正しいこと」を溜め込んでも、そんなことで旅にはならないので、おれのような面白いものは書けないし、面白い作品は創れないぜ、ということなのだ。
正しいメソッドがあるならそれはいくらでも教われ。
ただし、人から教われるのはそこまでだ。
人から教わる必要があるのはそこまで、とも言える。
正しいメソッド・稽古、それを積み重ねていくと、その中からもう聞こえてくるものがあるでしょうということ。
それはあなたの父なので、そんなもん、あなたがヨソの誰かに教えてもらう必要はなく、あなたがあなたの父から直接教わればいい。
ところがこの手続きを取った場合、現代人は、何か半狂乱になってしまう。
発狂するか、その発狂を封じ込めるために、異様な精神的加圧を起こす、ということになってくる。
何の騒ぎだ、これは。

その段になって、きゅうに、父の声が聞こえてこないということが厭（いや）なようなのだ。
そんな、ろくすっぽ、稽古も重ねているわけではないのに、何をいきなり発狂することがあるのだと、奇妙に思えるのだが、なぜか知らないが現実的にはそうだ。
正しいメソッドを積む、その現場に立たされると、現代人は発狂してしまう。
父の声が聞こえないのか、それとも別の何かの声でも聞こえるのだろうか、それは正直なところわからない。
（意地悪で言っているのではない、本当にわからんのだ）
ひとつには、ZAP もあるのだと思う。
人それぞれ、「正しいこと」を溜め込んできているので、レベル６０ぐらいになっているかもしれないが、メソッド・稽古の現場に立たされると、ぜんぜんそんなレベルではなく、何も聞こえてこないので、ZAP が起こる。
そのことはとうぜんあるようだが、ひょっとすると、それ以外のこともあるのかもしれない。
おれは当事者ではないので本当にわからない。
父じたいが怖いのか、父の声がないのが怖いのか、それとも別の何かの声が怖いのか、おれにはわからない。
が、それにしても、このことを、
「正しいことを教えてください」
という粗雑な願望で解決することなどできようもない。
父の声が聞こえないということは、進行方向がないということなので、五里霧中というか、もっと重くて暗い「閉塞」の中にいることになる。
仏教方面では「無明」なんて言い方をするのだろうか？
ヒントは「教わる」ということにある。
教わるということは、正しいことを教わるということではない。
ただ教わるということだ。
ただ教われればいいのだが、たいていわれわれは、それをわれわれの価値観と目的に照らし合わせ、
「正しいか？」
というようなことを考える。
それで、正しいと思えて、採用したとして、そんなことは何も「教わった」ことにはなっていない。
アンタが納得しただけだ。
アンタが、
「よろしいです、まあ、わかりました」
と、荘重にのたまっているだけだ。
なにひとつ教わってなんかいない。
あなたの暗闇を少しでも取り払うためにわざわざこんな言い方をしている。
価値観と目的から、何が正しいと言われても、あるいは何を善悪と言われても、おれの旅は、正しいとか善悪とかで成り立っていない。
しょうがないのだ、おれは本当に「いま」、このときでさえ、進行方向そのものに教わって進むしかないのだ。
あなたの眼が、曇りに曇っている、としよう。
それでも、どんな曇天でも、それが昼間なら、もう暗闇ではなく、あなたは曇天の下で明るいはずだ。
雲の上に何があるのかなんて、あなたの眼には見えないのかもしれないが、それでもいいじゃないか。
もう二度とあの暗闇はこないのだから。
その雲の向こうに何がいるのかなんて、あなたは教わらなくていい。
別に教わりたいとも思わないだろうし、教わらなきゃとも思わないだ

ろう。
ここに、「正しいこと」なんて何一つない。
「正しいことを教えてほしいです」
「正しいものを与えてほしいです」
そんなことは、「毒ジュースを飲ませてほしいです」と言っているのと同じだということに気づかないか。
太陽が出たら、たとえ曇天でも明るいのであって、そんなことに正しいもヘッタクレもない。
ただの太陽だ。
あなたの信奉する「正しいこと」は、精神がぎらつく毒ジュースであって、太陽ではないだろう。
そうではなく、もともとあるものに教われば、それが太陽だ。
そこに閉塞や無明なんてありようがない。
それでもじっさい、閉塞や無明があるのだとしたら、あなたはひょっとしたら、「正しいこと」を教わってきてしまったのかもしれない。
「正しいこと」がもともとあると思っているのだろうか。
「正しいこと」、それはあとから人が作ったもので、もともとはないものだ。
あなたはいつのまにか、「正しいこと協会」の理事を、自分の父にしているのかもしれない。
残念ながら、「正しいこと協会」に法はない。
「正しいこと協会」にあるのは法ではなく司法権力だ。
権力は、他人にだけ無理な法を押しつけ、自分たちは都合でいくらでも法を破っている。
そんなことはどこの歴史を見てもあきらかだろう。
あなたは、「正しいこと協会」という名を聞いただけで、ゾッとして、それが深い闇に満ちているだろうということを直観するのに、なぜ自分自身としては「正しいこと」を教わろうとするのか。
「正しいこと協会」が、あなたの価値観を肯定し、あなたの目的に向けて、その権力がサポートをしてくれるのだと、吹き込まれたのかな。
そんなサポートは、真っ赤なウソならぬ、真っ黒けのウソだけどね。
そして、わかった。
「教わる」ということ、教わらなきゃ何一つまともにはいかないということ。
それでいて、教わる必要なんかないということ。
「教わる」という二重性について、どう言えばいいか、ようやくわかった。
こう言えばいいのだ。
「教わるより、教わったほうが速い」
教わるということより、はるかにずっと速い「教わる」ということがある。
そうして教わったなら、もうチンタラ教わる必要はなくなる。
だからもう教わらなくていい。
教わったのだからもう教わらなくていい。
教わるということは、きっちり、光の速さ、日の光の速さで通り抜けていく。
だからもう、「教わる」しか方法がないのだ。
それ以外の方法はもうどれも間に合わない。
あなたがどう思うか、なんて感想は要らない。
そうじゃなく、あなたの父はどう言っているかということ。
それしかこの話には間に合わないだろう。

［教わる］

十三、覗き見、推し活、マウント活

現代の女子高生は、化粧が上手で tik-tok に素足を晒して踊り、インプレ（閲覧数）を増やしているという印象だが、よくよく考えると、わたしは通りすがりにすれ違う女子高生の名前を誰ひとり知らないし、何週間先にも彼女らと食事に行くような予定はない。にもかかわらずまるでわたしは彼女らのことを「知っている」かのように錯覚している。これはなぜなのかというと、電脳通信端末で彼女らのありようを「覗き見」しているからだ。わたしが彼女らを「覗き見」し、彼女らはわたしの何かしらのタイムラインに割り込んでくる、そういう構図がいま成り立っていよう。

しかし、よくよく考えると、そうした「覗き見」が、われわれにとって個々の「旅」であるはずはない。お笑い芸人の誰それが地方のイベントに出てどうであったとか、プライヴェートではこういう趣味を楽しんでいますとか、そうしたことをわれわれは覗き見ることができるようになったのだが、そうして覗き見することはわれわれの娯楽を豊かにはしても旅を豊かにはしない。

わたしはこのように文学者であって、文学者としての成り立ちは……もともとはわたしはロック・メタルのような精神の荒っぽくつんざこうとする超克性を本としてきた者なのに、それとまるで矛盾して大江健三郎の固執低音が分厚く森に入り込むような文学に引き込まれた結果として現在このようになっている。そのような場合、わたしは大江健三郎の文学を「覗き見」したとは言われないだろう。本意か不本意かわからぬまま、わたしはいつのまにか大江の文学世界を旅したのだ。その道中、まるでわたしはずっと首をかしげ、随所にヤレヤレという笑いも含ませてきたのだけれど、わたしはその旅の果てとしていまここにいるのであり、あるいはいまもその旅の最中としてぶらりとここにいるわけだ。

わたしはその旅について――といって、わたしの踏破する旅は何もそれだけではないけれど――仮に人に訊かれたとき、

「それの何が面白いの？」

「……さあ」

わたしは恬淡とした無気力な答えを返すだろう。つまりわたしは、他ならずそれを大きな自分の旅のひとつとしておきながら、その旅程をまるで「推す」わけではないのだ。わたしは、頭上に大江文学をかかげて、それがノーベル文学賞だの何だのと、まるで自分のものではない権威を振りかざすようなことをするつもりがない。わたしの旅はわたし自身にのみ知られるのであって、わたしの旅はまるで他人と競り合うことなどには用いられようもないのだ。

さまざまなＳＮＳや動画サイトから、アカウントのある女子高生や、アイドル・グループのさまざまなありようを「覗き見」できるとする。それぞれ、見目麗しかったり、性的に惹きこまれる魅力があったり、何かの技芸に秀でていたり、あるいはとにかく溌剌としていたりするかもしれない。溌剌としているのは表面上だけだということはいかにもありそうだとしても、それでも表面上溌剌としているということにはいちおうの表現力が伴うだろう。そしてそのことは、いまや「Ｖ」でも用途としては足りるという合理的な見方も出てきているぐらいなのだ。

そうしたものを愛好するというのは、どう見てもただの「趣味」だろというふうに言われ、またそのように分類される。けれどもこのところ

はその趣味を、みずからで「活」と言い出す向きがあるのだ。別に「活を入れる」わけではなくて……それじたいがひとつの「活動」なのだと、独特の調子を伴って言われるということ。それがすでにわれわれにとって慣れ親しんだ風習になっている。

つまり、アイドル少女的なパフォーマンスを、映像から視覚的・聴覚的に愛玩するという趣味をしているのではなく、彼女（ら）を「推す」という、参入的活動をしているのだと彼らは言う。このこと発端はきっと、過去ＡＫＢから始まった「総選挙」の手法からだろう。握手券の売り上げ順に、いわばＮｏ．１が決まるのだが、Ｎｏ．１というといささか何かに露骨さを覚えるので、それは「センター」と呼ばれる。そういうシステムが一般化した。そのシステムがブームとなったピークはちょうど、「東日本大震災の前」のころだったろうか。

言ってしまえばこのころから、小規模になればなるほど地下アイドルには個々のパトロンが必要なのであり、そのことはむかしからある芸能界の秘密裏の野暮だったろうものを、半ば公然のことにさせて人々に受容させていったということでもあるだろう。いまでもそうかは知らないが、六本木などに行くとやはり、ブレイク前の女優・モデル・アイドルを支援しようとする「クラブ」のような存在はあり、それは現代の用語にあてこすって言うならば、谷底はきっとなるべく守秘されたパパ活という様相だろうと推定せざるを得ないところなのだ。

わたしはそうしたものが汚らわしいと非難しているわけではない。じっさい、財界人や政治家などが、忙しい中での余興あるいは酔狂として、そうした若い女性をバックアップしていることが大いにあるようだけれど、そうしたことの中で、それがひたすら汚らわしいか、それとも何かの仁義が含まれてあるのかは、それぞれ個々によって違うのであって、粗雑に一概としてどうこうとは言えないとわたしは思う。ただこうした経済システムから無縁でありえないかぎりは、芸能界が健全さを言い張るのは不誠実だとわたしは思っている。不健全さを露悪までしろとは思わないが、依然「お察しください」の部分は残っているのではないか？夢とあこがれと、お祭りさわぎと「お察しください」がやはりあり続けるのではないか。

^^「覗き見」はわれわれの「活動」だろうか？^^少なくともわたしは、覗き見はわれわれの「旅」ではないと思うのだ。仮に誰かがさまざまな方面に計百件の「推し」を持っていたとして、この人はまるで東奔西走、日々「忙しいわあ」という思いにさせられるかもしれない。なにしろ、仮にコメント一件を打ち込むのに5分を要するとすれば、百件にそれを行うのに５００分、八時間以上もかかるのだ。その忙しさには酩酊さえし、いわゆる「テンションがあがる」ということもあるだろう。それで、計百件に及ぶ「推し」を、せめて活動ということに分類してもよいかもしれないけれど、その目まぐるしさはやはり「旅」ではないとわたしは断じたい。旅ではない「覗き見」と、言ってみれば、その覗き窓口から手出し・口出しが加わったもの。それが現代では推し活という「趣味」に分類されているのだが、こうしたことを趣味と言い張るうち、われわれ個々の内部で、それぞれの「自信」は不明の変動を起こさないだろうか。

そもそも趣味と活動を混同することはそれじたいに無理がある。コーヒーが趣味の人は、毎朝コーヒーを淹れているからといって、それでコーヒー活動をしているというわけではない。そこで、むろん現代では、コーヒーが趣味だというところ、コーヒーのさまざまな品種やノウハウやテクニックを「布教活動する！」といって冗談と講釈を織り交ぜて撮影し、それを小気味よく編集したものを動画サイトなどに放り上げ、みずからの存在を打ち出していくということが可能だ。そのことまで組み込めばそれは「コーヒー活動」と言えるのかもしれないが、そのように考えたところでわたしとしては、

「その無尽の自信はどこから湧いてきているのだ？」

ということが訝（いぶか）しく思えるのだった。
わたしは決して、そうした「布教活動」をするのに、当人がコーヒー業界における権威や立場を得ていなければならないと考えている者ではない。ただ、もっと単純な話、仮にわたしがコーヒーを趣味にしていたとして、コーヒーにかかわっての知識や技術にただならず精通していたとしても、だからといってそのことの「布教活動」にみずからを打ち出していくというような膨大な自信は持てないと予感するのだ。
もしわたしがそのような膨大な自信を持つことがあるとしたら。あくまで仮にだが、わたしがコーヒー抽出の精髄というようなものに到達し、ふと気づけば次から次に、わたしのところに直接その知識と技術を教わろうと来訪してくる人が絶えないという状況があったとき、そのときわたしはさすがに、
「毎回同じ説明をさせられるのもたまらん」
「わざわざ遠方から御足労させているのも気が引ける」
「誰でも手軽に閲覧できる知識と技術の開示があればそれでいいじゃないか」
という思いから、そのような撮影をして動画サイトにコンテンツをアップロードするかもしれない。
だが、コーヒー抽出の伎倆が高い人は世の中にたくさんいるのだろうが、かといってそのように訪問者が絶えないというほどの人はそうあまたいるわけではないはずだ。
いかなる「自信」の湧出があって、現代のそうした〝○活〟の様相が生じているのかわたしには長らくわからなかった。
ところが最近になって、わたしは「覗き見」という語を導入することで、このことについてすっきりとした整合と納得を見い出すようにもなってきた。
わたしと異なり、たとえばコーヒー活動というようなことにみずからを打ち出してゆける無尽の自信を湧かせている人は、あくまで「覗き見」に対する自信を得ているのだ。コーヒーに対する知識、技術、趣味嗜好、コーヒーを淹れているところを「覗き見」される。そのことに対して自信がある。
現代においてわれわれは、百件のどこかを「覗き見」し、百件について「推す」という気持ちを起こし、その数多い「推し」感情から到るテンヤワンヤの心境じたいをみずからの「活動」とし、そうした活動から^^覗き見ベースの「自信」>>を得ているのだ。覗き見ベースの自信を「チャージ」している……この覗き見ベースの自信は、むろん旅に及ぶ自信ではないだろうけれど、次に自分が覗き見「される」側の立場になろうとしたときには、おおいに使用できる自信となる。
これは考えてみれば、あまりにも必然のこと、あるいは必然というよりもさらに自然なことなのかもしれない。^^覗き見ることが活動なら、また、覗き見られることも活動となろう>>。これについてわたし自身が、そのようなことへの無尽の自信はとても得られそうな気がしないと先ほど述べたのは、わたし自身が覗き見るということを活動とは捉えていないぶん、わたしには自分が覗き見られること用の自信をチャージするという発想じたいがなかったということを示している。
わたしは、もし、わたしがコーヒーを淹れているというどうでもいいようなところを、好んで窃視したがる者がいたとしたら、わたしは笑ってその者に、
「どうした、お前は、気が狂ったのか」
とでも言うのみだろう。
ここで視点を正当に振り向ければ、「その無尽の自信はどこから湧いてくるのか」という言いようについて、そのことは他ならぬお前にこそ当てはまるのじゃないか、と詰め寄られそうだ。お前はいつも文中で「偉大なるおれさま」というようなことをほざいているではないか？　たし

かにそのとおり。それはまるで無気力に無尽の自信を言い張っているセリフだろう。それについて考えようとすると……わたしはわたし自身が、根っから「旅」をもってみずからの、活動といえば活動とし、自信といえば自信としているのだということに気づかされるのだった。

わたしがこうして書き話しを続けていることは、現代の一般においてはたとえば〝文活〟というふうに言われるのだろうか。それはそれで滑稽でユーモラスな感じがして、わたしとしては好意的な笑いを誘われるが、よもやそのようなこころもちで書き話しの実作を進めていくことができるわけではなく、そこには現象の厳粛さが立ちはだかる。

わたしは書き手として、あるいはここでコーヒー活動家になってもかまわないのが、ともかくもわたしを仕手の者として、客体を見慣れない「旅」に引き込んでいけるのかどうかということばかりを主題にしているのだ。客として覗き見をする側が、語義としてインターテイナーと言いうるとしても、それにあてがい、わたしはあくまで仕手側の――場違いでも――エンターテイナーでありたいと望んでいる。

わたしは覗き見することにも覗き見されることにも関心がなく、ひたすら、

「やべえ、気づいたらとんでもないところまで連れていかれた」

と体験される、そういう「旅」の仕手たりうるかをみずからに問い続けているのだ。

だから、そうした「旅」に引きこもうとするものであれば、わたしは表面上コーヒー活動家としての何かを打ち出してもかまわない。覗き見されるにとどまるを本意とせず、客体がいつのまにか「とんでもないところまで連れていかれる」ということを本意にする。

現代における「覗き見」について。

われわれはたしかにいま、この日々に、その「覗き見」を無数にしている。

覗き見が「推し活」をもたらし、推し活はそれぞれに膨大な自信を湧出させていく。ただしそれはあくまで「覗き見される」という形態にのみ適合する自信だ。覗き見はどこまでも「旅」ではない。

「推し活」と呼ばれる趣味は、じっさい趣味ではなくある種の活動であって、その本意はむしろ「自信を補充する」ということにあるのだと思う。四方八方、めまぐるしく「推し」の活動をする。つぎはあれを覗き見て、そのつぎはあれを覗き見なきゃ。あと、忘れていた、あれも覗き見しないといけない。推しです、という、口出しのコメントもしなきゃ。

ややっ、また何か、あたらしく覗き見するべきものがニューストピックにあがっているぞ。

こうした、「活動で忙しい」日々は、当人に膨大な自信をもたらすだろう。そして、そうして自信が補充されていくことについて、人々はしばしば、

「元気をもらいました！」

ともコメントしているのだと思われる。

現実的に、推せるものがないと、活動が弱体化してしまい、現代人は自信を失う。だから、子猫の動画であれ何であれ、強く〝推せる〟ものがあれば、それによる自信の補充がまさにメキメキと音を立てて起こり、そのことは「元気をもらった！」というふうに体感されるのだろう。

であればわれわれは、このことの〝逆〟もしているのではなかろうか。推し活で元気をもらうということをしている以上、その逆、言うなれば「マウント活」で元気を増幅するということもやっているのではなかろうか。

まず「覗き見」をする。その窃視先にあるものが、推せるものなら推し活をする。

窃視先にあるものが、まるで推せないもの、むしろ逆にしか思えないものだったならば、われわれは逆の活動をする。

「こういうふうにだけはなりたくないわw」
「こういうのって、本人はどういう気持ちなんだろ、あわれすぎて草生えるわ」
「もう誰にも必要とされていないのがわからんのか、さっさと消えろよ、目障りなんだよ」
これは、行為としてはただの罵詈雑言や中傷、いわゆる「ディスっている」ということになるだろうが、人がそんな無目的なことをそのままするということは価値観の性質としてありえないので、これはただの行為ではない。当人にとってはやはり有為な「活動」なのだ。われわれは推し活の反対で「マウント活」もしている。そのことが推し活ほど一般的に言われないのは、やはりマウント活というのが表面的にも前向きなものではありえず暗闇を思わせるからだ。
本書の第一章に「見下す人々」を書いた。
推し活が趣味に合わない人は、あくまで心理的な草陰においてであったとしても、この「マウント活」をしている。
子猫の動画を観て「元気をもらいました〜！」と感じられない人は、いま、見下す人々となり、マウント活から自信を補充している。
推し活側の人が、子猫動画を観ると「たまらない」とじっさい鼻息が止まらなくなるように、マウント活側の人は、見下しうる何かを見つめると「たまらない」と鼻息が止まらなくなるのだ。
きょうは、推しを、じゅうぶんに推すことができた、自信が補充できた、「ふう、これできょうはぐっすり眠れる」という人がいる一方、見下げる対象に、きょうはじゅうぶんなマウントを取ることができた、自信が補充できた、「ふう、これできょうはぐっすり眠れる」という人もいる。
このように、現代のわれわれは、「覗き見」をみずからの文化関心の中心核として、推し活とマウント活をしている。その活動から、こんどは自分が覗き見られることについての自信を得ており、これによって覗き見る・覗き見られるということは相互に循環運動を為している。
この中でわたしが、唐突に「旅」というようなことを言い出すと、そのときその空間には異様な気配が満ちてしまう。わたしが「旅」と言っているのは文化のことでもなければ関心のことでもない。関心ではなくおのおのの体の中枢、しかもそれは原初が永遠に向かうということに重なって体験されるもので、旅の主体はもはや自分というものでさえないというのだ。わたしはその旅に及んだ者のみが、いちおうの、たしかな自信、変動することのない原初と永遠の自信を授かるのだと述べている。
わたしだって、気まぐれあるいは素直な思いで、何かを推したり、何かにマウントを取ったりしてもいいのかもしれない。だがわたしは、実物としては笑えるほどに、「覗き見」をしているとき、その「覗き見」ということの文化関心・中心核を持てないでいる。いわば「モグリ」でそれをしており、その様にはいかにも無理があるのだ。
たとえば大人気セレブのモーニング・ルーティンの動画を観ていたとすると、そのときのわたしはなんとも言えない形で口を半開きにし、
「……あ、ん、うっ、え、そ、ん……」
と、どのように受け取ればいいのかわからないという様態で困惑している。
そして、冗談でもなく、
「元気をもらいました！」
とコメントがついているらしいのを見て、わたしは本当に異邦人の思いをさせられ、そうした界隈に覗き見を向けることはなくなっていくのだった。
もちろん逆の、マウント活の風情についても同様だ。何にヒートアップしているのか、その罵りの嵐にわたしは了解不能の困惑ばかりをする。そちらはもう汚らしいのでここでいちいちの描写はしないが、あれも自信のチャージなのだろう（あくまで覗き見ベースの）。

現代は覗き見を文化関心の中心核とし、それぞれ、表沙汰には推し活をし、暗黙裡にはマウント活をしている。そして覗き見ベースのものであれ、われわれが力強く生きていくのに必要な「自信」をそこからチャージするのだが、わたしはそうしたことじたいについていまさら批判の意図は持たないにしても、ただそれは原理的に旅ではないということ、そしてそこでチャージされてきた膨大な自信は、やはり旅に及ぶ自信ではなく、覗き見では済ませられない局面に立たされたときには破綻するではないかということを、無力であれ言い続けていきたく思う。

［覗き見、推し活、マウント活］

十四、バカにするこたぁない、ただ、やさしさ一件は忘れないでいこう

キリがないので今回はこのへんにしておこうと思う。
何も、誰も、バカにするこたぁないのだ。
バカにされる筋合いもない。
それぞれの旅だ。
どういう旅かなんて、当人にしかわからない。
ブ男の旅もあるだろうし、イケメンの旅もあるだろう。
どっちが優れた旅だなんて比べられない。
むかしの人は、新婚旅行といって、二泊三日で和歌山の南紀白浜に行ったそうだ。
現代なら高校生でも、週末にロードバイクで行きそうな場所だが、当時はそこが遥かな楽園で、見果てぬハネムーンのイメージだったらしい。
それよりむかしの人は、なんと、新婚旅行が「映画三本立てを観に行く」だったそうだ。
信じられないだろう。
質素すぎる。
戦争時には、一度は太平洋をはみ出すぐらいにまで進出していたくせ

に、個人となると、きゅうに文化範囲が質素だ。
映画館の、椅子がベニヤで硬いので、それぞれ自分で座布団を持っていくのだそうだ。
それで、「ローマの休日」とかを観たのかな。自分で作ったおにぎり弁当でも食べながら。
それが新婚旅行だったという。
現代の、「十泊十一日でカリブ海に行きます、当地でも Netflix とか観るかも」というのとはえらい違いだ。
えらい違いだが、それでも、「旅」としてどちらの旅が豊かだったのかは、誰にもわからない。
そもそも、旅が豊かだったどうかは、他人と比べて決定するものじゃない。
本人が、「豊かな旅だった」と抱きしめるばかりならば、それは豊かな旅だったのだ。
おれだって若いころ、お金がなくて、夜行列車で移動したことがあるけれど、安いワインなんか持ち込んで、しだいに道中で乗り込んでくる人たちの方言が変わっていって、そんなことで友人らの気持ちは昂って、単純で、そりゃあ豊かなものだった。
ドルガバのスーツを着て宇宙旅行をすれば豊かというわけでもないだろう。
世の中には、あるいは身の回りにも、「何考えているんだこいつは」という、どうしようもない奴がいるかもしれない。
どうにも好かれようのない奴、面倒な奴、汚らしい奴、いろいろいるだろう。
それと付き合わされると、とてもしんどいものだ。
そうしたものは、基本的にどうしようもないものだが、どうしようもない一方、だからといって、そいつの旅までバカにするこたぁない。
わけのわからん奴は、わけがわからないので、いつも神経を疑いたくなるのだが、それでも当人は当人にしかわからない旅をしているだろう。
当人にその自覚はなくてもだ。
当人にしかわからない旅をさせられている。
それがどんなものなのかは、ついぞ、他人からは本当にはわからないのだ。
きっと果てしなく豊かだっただろう、と察せられる人もあれば、「旅も何も、もうただのぐちゃぐちゃの、イライラの大騒ぎ、ひたすらめちゃくちゃだったっていうだけなんじゃないですかね」と思わされる人もいる。
でも、けっきょく、わからない。
さらに、死出の旅までそうなのかはわからない。
わからないので、バカにするこたぁない。
仮に地獄行だったとしても、地獄行の旅を「バカにする」というものでもないからな。
言ってみれば、野良犬一頭、バッタ一匹、魚一尾、どんな旅をしているのか、当人以外にはわからないのだ。
草むらからガードレールの向こうに飛んでいったバッタは、どんな旅の道中にいるものやら、知る由もないが、とにかくバカにする気にはなれない。
なるべく、近所迷惑はしないほうがいいし、トラブルもなるべくノー・トラブルをモットーにしたいところだ。
なるべくな。
誰の旅についてもおれはバカにする気にはなれない。
おれがバカにしている奴についてでさえ、そのバカのする「旅」については、バカにする気になれないということ。
人それぞれじたいはどうであれ、旅をバカにするこたぁない。

あなた自身もそうだ。
あなたがあなたの旅をバカにするのはやめてくれ。
あなたじたいがバカなのは知っている。
あなたがどれぐらいバカなのかについては、残念ながら、あなたよりおれのほうがよくわかっている。
あなたはバカなので、あなたは自分がどれぐらいのバカなのかを測定できない。
あなたは、バカ測定器の目盛りの読み方がわからないというようなバカだ。
いつもそれで、「うわあああ〜」と「……」を往復している。
量り知れないバカだ。
それぐらいのバカなのだが、それでも、あなたがあなたの旅をバカにするのはやめてくれ。
おれは偉大なる大天才で、あなたはハブクラゲと禅問答をしても言い負かされるようなバカだが、だからといって、あなたの旅がおれの旅より貧しいということにはならない。
あなたはあなたの旅をバカにしてはならない。
あなたはバカだから、こうしたことに自分で気づけない。
自分で気づけないからこそ、あなたは教わらなくてはならないのだ。
それであなたは、教わって、
「はい、自分の旅をバカにしないよう、気をつけます」
というふうなことを言うだろう。
そうしたら、おれはため息をついて、あなたをふたたびハブクラゲの水槽に蹴り落とさねばならない。
自分の旅をバカにするな、というのは、おれの「教え」だ。
あなたの思いやこころがけではなくて、おれの「教え」だ。
正しくなくてもこれを放すな。

教えじたいが父であって、それは進行方向であって、それに向かうことじたいが旅なのだと、さんざん説明してきたはずだ。
それがわかっているのか・いないのかといって、それをあなたがわかっていないということは、他でもないおれのほうがわかっている。
あなたは自分がわかっているのかわかっていないのかさえわからないのだ。
自分の旅をバカにするな。
人をバカにするのはいいが、人の旅までバカにするな。
それがおれの教えだ。
旅というのは、そもそも人のものではなくて、世界の原理、原初—永遠の原理だから、われわれの沙汰でそれをバカにするというのは筋違いの見当違いなのだ。
バカが雨に降られたからといって、ゲラゲラ笑って、それで雨までバカにするというのは筋違いの見当違いだろう。
どんなバカも、だいたい今から百年後ぐらいにはほぼ全員が旅立っている。
じゃあ、いまこの時点でも、すでに全員が旅の中なのだ。
百年後にはどうせあなたも「そうですね」と言うのだから、ここであなたがどう反論しても意味のないことだ。
今回、「社会人と血迷うクリエイター必携書」という、へんちくりんなタイトルでこのエッセイを書いた。
タイトルと内容があまり噛み合っていないように見えるかもしれないが、そうでもない。
社会人の主題は、仕事ではなくて権力だよということ、ただそれだけのことでも、一部の人にとっては巨大な衝撃だろう。
社会人とか言っていないで、まともに仕事をして、それをみずからの旅としたほうがずっといいと思うけれどね。

クリエイターに向けての部分は、どうなのかといって、クリエイターに向けてはこのとおり、旅たりうる実作を示しているのだから、これ以上の説得力はない。

クリエイターなんて漠然としたことを言って、じっさいどんな人がクリエイターなのか、もはやイメージとしてしかおれは知らないのだが、いまやクリエイターというのはただの社会人のひとりというのが単純な事実なのじゃないか。

その「社会人」が、クリエイションにニッコリほほえむというわけのわからないことは、まさに血迷っているのでやめたほうがいいとわたしは思う。

クリエイターって、こんにちほとんどの場合、就職先のひとつでしかないだろ。

就職先は大事なものだし、自分の好きなことで食っていけるならそれはすばらしいことだと思うけれど、それでクリエイションにニッコリほほえむというのは、やはり血迷っているのでやめよう。

ニッコリほほえんでいる人は、意識が高いのだと思うが、残念なことに、旅の道中でニッコリほほえんでいる人はいない。

そりゃそうだろう、旅しているのに、旅の中でとつぜん「ニッコリ」ほほえむ必要がどこにある。

不気味すぎるじゃないか、道中で毒キノコでも食ったのか。

もし、ニッコリほほえむ誰かがインタビュアーになり、おれに対して、「クリエイションのよろこびというのは、やはり……どこにあるでしょうか」

と訊いてきたら、おれは、ものすごい無表情で、そいつをジッと見ながら、無言でサモサを食い続けるだろう。

サモサ、それは、インドのホットスナックだ。

こんな、宇宙みたいな無表情があるのか、という衝撃の表情で、おれはサモサを食い続ける。

それが、ネタじゃなく何かマジのものとして体験されて、精神の根底で「怖い」。

「ちょっと、○△□×で、あの、わたし無理かも」

何かよくわからなくなってきて、パニックが湧き上がってきて、インタビュアーは泣きそうになる。手足がバタバタ痙攣しだす。苦しい、何かものすごい苦しさが押し寄せてくる。

ネタで済めばいいのだが、そんな甘いものじゃない。

クリエイターというのはそういう事象領域へのアクセスを専門にしている人ということだが、おれ言っていることは現実感覚としてはあまりに非現実的だろう。

そんな「社会人」があってたまるかい。

世の中には、素敵なポスターや、きれいな缶ジュースの色彩、ホテル入口の格調高い彫刻や、サロン店内によく合うオルゴールサウンドなども必要なのであって、そうしたことを手がける人たちはすばらしい仕事をしていると称賛していい。

具合が良くてかわいい麦わら帽子も要るし、十代の女の子が耳たぶや首もとにつける、安いのにかわいい飾りも要るのだ。

掛値なく、おれは、そうしたものはうつくしい世界だと思う。

（もう最後の章だからということで、おれは気が抜けているのだ）

ただ、そうして価値観に照らして輝くものだけでは、われわれには「旅」がもたらされなくなってしまう。

おれが無表情でサモサをむさぼり食う絵面は、まったく価値観に照らして輝きはしないだろう。

十代の女の子が耳たぶや首もとに安くてかわいい飾りをつけているのを、価値観に照らしてかわいがらないでくれ。

若い女の子の往く旅路に比べて、「価値観」なんて、ホームセンターの

隅っこに積まれている使用済み段ボールぐらいの値打ちしかないだろ。
そのことがわからない者は、日本中のお地蔵さんすべてに独自の名前をつけて、それを自分で暗記するまで家に帰れないという刑に処す。
現代、「見下す人々」が数多くいるのは、率直に言って息苦しいところだ。
一方、空想で自信を補充しているタイプにも、いささか閉口させられることは多いが、うーん……
やはり、どちらがマシ、みたいなことは言えないらしい。
ただの程度問題でしかないな。
旅に及ぶ自信を、じゅうぶん得てきている人は、しずかで満ち足りていて、話もわかるから、とにかくそういうのがいい。
とにかくそういうのがいい（無力なごり押し）。
見下す人々は、じっさいに存在してしまっているし、空想で自信を補充する人々も、じっさいに存在してしまっている。
たぶん現代においては、多くの人が、
「なんか、誰ともきっちり話が噛み合わない」
という違和感を抱えていて、その違和感がもう不動の日常となったまま、日々を暮らしているというところがあるのだと思う。
自信の大半が、「覗き見」で得てきたもので、旅に及ぶ自信と言われると、正直スッカラカンだったりするからね……
そりゃ、話が噛み合うはずがない。
港から出たことのない小舟ポンコツ丸Aとポンコツ丸Bが、それぞれ七つの海を踏破したマホガニー帆船と鋼鉄軍艦の自信から話しており、それでもそれぞれの口調と自意識は謙虚なつもりでいるのだから、それはもう噛み合いようがないのだ。
あなたの旅を導く、父がいない、ということはありえない。
だいいち、旅という事象はあなたのものではないし、そもそも人のものではない。
原初―永遠、子―父という現象なのであって、あなたにそれがあるとかないとかいうことではそもそもない。
その事象に、体の真ん中をビタッと合わせるという、知識と根性が、あなたにないだけだ。
「永遠」そのものから余り風が吹いてくる。そこに含まれている芳香が何かを教えている。
「こっちだ」
「来なさい」
おれはいつも、それに対し、そうですか、そうですか、と従っている。
それにしか進行方向がないのだから、おれはもう従うしかない。
進行方向に従っていると、何か妙なものに包まれていて、歩いたすべてはふと気づくと旅になっている。
夜中に、うまいラーメンが食いたいなぁと思ったとき、おれは第一に検索するのではなく、第一に祈っている。
いちいち儀式をするわけではない、ただ、秒で祈っている。
それはもう、おれの精神の基本設計でそうなっているのであって、いちいち意識的にそうしているというわけではない。
うまいラーメンに行き着くのに、またそれに出会うのに、祈る以外の方法なんてあるかぁ？
秒で祈り、次の秒でスマートフォンで検索している。
検索し、見つかったとおりに車を走らせると、やがて窓から、トンコツが熟成した独特の博多ラーメンの芳香が……（当たり前）
旅というのはそういうものだ。
祈れば、祈りは聞き遂げられていて、父はそれについて、教え、導いてくれていて、そのことは聖霊の包囲と通知を伴っており、気づけばそれは旅になっており、気づけば自分は夜中に博多ラーメンをすすっている。

そのことをまざまざ体験するとき、あなたは魂から震えるだろう。
自分の文章で猛烈に腹が減ってきたのでそろそろおしまいにする。
すべてのことは、旅および、旅に及ぶ自信でよろしくということ。そのことから目を背けて空想とか見下すとかで自信の補充をするのはやめよう。社会人は社会人をやめて仕事をしろ。クリエイターは旅を経てきたフリをやめて父から教わりながら一歩ずつ進みなおす子になれ。ニッコリするのをやめて真顔で精髄に震えろ。
これにて一件落着、ハッピーエンドということにしておきたいが、どうにも引っかかることがひとつだけ残る。
それは、やさしさ一件についてだ。
なんだかとつぜん、脈絡のない話をぶっこんでしまったように思えるが、どうしてもこのことが、今回は最後に残ってしまう。
われわれはここ数年、結果的に、やさしさを「叩いて」きただろう。それはもう徹底的にだ。二度とその人が面を上げないように。
何かひとつのことがきっちり終わってしまうように。
なぜそうなったのかわからない。なぜそんなに叩いたのかわからない。けれども結果的に見てみればそうだ。やさしさを叩いてきた。
あるいはこう考えるべきだろう、
「われわれがここ数年で、なぜか『問答無用』というほどまでに駆り立てられて、血眼（ちまなこ）になって叩いて潰してきた人たちの中に、〝やさしい人〟は混ざっていなかったか？」
何であれば、われわれはそのやさしい人をこそ、選び抜いて抽出的に、叩いてきたのかもしれないのだ。
そうしたことのしわ寄せは、必ずこの先にストーリーとして現れてくる。
そのことが、突如の暗雲をもたらすのか、それともそうではない、無垢の風が透明に吹き流れるのか、わたしにはわからない。本当にわからない。ただ何かしらの形で、この「やさしさ一件」のしわ寄せはこの先に現れるはずなのだ。そのときになってわれわれは混乱しないために、このことを覚えておかなくてはならない。
やさしさ一件のこと。われわれは、やさしい人を恣意的に抽出し、血眼になって叩いた。そのことのこころあたりが、ゼロだとはきっとわれわれは誰ひとり言えないはずだ。
われわれはそのときごと、急激な「正義」に駆り立てられ、はっきりとした悪を発見し、憎むまま悪を断固として叩き、被害者の尊厳をいくらかでも恢復する側に旗を打ち立て、そのことにとてつもない高揚を得て誇った。
けれども、ふと気づいてみると、われわれの周囲にやさしい人はひとりもいなくなった。
いま、尊厳を持っているのは、ただのエロい人であって、やさしい人ではない。
そうして、いつのまにかわれわれは、「やさしさ」それじたいから縁を断つということを選んだ。
われわれはこの先、すべての文脈に「やさしさ」は存在しないという前提で物語を進めていくことになる。
色盲の人は、三つある色覚錐体のうちどれかの感度が弱い、ないしは錐体の感度それじたいが欠落していることで発生するそうだが、われわれはこの先、そうしてやさしさ錐体の感度が欠落しているのだというような、いわば「やさしさ盲」の者たちとなって生き進んでいく。
仕事を主題にするつもりだった社会人が、いつのまにか身も蓋もない権力の走狗となり、神韻を主題にするつもりだったクリエイターが、いつのまにか不機嫌とニッコリを往復する血迷ったものとなり、誰も彼もが「旅」を失い、推し活とマウント活で自信を補充するようになり、ZAPやリセットで騒がしさとわざとらしさばかりが起こるようになってしま

ったとして、そうしたことのすべてはひょっとすると、このやさしさ一件、「やさしい人を抽出して叩いた」ということとつながっている可能性がある。

世の中を見渡したかぎり、二〇二五年七月の現在、ひょっとしたらそのやさしい人を叩く件についてはそろそろいったん落ち着いたのかもしれないけれども、そうして平穏がもたらされたとしても、われわれのやったことは必ずレコードされていて、この先のストーリーのどこかにまるで伏線を回収する手続きのように、仕組まれたシーンとして現れるはずなのだ。

それはいったいどういうものになるのだろう。まったくわからないが、演算的にはきっと重く厳しいものがもたらされるはずであろうところ、奇妙なことに、わたしのアンテナにはいまのところそこまで不吉な風は吹きこんでいない。われわれの足許がそこまで不穏な潮流に浸（ひた）されているとも感じない。それはわたしの気のせいなのか、予感なのか、ただの見当はずれなのか、もちろんどのようにも確からしくはなりようもなく、「はてさて」と言うことしかできない。

決して放念するわけにはいかないであろう、「やさしさ一件」の咎を残したまま、思いがけない穏やかさの中で、なぜかじっさい、きょうわれわれの旅は続くようだ。

それで、はてさて、どうなるものやら、それでは共に、佳き旅を得ますように。

［バカにするこたぁない、ただ、やさしさ一件は忘れないでいこう］